
ヴァンパイア・オブ・リリカル

ジョージ・ワシントン三世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイア・オブ・リリカル

【Nコード】

N9667L

【作者名】

ジョージ・ワシントン三世

【あらすじ】

【第一部】

神のミスにより死亡した主人公。彼は神に生き返らせるように要求するが拒否される。別世界で蘇生するか死ぬかの二択を求められた男は、別世界での蘇生を選ぶ。送られた世界はなんと『リリカルなのは』の世界だった。しかも彼の肉体は何故か『ジョジョの奇妙な冒険』に登場する悪の帝王DIOのものだった！！

人を遥かに超越した不老不死の肉体、そして世界を支配するスタンド能力。だがそれ等の力を得る代償に、太陽の下を歩けない

身体となつてしまった！！戸籍も頼れる友人もない一人ぼっちの世界で彼は歩みだす

【第二部】

激闘の果てにプレシア・テストロツサを倒したディオー！しかしそれは、物語の序章に過ぎなかった！次元世界を恐怖に巻き込んだロストロギア闇の書。その主はまだ幼い少女でしかない八神はやてだった。守護騎士達は主の為に、騎士の誇りさえ捨てる覚悟をもって戦う。しかし騎士達は知らなかった。自分達の行いが最悪の男を地獄から解き放ってしまうことを……闇の書が完成する時、あの男が蘇るッ！

【番外部】

空条承太郎に続いて、三度目の敗北を味わったDIO！だが彼は死んでいなかったッ！そして飛ばされたハワイで、一人の少女と出会う。更にミッドや地球を初めとした世界では、S級次元犯罪者ジェイル・スカリエッティが来るべき祭りに備えて、着々と準備を進めていた。……DIO本人を主人公とした新たなストーリーの幕が開くッ！

【第三部】

新暦0073年4月3日

S級次元犯罪者ジェイル・スカリエッティを指導者として九つの管理世界が離反。

反管理局連合アープ『Anti Administrative Bureau Union』を名乗り

時空管理局に対して宣戦布告した。

時は新暦0075年。

戦局は膠着状態であったが、つい最近になってアープのエイジエンツが管理世界、管理外世界問わずに散らばったロストロギア『レリック』を搜索している事を察知。

アープ軍の指導者が天才的な科学者でもあるジェイル・スカリエッティである事を考慮して、アープ対策委員会の委員長レジアス・ゲ

イズ中将の主導のもと、最高評議会直属の特別作戦部隊ヘルシングが創設される。

ディオとDIOそしてDIOとジョースター家の1世紀半にも及ぶ因縁を断ち切る時が来たッ！

スタンドリスト

リリカル世界でのジョジョキャラ達

ジョササン・ジョースター

考古学者として名を馳せる。

また1889年、幼馴染のエリナと結婚！一児を設ける。
そして1900年、心臓発作で短い生涯を終えた。

ジョージ・ジョースター

旅先で知り合ったエリザベスと恋に落ち結婚。

だが翌年演習中の事故で死亡。

妻のエリザベスは身籠ることはなかった。

これによりジョースター家は自然消滅。現在のイギリスには廃墟が残っている。

ダリオ・ブランドー

知人と口論の末に殴り殺される。

まだ結婚する前の事なので、ディオは生まれなかった。

ロバート・E・O・スピードワゴン

ロンドンで死体で発見される。前後の状況からして、切り裂きジャックの仕業ではないかとささやかれたが詳細は不明。事件は迷宮入り。

ルドル・フォン・シュトロハイム

誇り高きドイツ軍人として名誉ある戦死を遂げた。

だが彼の誇り高き心は、ドイツの若者達に受け継がれることになる。

柱の男

カーズが生まれる前に地盤沈下の影響で全員死亡。
よって石仮面は作られなかった。

ウィル・A・ツエペリ

学者の父に憧れ、彼もまた学者になる。
多くの貴重な遺跡を発見していて、現在においても名が残っている。

『スタンドリスト』

【スタンド名】
ザ・ワールド

【本体】

ディオ・ブランドー（本名不明）

【存在タイプ】

人間型

【能力タイプ】

近距離パワー型

原作&無印

『破壊力 - A / スピード - A / 持続力 - A
/ 射程距離 - C / 精密動作性 - B / 成長性 -

B

第二部

『破壊力 - A / スピード - A / 持続力 - A
/ 射程距離 - C / 精密動作性 - A / 成長性 -

『B』

タロットの21番目のカードが名前の由来。逞しい体つきをした人間型のスタンド。デザインの特徴としては三角形のマスクを被ったような顔、背中に付いたタンクのような物体、手の甲にはその能力を象徴するかのような時計のマークがある。

トップクラスの破壊力とスピード、発射された銃弾をもつまみ取る精密動作性、なおかつ近距離パワー型の中では10mと反則的に長い射程距離、そして『スタープラチナ』を凌ぐ長さで「時を止める」能力を備える。吸血鬼である本体の不死性もあって、戦闘能力だけを評価するならば間違いなく最強と呼べる存在。第三部時点でDIOとディオ、二人とも三十秒までの時間停止を可能としている。

【スタンド名】

アルジーヌ

【本体】

プレシア・テストロッサ

【存在タイプ】

人間型

【能力タイプ】

範囲型

『破壊力』	-	C	/	スピード	-	B	/	持続力	-	A
/ 射程距離	-	B	/	精密動作性	-	C	/	成長性	-	A

アルジーヌはラテン語で女王を意味する単語。

紫色の甲冑を着込んだ人型のスタンドで、手には双剣を持っている。半径100m内にいる生物の認識時間をずらす能力を持っており、範囲内にいる者は、本来の時間よりも10秒前の光景（自分以外）を感じるようになる。視覚だけではなく嗅覚と聴覚にも作用し、効果が無いのは触角と味覚だけ。

一見すると、それ程でもないような能力だが、戦闘において五感の内、三つが奪われるのは死に直結すると言っても過言ではなく、本体が優秀な魔導師である事もあって、総合的な戦闘能力は現在では最強。

よって彼女を倒す為には視覚、聴覚、嗅覚以外の探知方法を得るしかない。

【スタンド名】

ジョナサンの肉体に発現したスタンド

【本体】

ジョナサン・ジョースター（ディオの首から下）

【存在タイプ】

標準型

【能力タイプ】

範囲型

詳細は不明。

だが本編の描写からジョセフ・ジョースターのスタンドであるハーミット・パープルに類似した能力だと思われる。よって本作品においては、ジョセフの能力とほぼ同一のものとして扱う。

イバラ状のスタンドでカメラでの念写、TVでの念聴といった探知系の能力がある。

射程距離は十数メートル程度のようなが、探知できる範囲は一つの街が丸ごと入るほど。

その形状を利用してロープのように使ったり（自重程度は支えられる模様）、波紋を流すことで高圧電線のように使ったりすることも可能。本体であるデイオは吸血鬼なので波紋法は使えない。だがもしかしたら捕らえた相手を気化冷凍法で凍らせられるかもしれないが、そのところは不明。

【スタンド名】

レディオヘッド

【本体】

レオ・ヴェルナス

【存在タイプ】

人間型

【能力タイプ】

近距離パワー型スタンド能力

『破壊力：B

スピード：B

射程距離：D

持続力：C

精密動作性：A

成長性：A』

指定した空間と空間を繋ぐことが出来る。この能力のより密室殺人などを起こす。後繋げている空間の隙間に隠れることができるが、隠れている間は繋げている空間の入り口と出口を消せないためそこから侵入もしくは砲撃などをされると詰む。

【スタンド名】

ビク・マッスル

【本体】

チャールズ・アトラス

【存在タイプ】

無像型

【能力タイプ】

近距離パワー型

『破壊力 - A / スピード - B / 持続力 - C / 射程距離 - ? / 精密動作性 - A / 成長性 - E』

自身の肉体を鋼のように硬化するスタンド。

打撃には滅法強く、スバルのパンチをモロに喰らったりエリオの槍を頭に喰らってもノーダメージ。

だが火には弱く、フリードの火炎で焼かれた。

【スタンド名】

リベリアン・ガール

【本体】

スバル・ナカジマ

【存在タイプ】

人型

【能力タイプ】

近距離パワー型

『破壊力 - A / スピード - A / 持続力 - B / 射程距離 - D / 精密動作性 - B / 成長性 - C』

詳細は不明。

スバル・ナカジマに発現した人型のスタンド。

全体的に青色でスリム。だが純粋なパワーだけならば星の白金にも匹敵する。

スバルはスタンドと本体で同時攻撃するので、非常に厄介といえる。

【スタンド名】

リボルバー

【本体】

ティアナ・ランスター

【存在タイプ】

融合・憑依型

【能力タイプ】

遠距離操作型

破壊力	- A /	スピード	- C /	持続力	- D /	射
程距離	- A /	精密動作性	- E /	成長性	- B	Ⓔ

デバイスと融合する事で、そのデバイスに、あらゆる物を貫通する能力を追加させる。

文字通り、どんな物でも貫通可能であり、高町なのはのバリアだろうと核シェルターだろうと、この能力の前では無駄。防御不能の能力。

有効範囲は半径100m（撃った場所から）範囲から出ると効果は消滅する。

だがその能力を追加出来るのは六回だけであり、深夜0時になるとオートリロードされるが、それ以外の方法ではどんな手段を用いてもリロード不能。つまりは、一日六発限定の防御不能の弾丸。

【スタンド名】

ヒストリー・ゴースト

【本体】

エリオ・モンディアル

【存在タイプ】

人型？

【能力タイプ】

独り歩き型

破壊力 - ? / スピード - ? / 持続力 - ? / 射

程距離 - B / 精密動作性 - ? / 成長性 - E 〇

本体と全く同じ姿の分身を出す。

分身には実体があり、本体の能力と完全にシンクロしているため、
実質的には本体が二人に増えるスタンド。ダメージもシンクロして
おり分身がダメージを受けると本体もダメージを受ける。

【スタンド名】

スミーズ・クリミナル

【本体】

キャロ・ル・ルシエ

【存在タイプ】

融合・憑依型

【能力タイプ】

遠隔操作型

破壊力 - E / スピード - E / 持続力 - A / 射

程距離 - A / 精密動作性 - E / 成長性 - A
『

無生物には憑依できない、生物のみに憑依可能なスタンド。

憑依した生物の能力値を底上げする力があり、対象となった生物は、パワー、魔力、回復力、耐久力などがワンランクほど上昇する。だが本体には使用不能。

キャロはもっぱら自分の龍に使用している。

【スタンド以外のオリジナル兵器一覧】

ガンデーヴァ

管理局の次元航空艦に常備されている対艦砲。

アルカンシエルには劣るが、それでもかなりの高威力で戦艦を一撃で沈める威力がある。

ガンデーヴァの発射は、その艦の艦長に一任されており艦長、またはそれに類する者でなければ発射命令を出せない。ちなみに日本の警察における拳銃と一緒に、撃てば大量の始末書が待っている。そんな事もあって局員の間では『始末書砲』と恐れられている。語源は、インドの伝承に出てくる、シヴァ神が勇士アルジュナに、パーシユパタという武器と共に与えた強弓ガンデーヴァ。

ヒューマンガジェット（通称ヒュート）

アーブ軍が始めて実戦投入して、後に管理局も正式採用するに至っ

た人型機械兵器。

インテリジェンスデバイスの技術を流用した、独自判断指揮システムによる優れた汎用性を持ち、数で勝る管理局との戦争を、互角以上に持ち込んだのは、この傑作兵器あつてこそ。

これを撃破するには、最低でもBランク相当の実力がなければ難しい。

ベル

アープ軍の最新鋭ヒュート。

外見は ガンダムに登場したMS『ネモ』をイメージしてくれると分かり易い。

レーザーライフルとサーベルを標準装備しており汎用性も高い、その上管理局のヒュートとは能力的に差がある。

随時更新します。

ジョジョの奇妙な冒険を知らない人へ

注意！この資料には『ジョジョの奇妙な冒険』のネタバレが多量に含まれます。

今後、『ジョジョの奇妙な冒険』を読む予定の方は読まないほうがいいと思います。

【用語説明】

『スタンド』

《基本説明》

スタンドとは、「ジョジョの奇妙な冒険」の第3部から登場する、「特殊な能力」のこと。

スタンドについて簡潔に説明するところなる

- ・世間で言う、いわゆる超能力
 - ・超能力をイメージ化したもの
 - ・生命エネルギーが作り出すパワーある像^{（ジョジョン）}
- ちなみに、「スタンド」の語源は、「そばに立つ（スタンド・バイ・ミー）」から来ている。

《スタンドの原則》

- ・一人のスタンド使いに、スタンドは1体である。
- ・スタンドが傷つくと、そのスタンドの本体（スタンド使い）も傷

つく。逆に、本体が傷つけばスタンドも傷つく。

・スタンドは、スタンドでしか接することができない。つまり、スタンドはスタンドでしか倒せない。ただしこの作品においては、魔法でも攻撃可能。

・スタンドを見ることができるのはスタンド使いと異能者だけである。

・スタンドは、本体から遠くなるほど、パワーが弱くなる。

・スタンド使いとスタンド使いは引かれあう。

・スタンドは、そのスタンド使いの精神力で操作する。精神が弱ければ、スタンドのパワーも弱い。

『石仮面』

製作者不明の石製の仮面。血液の付着をトリガーとして石仮面から出てくる骨針は脳を突き刺して、被っていた者の脳を刺激、吸血鬼へと変貌させる。吸血鬼となったものはピーク時まで若返り、強力な生命力と戦闘能力を持つようになるが、性格が邪悪化し、日光（紫外線）にあたると身体が消失してしまうリスクを持つ。また、人間以外の生物にも同様の効果をもたらすことが可能。

Part 2で、高等生物「柱の男」のカーズが究極生物になるために作成したものとされた。

『波紋』

東洋の仙道に伝わる秘術のひとつ。独特の「呼吸法」により血液中のエネルギーを蓄積し、生命エネルギーを活性化させる。呼吸法により練り上げた生命エネルギーが「波紋」に見えたことから、ツェペリにより命名された。「波紋の呼吸」で作り出されるエネルギー

は「太陽光と同じ波動」であり、強い波紋エネルギーは太陽光に弱い吸血鬼を死滅させる事ができる。なお、波紋にはいくつかの種類があり、中でも山吹色の波紋疾走が最も波紋エネルギーが強い。

『弓と矢』

製作者不明の石矢と弓のこと。この矢に射抜かれた者（人間に限らない）は、スタンド使いの素質があれば致命傷になるような位置を射抜かれていても死なずにスタンド使いとなり、そうでない者はそのまま命を落とす。ただし、射抜かれ瀕死になったがクレイジー・ダイヤモンドによる治療で生き延びスタンド使いとなっている康一や、鎭の破片で指を傷つけただけでスタンド使いとなったPart 6の空条徐倫などの例もある事から、単純に矢に射抜かれたダメージで死ななければスタンド使いになれると言う可能性もある。鎭は50,000年ほど前に地球に飛来した隕石を加工したもので確認されている矢の数は6本（多くの情報はPart 5に登場）。ちなみに「弓」及び「矢」の胴体部分には、特に特殊な能力はない。

【人物紹介】

『DIO』

《略歴》

本名はディオ・ブランドー。DIOと表記されるようになるのは第三部から。

元は呑んだくれの父、ダリオ・ブランドーと二人で暮らしていたが、

ダリオを東洋人から購入した毒薬で殺すと、ダリオが昔助けたという貴族『ジョージ・ジョースター卿』の下へと向かった。

デイオはそこでジョナサン・ジョースター（ジョジョ）と出会う。デイオはジョースター卿の一人息子であるジョジョを追い詰め墮落させる為に、あらゆる手を使った。しかしデイオと思惑とは裏腹にジョジョは持ち前の爆発力を発揮。大きく成長していく事となる。

大学卒業間近、ジョジョとデイオは旗から見れば親友となっていた。しかしそれはデイオの策略に過ぎず、偽りの友情である。そんなある日、ひょうな事からジョジョに、ジョースター卿を毒殺しようとしていた事がばれてしまう。ジョジョは証拠を突き止めるためにロンドンへ向かい、デイオはジョジョを抹殺する為に、策を練り始める。

デイオはジョジョ抹殺計画に一つの物を使おうと計画した。それが『石仮面』である。街でぶつかった浮浪者に実験と称して石仮面を被らせ殺すが、そこで信じられない事が起きた。殺した筈の浮浪者が吸血鬼として蘇生したのだ。偶然にも太陽の光により、吸血鬼は滅び九死に一生を得るが、腕を怪我してしまう。

石仮面を持ってジョースター邸に戻ったデイオは、ジョジョに追い込まれていた。僅かな時間で証拠を掴んだジョジョに驚愕しつつも、ジョジョを抹殺しようと思案する。しかし時既に遅く警官隊に屋敷は囲まれており、デイオはジョジョに逮捕されると言う。だがジョジョが油断したその瞬間、石仮面とナイフを取り出しジョジョを襲う。しかしジョースター卿が身を挺してジョジョを庇い、何とか助かる。デイオは警官隊の一斉発砲により急所を貫かれていた。

だがデイオは蘇生した、吸血鬼として。

蘇ったデイオは屋敷内の全ての人間を殺そうとするが、ジョジョの機転により瀕死の重傷を負ってしまう。その後、デイオはあらゆる手段を使ってジョジョを殺そうとするが、結局は波紋法と呼ばれる業を習得したジョジョに破れ、肉体を滅ぼされてしまう。

幼馴染のエレナと結婚したジョジョ。だがその新婚旅行中に悲劇

が襲った。

デイオは生きていたのだ、首だけとなって。

ジョジョの隙を突いて瀕死の重傷を負わせたデイオは、ジョジョの肉体（即ち首から下）を奪おうとするが、ここでもジョジョの奮闘により失敗。共に海底へと沈んでしまう。

これが第一部の流れである。

しかし第三部においてDIOは復活した。海底で100年の時を生き永らえたDIOは、己の仇敵であるジョースターの血族を抹殺しようとする。新たに得たスタンド能力を使い、ジョナサンの孫であるジョセフ・ジョースター達を追い詰めるが、最後はジョセフの孫であり第三部の主人公である空条承太郎に破れ死亡する。

だがDIOが与えた影響は強く、全てのストーリーにおいて直接的または間接的に関わっている。ちなみに第五部の主人公であるジョルノ・ジョバァーナはDIOの息子である。

《スタンド》

ザ・ワールド
世界

【破壊力A / スピードA / 持続力A / 射程距離C /
精密動作性B / 成長性B】

タロットの21番目のカードが名前の由来。逞しい体つきをした人間型のスタンド。デザインの特徴としては三角形のマスクを被ったような顔、背中に付いたタンクのような物体、手の甲にはその能力を象徴するような時計のマークがある。

承太郎のスタープラチナと同様の近距離パワー型で、高いパワーとスピードを有する。なおかつ近距離パワー型の中では10mと反則

的に長い射程距離を持つ。D I O自身は「パワーも精密さもスタープラチナより上」「最強のスタンド」と豪語するほどである。ラッシュは口癖「無駄無駄」を連呼する事から「無駄無駄ラッシュ」と呼ばれ、凄まじい威力を誇る。

さらには、D I O曰く「世界を支配する」能力により、自分以外の「時を止める」ことができる。初めは一瞬だったが、ジョナサンの体が馴染む度に停止できる時間が延長し、ジョースターの血統であるジョセフを吸血する事で飛躍的に能力を高め、登場時点で5秒、最終的には9秒まで伸びた。なお、厳密には「時間が止まった世界」で「9秒」と言うのは妙な表現で、D I O本人もそれを口にしていく。また、D I Oは不老不死の吸血鬼となっているため、時を止めている間に自分の肉体だけ時間が進んでいても老化の心配がない。そのため、この能力を高めたり多用したとしても全く問題がなかった。時を止めた場合、同じタイプのスタンドを持つ者以外はその間のD I Oの動きを認識できないため、その間にD I O自身が動けば他者はD I Oが瞬間移動をしているような錯覚に陥る。この効果を利用して、時間の止まった状態で承太郎の体の周囲にレストランから奪った無数のナイフを投げつけ回避不能の状態を作り出したり、頭上からマカダム式ロードローラーを叩き付けるなど、数々の衝撃的な攻撃を繰り出した。

ちなみに時を止められるザ・ワールドというスタンドはD I O自身の「時間の束縛から自由になりたい」という潜在意識の発露である。

《吸血鬼の能力》

気化冷凍法

波紋法とは対極の技。体から水分を気化させて熱を奪い、触れた相手を一瞬にして凍らせる技。波紋は血液のエネルギーなので、血管ごと凍らせることで波紋を起こせなくするために編み出した。デイオはこの技で攻略不可能といわれた技「稲妻十字空烈刃^{サンダー・クロス・スプリット・アタック}」をもつダイアーさえも破り、凍ってしまったダイアーを冷酷にも砕いてのけた。Part3では使用することはなかった。

スペース・リバー・ステインギー・アイズ 空裂眼刺驚

眼球内の体液を弾丸の様に飛ばす攻撃。この技でジョナサンを殺害した。後に吸血鬼と化したストレイツォも使用し、彼により命名された。気化冷凍法と同じくPart3では使用されていないが、格闘ゲーム版では必殺技として実装されている。ドラマCDにおいても使用した事があるが、名前をつけて使用したのはPart2でのストレイツォが最初であり、その名前を知る由がないはずにもかかわらずこの名前を発している。波紋法により、防御が可能。

他生物のゾンビ（屍生人）化

牙や指先、血管針などから他の生物の血液を吸収する際、「吸血鬼のエキス」を注入してゾンビ化させ、支配する能力。配下となった生物は理性が低下し、多くは凶暴な怪物となってしまうが、稀に知能を残したままゾンビになる者も居る。凶暴化しても変身前だった頃の記憶や嗜好は多少残っており、嗜好については理性の箍が外れて強くなる傾向がある。また死体にエキスを注入し、復活させたり、キメラを作ったりする事もできる。エキスを注入せず吸血のみを行うことも可能。その場合血を吸われた人間は死亡する。

屍生人は吸血鬼の能力で生まれた存在なので、波紋や太陽光を受け

ると消滅する。

なお、ジヨナサンの肉体のため、あるいは吸血鬼化しても遺伝子的には人間であるためか、ジヨルノ他人間の女性との間に生まれた息子達には吸血鬼の能力や特徴は受け継がれていない。

肉の芽

吸血鬼であるDIOの細胞。これを額に植えつけられた者は、脳を刺激されてDIOに対して、カリスマに対するその様な憧れの感情を抱くようになり、DIOに従う忠実な部下となる。摘出しようとする、動いて脳を傷つけたり、触手を出して摘出しようとする者の脳に進入しようとするため、引き抜くには余程のスピードと精密さ、そして攻撃に屈したりうるたえたりしないだけの精神力が必要になる。

花京院とポルナレフは、当初、この「肉の芽」を埋め込まれてDIOの刺客として襲ってきたが、承太郎の「スタープラチナ」によって洗脳を解かれ仲間になった。

肉の芽を埋め込まれた者は、数年で脳を食いつくされ死ぬ。

吸血鬼の一部であるので、波紋の力で消滅させる事が出来るが、これは引き抜いた後の処置となる。（コミック版13巻参照）。同様に、太陽の光で消滅する（コミック版17巻参照。こちらの場合、前髪が長い花京院はともかく、髪をアップにして額を出しているポルナレフを操り続けている描写がある）。OVA版ではアヴドウル「魔術師の赤」の炎で焼き払われている。

『ジヨナサン・ジョースター』

由緒ある英国貴族、ジョージ・ジョースター卿の一人息子。

ジョースター家の養子となったデリオ・ブランドーとの出会いにより、彼の運命は大きく揺れ動く。ジョースター家の財産のつとりを密かに企てるデリオは、ジョースター家の正当な跡取り息子であるジョナサンを精神的に追い詰め墮落させるため、執拗な嫌がらせを繰り返す。デリオの策略によりジョナサンは次第に周囲から孤立する。しかし、それでもデリオに対して屈伏することなく立ち向かっていくタフさと爆発力を発揮し、大きく成長を遂げることとなる。

デリオとの出会いから7年後、ジョナサンは身長195cmの巨漢に成長。心身共に立派な紳士として成長を遂げていた。大学ラグビーで活躍する傍ら、考古学を学ぶようになり、父の所持する「石仮面」を研究する。この頃にはデリオとは友人となっているが、彼自身は幼い頃の体験からデリオに対して友情を抱けずにいた。大学卒業間近となつて父・ジョージ・ジョースターが病に倒れるが、デリオの父親が死の直前にジョースター卿に宛てた手紙を発見したことで、デリオがジョースター卿を病死に見せかけて毒殺しジョースター家の財産をのつとろうとしていることに気づく。ジョナサンは解毒剤を入手し父を救うため、またジョースター家を守るため、単身ロンドンの貧民街・食屍鬼街オウガイストリートに赴き、スピードワゴンと出会う。

彼の協力のもと、デリオに薬を売った売人を見つけ出し解毒剤を手することに成功。薬の売人を捕えてジョースター邸でデリオを待ちつけ、毒殺の容疑で警察に引き渡そうとする。しかし、追い詰められたデリオはジョースター卿を刺殺し、石仮面に秘められた能力を発現させてしまう。石仮面の力で不死身の吸血鬼と化したデリオを倒すべく邸に火を放ち、自身も深手を負いながら辛くもこれを倒した。その後偶然にもエリナの働く病院に搬送され、彼女の献身的な看病により意識を回復。実に7年ぶりの再会を果たした。

デリオとの闘いで負った傷がある程度回復し、エリナに付き添われて退院。その直後に、「仙道（波紋）」の達人であるウィル・A・ツェペリと出会う。彼はデリオがまだ生きていることをジョナサン

に告げ、石仮面に対抗するためには波紋の力が必要であると宣告する。ジョナサンはツェペリに弟子入りして波紋を修業し、これを体得。ディオを追う過程で師であるツェペリを失うが、彼が死ぬ間際ジョナサンに託した力で更なる成長をとげ、ディオとその一派を倒す。

1889年2月2日、エリナ・ペンドルトンと結婚。新婚旅行中、一時は倒したかに思われたディオに客船を襲撃される。喉元を貫かれて波紋を封じられ、死の淵に立ちながらもディオの配下を撃破。エリナと生き残りの赤ん坊を逃がすためその身を犠牲にし、ディオもろとも客船の爆発に巻き込まれ、船上にて壮絶な最期を遂げる。ちなみに、最後の最期ではディオに対して、奇妙な友情すら感じる」と述べている。作者はジョナサンのこのセリフが何故か大好きであり、ジョジョ屈指の名セリフだと思うのだが……残念ながら余り有名ではない。

以下がそのセリフ

「ディオ… 君のいうように
ぼくらはやはり ふたりでひとり
だったのかもしれない
奇妙な友情すら感じるよ…」

そして今 ふたりの運命は
完全にひとつになった…
そして… 船の爆発で消える…

幸……………せ…
せ…に……………エリナ」

自分的には最高の名セリフだと思うんですけどね〜
ちなみにディオはその後、復活します、ジョジョの肉体を使って……

ジヨジヨの奇妙な冒険を知らない人へ（後書き）

随時更新するかもしれません。

第1話

なんだ……ここは……
暗くて何も見えない。

「あの～起きてくれませんか」
声が聞こえた、女性の声。このような声色の持ち主に覚えはないので少なくとも知っている人間じゃあないだろう。

「いい加減に起きて下さいッ！」

「のあッ」

脳味噌が驚掴みにされたような感覚が奔り目を覚ます。
見たことのない場所だ……いや何だ此処は？
ただ何も無い真っ白な空間、そしてそこに俺の身体は浮いていた。
そしてもう一人……この空間に佇む少女がいる。見たことのない顔だ。容貌からすると外人だろう。

「すまないが、ここは何処かな？私は先程まで街にいた筈なのですか？」

状況はさっぱり掴めないが、焦りは禁物。こんな状況だからこそ冷静に状況を判断する必要がある。
だが内心ではそうはいかない。先程まで街にいて、気付いたら見た事のない空間にいるなど、まるで狐に化かされたような気分だ。しかもまだ牢屋に閉じ込められているなら現実味があるが、辺り一面が真っ白な世界なんて笑い話にもならない。

「実はですね。私はこう見えても神なんです」

「はぁッ!？」

新手の新興宗教か？まさか薬でもやってるのか、この女はッ！

しかし金髪の女は、薬物中毒者に見られるような常軌を逸した雰囲気はなく、寧ろ至って真面目な女性を思わせる。

「信じられないのは分かります。ですがこれを見てください」

「なっ!」

真っ白い空間に鏡のような物が出現して、映像が映し出された。

何かの事故現場にも見える……………この肉のカタマリは…………俺なのか？

そうだ思い出した！俺は確かバイトの帰り道に、トラックに轢かれて…………死んだのか…。

「クッはハハハはそうか俺は死んだのか…………はははっはは」

「あの気を落とさないで下さい」

「しかし神さまって、死んだら脳が停止して何も考えられなくなるだけだと思っていたんだけどな。……………三途の川っていうのも案外間違ってたのか、ええ神さま？」

「まあ三途の川ならありますけど……………ってそうじゃないんです！
！貴方には謝りたい事があるんです!!」

あるのか三途の川、と心の中で突っ込みを入れる。

しかし気になる事を言ったぞこいつ。謝りたい事だと。

「謝りたいこと？俺は神に謝られるような事をされた覚えはないのだが……」

「あるんですッ！！実は貴方が死んだのは何かの手違いでして、本当は死なない筈だったんです！！」

「なにッ！？」

「天界、人間風に言うと神が住む場所には、人其々の名前が記された蠟燭があるのですが、実は先日、係りの者が隣の方と間違えて貴方の蠟燭を消してしまっただんです！！」

蠟燭だと。まるでこち亀みたいだが……ってそんな場合じゃない。

「ふざけるなッ！！ならなんだア。俺はお前達の間違いで死んじまつたっているのかッ！！」

「うう………申し訳ありません！！」

「今すぐ生き返らせるッ！！」

「無理です。遺体の損傷が軽微なら特に問題ないのですが……。その貴方の遺体では問題がありまして、流石にあの遺体が蘇るのはこの世界の技術では無理です。仮に生き返らせた場合、この世界全体に大きな矛盾を生んでしまうのです！！」

脳内が火薬のように爆発する中で、冷静な思考が現在の状況を判断していた。

この糞神の言う事は理に適っている。死体が蘇った例は、以外にも結構ある。中には棺桶を埋める最中に蘇生したという例もある程だ。しかしながら俺の死体は、先程の映像を見る限りではハンバーグ状態。あんな肉の塊が蘇れば異常が発生するだろう。例え蘇ったとしても最悪の場合、どっかの研究機関に拉致されるのがオチだ。

「なら俺は……やっぱり死ぬのか」

力ない声でそう言う。
しかしながら

「いえ、生き返ることは出来ます」

帰ってきた答えは嬉しい否定だった。

「本当なのか！？しかし異常が発生すると言っていなかったか？」

「はい、この世界で蘇れば異常です。ですが別の世界ならどうでしょう？」

「別の世界？」

「そうです。最初から貴方という人間の存在しない別世界、平行世界とも言いますね。そこなら私の力を使って第二の生を生きる事が可能です」

「第二の生……つまり転生するのか？」

「違います。転生というのは、一度死んだ人間が天界を通り、そして新たな生命へと生まれ変わる事です。それは蘇生とは違います。

蘇生する世界では貴方の戸籍も何ありません。それでも貴方は蘇生しますか？」

「つまり何だ。俺にはこのまま死ぬっていう選択肢と別世界で蘇生っていう選択肢があるって事か？」

「平たく言えばそうなりますね。私としては戸籍等も用意したいのですが、その場合はかなりの大作業になってしまいます。天界のほうも人手不足という現状ですので、申し訳ないのですが、貴方一人に費やせる労力は新人の私一人なのです」

確かに世界中では、こうやって会話している間にもかなりの人間が命を失っているのだ。客観的に考えれば俺など十分恵まれているほうだ。世の中にはそれほど理不尽が溢れている。

しかしだからといって納得出来るほど、俺は聖人君子ではない。寧ろ利己的な人間だ。

折角、努力して大学に入ったのに、何故こんな中途半端に死ななければならぬのだという気持ちはある。だが一方で一つの欲求が叫ぶのだ……死にたくない。

そうだ、俺はまだ死にたくない。どんな形でもいい、生きていたい。

「……………分かった。その条件を呑む。それで別世界っていうのは具体的に何なんだ？」

蘇生して直ぐに死亡というのは止めてくれよ」

「それは……………ちょっと待って下さいね」

「おいつ待て」

何をこの糞神は、袋を探っているんだ。

まさかランダムで選ぶ算段か？

「あつ、どうやらリリカルなのはの世界ですね」

「いやいやいやいや、リリカルなのはって何だ？」

「あれ？変ですね。一応貴方の見たアニメから選んだのですが、知りませんでした？」

「アニメ………そういえばそんな題名のアニメを見たような気が………
………って、何でアニメの世界なんだッ！！」

「それは、神の力にも限界があるんです。大抵の事は出来ませんが、自分の知らない事は出来ないんです。同じ理由で私の知らない世界にも送れません。こう見えても私って人間界のアニメや漫画はよく見てるんですよ！！」

「いやいやいやいや、そんな笑顔で言っても納得出来る訳ないだろ。大体リリカルって！？もう知識なんて曖昧だし、今残っている記憶なんて、大まかな内容と某動画サイトにあったAIBOに召喚されるイメージしかないんだぞ！！」

「まあまあ、蘇生先候補としては安全な方ですよ。それともデンジヤラスな世界に行きたいんですか？」

「断固拒否する………それよりあっちに身体はどうなるんだ？元の世界の俺はハンバーグになってるけど」

「問題ないです。貴方の精神を私の創造した肉体に入れるだけです。から。それで私の世界干渉は終わりです」

という訳で私も次の仕事があるので、ここら辺でさよならです」

真っ白い空間に穴が出来たかと思うと、徐々に飲み込まれていく。

「ええい、お前達のミスにしては態度がでかいぞ!!」

「ごめんなさい、でも私達も忙しいんですよ。あつ、それと言い忘れてましたけど能力をつけておいたので、大抵の事じゃ死にませんよ」

「この糞神がああアアアアアアアアツツ!!!!!!」

肝心な事を先に言いやがれツ!!

能力って何だよ!!」

恨みの言葉を叫ぶが、俺は何も出来ず空間に落ちて行っただ。

「蘇生した身体は」

目が覚めた。

どうやら此処はどっかの森らしい。街にいきなり落ちてくるような事態は避けられたようだ。しかしかなり深い森だ、太陽の光が入ってこない、そのせいか辺りは薄暗い。だが糞神はリリカルなのはの世界と言っていた。俺の頼りない知識では、元の世界とそう時代は

違わなかった筈。こんな事なら全編を詳しく見ておくべきだった。最初のやつしか見てないし、おまけに知識も曖昧、これでは何が起きるのか殆ど予測不能だ。

「俺の身体はどうなっているんだ？」

服は着ている。黄色と黒の変な服だ。190cmくらいの身長、それにかなりの筋肉。まるでプロレスラーみたいだ。試しに木でも殴ってみようか。

糞神は能力を付けたと言っていた。もしかしたら前世？とは比べ物にならないパワーがあるかもしれない。

「ふんッ」

軽く木を殴ってみた。

そう、たったそれだけで、木は鈍い音を発てて折れていった。

「おいおいおいおい、アニメの世界に来たと言われていたが、これは正にアニメだッ！！何処の世界に軽く木を殴っただけで折る馬鹿野郎がいるッ！！」

少しだけ変な気分になってしまった。

だが考えても見て欲しい、軽く木を殴っただけで、木を折るのだ。一般的な思考を持つ人間なら興奮しても仕方ないだろう。

「まずは此処がどこだを確認する事が先決……か？」

俺には戸籍もなければ助けてくれる友もない。この平和な日本で戸籍無しの男など妖しい存在でしかない……いや此処は日本なのか？もしかしたら名前も知らない国なのかもしれないじゃあないか。

取り合えずこの森を出よう。

十分程度歩くと直ぐに、森の出口が見つかった。どうやらそれ程森の奥深くという訳ではないようだ。少しは安心した。

さて……………森を出るか。そう思ったところで異常が起きた。

「熱ッ！！」

一瞬、何が起きたか理解出来なかった。いやもつと言え、今でも何が起きたのか正確に理解出来ない。ただ俺は森を出ようとしただけ……………それだけで何故、こんな恐怖と熱さを感じるのだ。

「もう一度試してみるか」

二度目の正直、しかし結果は同じ。

森から出ようとした瞬間、頭に拳銃を向けられたような悪寒と恐怖、そして熱された鉄球に触れた様な熱さ。まさか結界とかいうのが張られているのか？

元の世界なら非常識だが、仮にも題名に魔法とあるのだ。結界程度があっても驚かない。

「糞がッ、どうなっている！！」

その後、四度五度試したが結果は変わらず、森の外に出ようとしただけで、身体中を焼かれるような悪寒が走った。

「何がどうなって……………ん？あれは川か」

何気なく川を覗き込む。糞神は俺の精神を別の肉体に入れるとか言っていた。俺の身長は175cm。それが15cmほど伸びていた

容姿も変わっていると考えたほうがいいだろう。

そうただそれだけのつもりだった。己の容姿の特徴を見るまでは

「ありえない……こいつは……ああ認める。俺は確かにこのキャラクターが好きだった。認めるさ」

だが他にもあるだろう。何故よりによつてこの男なんだ。

水面に映る姿は、金髪赤目の大柄な男。そして特徴的な服装。

容姿はまだしも、この服装は見間違えようもない。

「俺がDIOだとおおオオオオオオオオオオ！！！！！」

ディオ・ブランドー

『ジョジョの奇妙な冒険』における悪役。第一部と第三部におけるラスボスにして、全てのシリーズにおいて直接的、または間接的に関わってくる男、ある意味では影の主役とも言えるかもしれない。どうりで森の外に出られない筈だ。

DI0は吸血鬼、つまりは太陽の下を歩けない。

日常には適しない身体を与えた神に届くと信じて、俺は空に向かって絶叫した。

第1話（後書き）

まさかのDIOとなってしまう主人公。これからどうする？

第2話（前書き）

戸籍のない主人公！！一体どうする？

第2話

ⅡⅡ催眠術ⅡⅡ

森に潜むこと数時間後、漸く夜になり吸血鬼の夜がやって来た。

予想通り森からは簡単に出入れ、焼かれる事はなかった、つまりは俺が、吸血鬼となつてしまったのは覆しようもない事実だという事を、再確認した訳である。かなり凹むが、何時までもウジウジしていても何も始まらない。人里へ行くのが先決だろう。

街へ行くと、人々が話す言語が日本語だったのには安心する。どうやら此処は日本らしい。最悪の場合ではなくよかった。

駅には大抵その街の地図がある。それによると街の名前は海鳴市というようだ。聞いた事のない地名である。もしかしたら『リリカルなのは』の舞台となつた街かもしれないが、生憎とそんな詳しい事など覚えてはいない。

問題は色々ある。目下一番大事なのは戸籍。

戸籍がなければ金を稼ぐにもバイトのしようもないし、警察に捕まれば厄介な事になる。ディオの身体なんだから脱獄なんて余裕だろうが、出来れば厄介事は避けたい。

待てよ、ディオという事はスタンドも使える筈だ。時間停止能力を持ったスタンド世界。^{ザ・ワールド}あれを上手く使えば……………いや冷静

に考える。ディオの能力はスタンドだけじゃあない。気化冷凍法、肉の芽と多種多様、その中に便利な能力^{チカラ}はなかったか？

あるじゃあないか。第一部でやっていた催眠術。ポコってキャラに使ってジョジョ達をおびき寄せた能力だ。あれならたぶん後遺症も残らないだろうし、上手くいけば今後の生活においてかなり役に立つッ！

だがどうやれば使える？俺には催眠術の使い方なんてユニークな授

業は受けなかった。まあいい、物は試しという、適当な人間に使ってみるか。

目に付いたサラリーマン風の男に声を掛ける。

「すみません」

「！……何でしょうか？」

自分より遥かにデカイ外人に話しかけられたせいかな、少し驚いたようだ。

さて、催眠術をどうやって掛けるか………催眠術と言うのだから五円玉でもあればいいのだが、それは不審過ぎる。ならば他にセオリーなのは目による暗示だろう。これは他の作品でもよく使われる手法だ。何事も気持ち重要、相手の脳を支配するような気持ちで………話しかけるッ！！

「海鳴市役所へはどうやって行けばいいのでしょうか？」

サラリーマン風の男の目が虚ろになって言った。そして道順を律儀に答える。どうやら催眠術は成功したようだ。さて、どう解けばいいのやら………適当に何か言ってみようか。

「ありがとう、もういいですよ」

「ハッ、あれ俺は一体……」

混乱するサラリーマン風の男を置いて、俺は目的地へ向かう。他にも色々があるが、まずは身体を洗いたい。森に数時間もいたのだ、かなり汚れてしまった。

「サバイバル吸血鬼」

偶然発見した洞窟内で寝ていた俺は、ふと目を覚ました。もう日が落ちたみたいだ。

洞窟から出ると、川に行つて水浴びをする。伝承の吸血鬼は太陽だけじゃなく真水も駄目なのだが、この身体は何ともないので、そこらは大丈夫なのだろう。

しかし催眠術が出来たのは実に嬉しい事だった。御蔭である程度の問題は一時的に解決した。とはいってもあくまでも一時的にであり正式な戸籍があるに越した事はない。取り合えず店長や店員達に催眠術を掛けて、ファミレスでバイトしているが、もしも何かの拍子に、催眠術が解ければ面倒だ。

身体を一通り洗い終わると、スタンドである世界を出す。スタンド能力は同じスタンド能力者にしか見えないらしいが、魔法少女には見えるのだろうか？

いや、そんな事より今は、ザ・ワールドの能力を高めるほうが先決だ。

「時よ止まれ！！ザ・ワールド！！」

地に落ちる筈だった葉っぱが止まる。

0・1秒経過

0・2秒経過

0・3秒経過

0・4経過

0.5.....

しかし時間停止時間は0.5秒を刻む事無く、時が動き出す。

「まだ一瞬しか時を止められない……か」

当然と言えば当然だ。あのディオも最初は一瞬しか時を止められなかったのだ。スタンドとは精神力で操る能力、どうやらこの肉体は完全に馴染んでいるようだが、それでもDIOと同じ精神力がある訳がない俺では、未だに数瞬が限界だ。幸いにして格闘技にはそれなりに自信があるが、薄い記憶を思い出す限りでは、登場人物達は自由に飛んだり跳ねたり破壊光線を出していた。何かの事情で襲われる可能性を考慮すると、やはりある程度の実力は付けておきたい。

「ッ！！！」

何かが聞こえた。それも森の動物達が発てた音じゃあない。人の声、それも複数。

全神経を聴覚に集中、段々と会話がよく聴こえてくる。

「……これ……吸……月……脅して……」

「そ………吸血鬼………皆殺し………」

吸血鬼だとッ！！まさか俺が此処にいる事がばれた！？この世界にはSPW財団も空条承太郎もいない筈、ならディオを知る人間はいないのだ。なら奴等は何だ？聴覚だけでは正確な情報が分からない。物音を発てない様に、慎重に接近する。暫くすると一軒の廃墟があった。そこには黒服を着込んだ如何にもといった男達が六人。そして中心には縛られている少女。

「誘拐か……しかしただの誘拐にしては物騒過ぎる。それも雰囲気からして素人ではなさそうだ」

どうする、もしかしたら吸血鬼とは何かの表現かもしれない。それに躊躇う必要は無い。相手が例えプロだとしても、それは人に対して、俺のような……人を超越した存在には及ばない筈だ。躊躇う必要など無い……殺すか？

いや焦る必要はない。まずは出方を伺うのもよしだ。

「フンッ、これであの化物に一矢報いる事が出来る」

「ああ、人間様に逆らう連中には死をつてね」

「月村家には散々世話になったからな」

化物？何のことだ。

それに気になる単語を言った

月村家、催眠術

でこの街やその周辺の情報は、聞き出している。それらの情報によると月村家はここらでも名のある金持ちらしい事が分かっていた。そしてもう一つのキーワードである化物。様子からするとあの少女を指しているらしいが……

「あれは……」

成る程、なんとなくだが分かる。あれは俺と同じ……人外の怪物だ。ならばあの少女は俺と同じ吸血鬼なのかもしれない。いやそう考えるのは早計過ぎる。あの少女が、吸血鬼またはそれに類する者である確率は十分にある。元の世界ならば一笑に付していた事柄だが、アニメの世界であるなら普通にありえる事だ。

作品が違うなら、俺とは違った意味での吸血鬼

また

はそれに似た者と考えるのが、最も辻褃の合う解答だ。そしてあの少女は恐らく月村家とやらの者。そして奴等は月村家に恨みを持つた者達と考えるのが妥当。

しかしどうするか悩む。もし俺の推理が正しいなら、あの少女を助ければ月村家に恩が売れる。それに予想通り吸血鬼の一族ならばもしかしたら自体が大きく好転するかもしれない。その他、色々な打算を考えて

「こんばんわ、いい夜だね」

俺は救う道を選択した。

「貴様、月村の手の者か!!」

「いやいやいやいや、違うよ。偶然に君達の話し声を聴いてしまったね。興味を持ったんで来てみたんだ」

「そうか……………不運だったな」

顔色一つ変えず俺の頭に銃弾を放った。飛び散る鮮血、普通なら死ぬだろう。だが俺は断じて普通ではない。

「なにッ!!銃弾を喰らっても死なないだ!!貴様も吸血鬼なのか!!」

「それは俺の訊きたい事だ。その少女は……………吸血鬼で相違ないかな?」

「ああ!!そうさ、こいつ等は夜の一族と言われる吸血鬼の一族。

俺達人間にとつての天敵だ!!」

予想通り!!

思わず顔が歪んでしまう。

「そうか……いやしかし天敵というのは間違つてない。化物とは人にとつて共通の天敵だ。それは何故か考えた事があるかな？」

「化物が何を言う!!化物っていうのは存在が許されないのだ!!」

彼等が銃を撃ちまくるが、その全てが俺に致命傷を与える事が出来ない。

「それも一つの答えだ。しかし君達は失念しているようだ。化物が化物である所以を……。いいかね一つだけ教授してあげよう。化物とはただの人間には決して滅ぼせないからこそこう呼ばれるのだよ、即ち怪物とッ!!」

時よ止まれ

ザ・ワールド!!

0・1秒経過

“世界”が一人の男の頭を潰す

0・2秒経過

俺の蹴りが男の心臓を貫いた

0・3秒経過

“世界”が男の身体をボロ雑巾にした

0・4秒経過

俺の拳が男の頭を吹き飛ばす

0・5秒経過

“世界”と俺の二人の拳が男に命中した

そして時間は動き出す

「ハッ、あれ？何が起きたんだよ、おいッ！！どうして俺以外が全員死んでんだよ！！ハアオー」

「君が最後だ」

何も言わず頭を掴む。そこから血を吸収。その男の持っている全ての生命を奪いつくす。

やがて男はミイラのように干乾び

死んだ。

「糞がッ！！」

我に戻ると、近くにあった木を殴り倒していた。最初は殺す気などなかった。精々か痛めつけて情報を吐かせるだけのつもりだった。

吸血鬼となった者は理性が低下して、本能が強くなるとは知識として知っているが、まさかこれ程とは。

今さっき人を殺したというのに何の感慨もない。

自分の感情が操作出来ないのは始めての経験だ。これは弱点だ、克服しなければ……

しかし折角の機会だ。全ての死体から血という血を奪い尽くした。その御蔭か随分と気分がいい。残った死体は粉々にして燃やした。幸いここは人里離れた森、隠す場所には事欠かない。

「まあいい、しかしこれで事態が好転すればよいが……」

少女は未だ眠っている。

しかしそれは幸いだろう。もしも起きていたならばあの惨劇を目撃する事になっていたのだから。

月村家の位置は記憶している。というよりここ周辺の地理情報は完全に叩き込んだ。

流石はDIO。その頭脳も天才的だ。まるで物事をスポンジのように吸収出来る。

俺は少女を抱えると、月村邸へと向かった。

第2話（後書き）

次回は主人公in月村家。そういえば未だに主人公の名前が登場していない……………面倒臭いからデイトでいいかななんて悩んでしま
う。

第3話

「夜の一族との交渉」

その夜、月村邸はかなり騒がしかった。本来なら寝静まっている筈の時間に慌しく動き会話する人々。それだけ聞けば何かのパーティーでも開いているのかと思うが、その実情はパーティー等という華やかな物とは程遠い。うら若き月村家頭首、月村忍。彼女の妹である月村すずかが誘拐されたのだ。

事件は唐突に起きる。下校中だった月村すずかは、送り迎えの車に乗る時にいきなり現れた男にクロロホルムと思われる物を嗅がされ眠らされた。運転手は抵抗しようとしたが、相手もその道のプロらしく所詮は運転手でしかない彼に適う筈がなかった。結果として月村すずかは誘拐され未だに居場所は分からない。もしも今日になっても犯人側から何の連絡もない場合は警察に連絡しなければならないだろう。欲を言えば己の一族の秘密に関わる一大事、内密に事を終わらせたいが、すずかの命には代えられない。

「忍様!!!大変です!!!」

忍が部屋で頭を抱えていると、月村家に使えるメイドの一人であるノエルが大急ぎで入って来る。こんな時にこんなに慌てて入ってくるとは、良い知らせか悪い知らせかの二者択一。

「どうしたの!すずかは見つかったの!？」

「はい、今しがたすずか様のお姿を、確認致しました。ですがその

.....」

「どうしたの？」

どうにも語呂が悪い。どう説明したらいいのか分からないような感じだ。

今のノエルは予想外の事態に陥った者特有の表情をしている。

「兎に角、こちらへ!!」

ノエルの言うままに、向かった先には、報せを聞いて駆けつけた恭也と美由希がいる。御神流の剣士である二人はかなり腕が立ち、並大抵の相手なら一瞬で沈黙させられるだろう。

「忍、これを」

忍は恭也に言われるがままに、監視カメラの映像を見る。

そこには、気持ち良さそうに眠っている妹すずかと、それをお姫様抱っこしている190cm程の男が映っていた。

「あれが……犯人？」

「恐らくそうだろう。くつ、やられた。電話か手紙で要求してくると予測していたのが、完全に裏目に出た。あそこのすずちゃん、居たんじゃ敷地内の防犯装置を使う訳にもいかない」

妙手と言う他ないツ、と恭也は言った。あの男は一見すると無防備に見えてその実は全く隙のない。そして男は、ゆっくりと玄関に近付くと、チャイムを押した。

ピンポン

この緊張感には程遠い音が、緊張した屋敷内に響く。

その呼び出しを、忍は受けたッ！

実際に見たのは初めてだが、かなり広い豪邸だ。前回の命でもこのような邸宅はお目にかかった事が無い。だからこそ吸血鬼の居城としては相応しいとも言える。俺は戦いに来たのではない。この屋敷に住む者達と友好関係を結びに来たのだ。ならば此処は大人のマナーに乗っ取った紳士的な行動がベストッ！

チャイムを鳴らした数秒後。

「貴方がずかを誘拐した犯人ね。要求は何かしら？」

冷たい、まるでドライアイスのようにキンキンに冷えた声でした。ずかと呼び捨てにした事を鑑みるとこの者は、月村家でもかなりの実力者とみえる。しかし犯人だと間違われるとは……………うっかり失念していた。状況証拠では俺が犯人だと疑うのは打倒な判断だ。先ずは誤解を解かなければ。

「誤解しているようですが、私はこの少女を誘拐した覚えはありません。実は私は貴方達とは同類なのですよ」

さて、どう反応する？

もし本当に吸血鬼の一族ならば同類と聴けば、何かしらの反応はする筈だ。

「同類……………それは貴方が夜の一族だということ？」

よし食いついて来たッ！！

これで上手い具合に行く筈だ。

「夜の一族とは少し違つかもしれませんが、私は吸血鬼です。それに間違えはありません。私には色々な事情で戸籍も知り合いもなく一人でした。しかしこの身は吸血鬼。いつ狙われるか分かったものではありません。故に一人森の奥深くで暮らしていたのですが、数時間程前に同じ吸血鬼である少女が、誘拐犯らしき者達に捕まっているのを目撃したのです。幾ら人里離れた森で暮らす私といえど、流石に同族の危機を見逃す訳にもいかず、誘拐犯達を処理した後に、この少女を助けた次第です」

「……………」

だんまりか。いや周りの者達と相談しているのだろう。一応は嘘のない話だ。辻褄は合っている筈。だがこちらが真実を語っていると、いう証拠もない。このままでは拉致があかない。もう一押しするか。

「私が信用出来ないのは分かります。なので私が真実を語っている証拠として、この少女を貴方達の元へとお渡ししましょう」

羽織っていたマントをコンクリートの下に敷くと、少女を乗せる。そして俺自身は10m程下がる。もしも俺を問答無用で襲ってきた場合でも、ザ・ワールドが使える位置だ。

暫くすると屋敷から一人の男が出て来た。若いな……………まだ大学生かそこらだろう。しかしその動きは見た目と反して熟練している。一步一步に隙がない。男は少女の眠る場所へ行くと、何かを確認している。予想だが
爆弾やそれに類する物が付けられていないのか調べているのだろう。少しすると調べる事がなくなつたらしく、俺の姿を見る。

「お前が吸血鬼というのは本当なのか？」

「はい、私は何一つ嘘は言っていません」

「そうか、付いて来い」

黙って先導する。しかし少女を抱える最中でも、もしも俺が動けば直ぐに、左手に持った剣を抜いて俺を殺しに掛かるだろう。まあ、俺は不老不死の吸血鬼。刀なんぞチンケなおもちゃで切られようと意味はない。

扉が勝つてに開くと、一人の女性が現れる。威風堂々とした佇まい。それだけでこの屋敷の主が誰なのかを語っていた。

「月村家頭首、月村忍です。この度は妹わずかをお救っていただき感謝の言葉もあります」

応接間に通されると、そこには油断ならない佇まいをしたメイドと女剣士がいた。やはりというか、かなり警戒されているな。しかしこちらの目的は闘争ではなく交友。威圧的な態度は断じてとれない。

「まずは、あなた方の言う吸血鬼という概念を教えてくださいませんか。私としても自分の知る吸血鬼と貴方達にとっての吸血鬼が違っては、会話が成立しません」

「どついう事？貴方も吸血鬼じゃないの？」

「はい、私が吸血鬼である事に間違えはありません。ですが確認の為です。それに此方は一人。普通に考えて私には何も出来ません」

普通に考えればな

心の中の呟きは誰にも聴こえないだろう。

「そう貴方の言う通り、私達は正確な意味では人間じゃない。夜の一族と呼ばれる吸血鬼の一族。

でも伝説にある吸血鬼のような力なんてない、ただ普通の人よりちよつと基本的な身体能力が高くて頑丈で長生きなだけ。だけど代償に私達は遺伝子の問題で体内で鉄分を生成できないの。だから人の血から吸収する必要があるんだけど……条件として異性のものじゃないといけないのよ」

ふむう……………俺という吸血鬼とは随分と違う。つまりは力がそれ程ではない代わりに弱点も大した事はないのか。圧倒的な力を得る代償に、太陽の光に弱くなる俺とは対極だな。

「そうですか……貴女の話は分かりました。どうやら私の予想通り、私は貴女とは違う種のようにです」

「どういうこと？」

100%が嘘ならば直ぐにばれる

50%が嘘ならばばれ難い

30%が嘘ならば、殆どばれない

0%の嘘ならば絶対にばれない。

ならば俺が言うべき事は0%の嘘ッ！

僅かにあるこの世界の知識、それら全てを使い0%の嘘をつくッ！！

「実を言うと私は生まれつきの吸血鬼ではなく、元は人間だったのです」

「！！どういう事なの？」

摘みはバッチリだ。

この驚きよう、この世界には石仮面はないと考えるべき…か。

「その前にお話しする事があります。貴女は異世界という存在を信じますか？」

「異世界？あの漫画どこに出てくるやつ？」

「まあそう考えて頂いて構いません。信じられないでしょうが、私はこの世界ではない別の世界から来た者なのです。この肉体は嘗て石仮面と呼ばれる物を被った事により吸血鬼へと変異しました。諸々の事情により元の世界に居られなくなった私は、何の因果がこの街にある森へと跳ばされたのです」

「あまり信じられない話ね……」

「それが一般的なものの考え方でしょう。では私が異能者である証拠を見せましょう」

「証拠？」

「はい。これです」

ザ・ワールドが出現した。
すると……

「これは…なに？」

「おい、どうしたんだ忍！！」

どうやら忍と呼ばれた吸血鬼にはスタンドが視えるらしい。スタンド能力者ではなくとも視えるのか。新発見だな。しかし男の方は視えないようだ。

「これはスタンドと言う能力です」

「スタンド？」

「はい。言ってしまうえば目に見える形での超能力。スタンドを自らの意志で使役することの出来る者達を「スタンド使い」や「スタンド能力者」と呼びます。本来ならばスタンドは同じスタンド能力者にしか視えない筈なのですが、貴女には視えるようですね。もしかしたら異能者には視えてしまうのかもしれませんが。私もそれほど詳しい事は分からないのですが……。まあ難しく考える必要はありません。分かりやすく言ってしまうえば何時でも何処でもいるボディーガードのようなものです」

「いや……。まあこんな代物出されたんじゃ信じざるを得ないわね」

「恭ちゃん、何か分かる？」

女剣士が男の剣士に問い掛けていた。どうやらその表情には未知への恐れと好奇心が入り混じっているように視える。

「ああ、確かに姿は見えない……。だが居る」

例え姿は見れずとも気配で察するか。こいつ只者じゃない。少しだけ警戒したほうがよいか？

「他にも私は貴女の言う吸血鬼とは違う箇所が多々あります。先ずは回復能力。私の身体は老いる事も死ぬ事ありません。言ってしまえば不老不死です……………しかしながらその代償として、私は太陽の光を浴びる事が出来ません。もしも浴びてしまえば私は灰となって消えてしまいます」

絶句している。それはそうだろう。自分より遥かに強大な力を持ちながら、その弱点すらも大きいのだから。

「正直に言えば、私の目的は貴女方と友好的な関係を結ぶ事です。先程言った事情で、私には戸籍などありません。故にこの世界で生きる為には、それなりの力を持つ方のバックアップが必要不可欠なのです。初対面でありながら無礼であるのは承知していますが、それを貴女にお願いしたい。勿論ただとは言いません。日が落ちてから限定ですがボディガードもやれますし、これでも少々の家事は出来ます。どうかお願いします」

何故だか、他人に頭を下げるのに酷い怒りを感じるツ！！まるで便所の糞を顔面にブチかまされたような気分だ。しかしそうも言ってもらえない。俺はこの世界では無力なのだ。是非ともこの家の力が必要なのだ。

「はゝ。分かったわ。貴方にはすずかを助けて貰った恩もあるしね。一人分の戸籍ぐらいなら……………うん。何とかするわ」

思い通り！！

その言葉を待っていた。交渉は成功した、これで少しは事態が好転

するだろう。

誰にも悟られないように笑みを浮かべ、俺はこの世界に来て初めて、本当に笑った。

第3話（後書き）

月村家の話なのは、すずかが登場しなかった………
すずかファンの皆様申し訳ありません！！次回には登場します。

第4話

「吸血鬼の少女と悪の帝王」

私が目を覚ますと、そこはよく見知った天井だった。毎日ここで朝起きたり寝たりしているのだ。見間違える筈がない。どうも変だ。もしかしたら混乱してるのかも……。昨日の記憶が曖昧だ。

「すずか様！お目覚めになったのですね！！」

私付きのメイドであるファリンが、嬉しそうな声をあげる。ファリンは急いで立ち上がると、部屋から出て行く。暫くするとお姉ちゃんと恭也さんが入ってくる。

お姉ちゃんの話によると、私は誘拐されたようだ。普通の同年代の子なら驚く事かもしれないけど、私は残念だけど普通じゃない。自分が誘拐される立場だという事も知っているし、その理由も分かる。だからその事を聴いても私は驚かなかった。思ったのは精々が助かってよかったという事くらいだ。もし意識があれば他にもあったと思うけど、幸運にも意識が全くなかった私には、自分が誘拐されたという実感すらない。だから私が驚いたのは、この言葉。

「すずかを同じ吸血鬼の人が助けてくれた。その人は身寄りがないというので暫く家に、居候する事になった」

誰だろう。

私の頭はこの文字で一杯になってしまう。

だって今までお姉ちゃん以外に同じ人なんて会った事がない。確かに学校にもなのはちゃんとアリサちゃんという大事な友達がいる。

だけど二人は……………人間だ。私のような吸血鬼じゃない。
稀にお姉ちゃんを羨ましく思うことがある。吸血鬼である事を知つても付き合ってくれている恭也さん。一度その事をお姉ちゃんに言ったら

「いつか、すずかにもそんな人が見つかるわよ」

と言われた。

未だによく分からないけど、同じ吸血鬼の人なら私の事を知つても化物と思わないでくれるかもしれない。そんな想いで私は……………
…その男の人がいるという部屋に向かった。
先ずはノックをする。

「どうぞ」

短い返答。

私はドアノブを引いて中に入る。中に居たのは外国の人だった。大柄な身体と金色の髪。日本人だと示す要素は何一つ見当たらない。そして納得した……………確かにこの人は人間じゃない。

「おや、君は確か……………すずか君で良かったね？」

「あつ、はい。私がすずかです」

柔和な表情で笑いかけてくる。

邪気は感じられない、害意はないだろう。

「話は聴いているかな？今日から暫く世話になる者だ。よろしく頼むよ」

「はい、お姉ちゃんから聞いています。……………それと昨日は私を助けて下さったそうで、ありがとうございました！」

「気にしないでくれ、私も偶然あの場に居ただけだ。そんな事より怪我はなかったかね？」

「ありません。ところで……………」

名前を呼ぼうとして気付いた。

私はまだこの人の名前を聞いていない。
だから次に出た言葉は……………

「貴方の名前は何ですか？」

〓 〓 侵食 〓 〓

固まるッ！！

名前を尋ねられる。それだけの問いに答えが出ないッ！！

ありえない、己の名前などミルクを飲むガキにでも分かる簡単な問題だろう。なのに何故だッ！何故自分の名前というキーワードで思い浮かぶのが『ディオ』なんだアアッ！！！！

「どうしたんですか？」

不味い。すずかという少女が不審な目で見ている。
冷静になれ！感情をコントロールだッ！

俺の名前は……………糞がッ！！本来の名前が思い出せない！
恐ろしいッ！ディオは死しても尚、生きているのか！！

恐るべきべきはその精神力ッ！！肉体だけとなって尚蘇ろうとする
パワー。

認めよう、俺は恐怖しているッ！圧倒的なDIOという存在感に。
だがこれだけは譲れん。名前はくれてやろう。名前など所詮は親か
らの貰い物だ。だが俺自身で勝ち取った“俺自身”は奪われはしな
い。しかしいいだろう。今の所は俺の敗北だ。故にこう名乗ろう。

「私の名は…………ディオ・ブランドーだ」

「ディオ・ブランドーさんですか。それでブランドーさん「ディオ
でいい」はい？」

「ディオでいいと言ったのだ。ブランドーと呼ばれるのは慣れてな
くてね」

「分かりました。……………それでディオさんが吸血鬼だというのは本
当なんですか？」

「本当だよ。しかしながら詳細が違う。私は君たちと違って太陽の
下を、歩けない体なのだ。見てくれれば分かると思うが、私の部屋
もカーテンで日光が入らないようになってるだろう。それに身体
能力も常人離れしている。つまりは……………正真正銘の怪物というわ
けさ」

「……………怪物」

驚いたような畏れたような、そんな曖昧な顔をする。
自分より遥かに能力の高い、怪物の存在を恐れたのだろうか。

「どうやら怖がらせてしまったかな？」

「いえ違います！ただ驚いて……………ディオさんは平気なんですか？」

「何がかね？」

「もし他の人にバレたらとか　私は正直に言う
と怖いです。なのはちや……………私の友達だって、もし私の正体を
知ったら拒絶するんじゃないかって！！」

成る程、異能を持つ者が抱くのは、異能を理解されないが故の孤独。
ジヨジヨの第三部において花京院もスタンド能力という異能を持つ
が故に他人と打ち解けられなかった。いや異能を持つと知っても受
け入れてくれる人間はいるだろう。しかしながらその数はお世辞に
も多いとはいえない。人とは得てして人を超えた化物を恐れ、迫害
するものだ。中世の魔女裁判などその最たる例であろう。

「私は君の友人を知らない。それ故に無責任に大丈夫などという言
葉は吐けない。君の目から見てどうなのかね。君の友人というのは、
君が吸血鬼だと知って迫害するような人物なのかい？」

「……………それはないと思います……………いえ、ないです！」

「はははははは、随分とその友人を信頼しているようだ。
しかしながらそのような選択は自分自身で選ぶ事だよ。

仮に私に意見を求められたとしても私が出来るのは、君の中にある
答えを、見つける手助けをする事だけだ。まだ幼い君には難しいだ
ろうが、人生においての選択肢は多々ある。

親に相談するのもいいだろう。

友人に相談するのもいいだろう。

しかし最終的な決断は自分自身で成さねばならない、私はそう考えている。

それに他者の引いたレールを歩くなど気に入らないしね、だから私が言うのはこれだけだ。

すずか君自身が考えて決断すればいい。

別に正体を教えようともし教えずとも否定はしない。

それは君が決めるべき事なのだから、私が口出しするのは野暮だろう。

なに、今すぐ教えなければならぬ理由がある訳でもないのだろう。先程も言ったが、ミス・月村から聴いた事によると君は9才、幼さが許される時代だ。

人生が本当に辛いのは、まだまだこれから……。今は難しい事は考えずその友人と遊べばいい。

大事な友達なのだろう？」

すずかは、どうやら俺の言った言葉を反芻しているようだ。俺としてはそれ程ありがたい話を言っただけでもないが、彼女にとってはそうではなかったらしい。しかしこの娘……。9才にしては考えが大人びている。一番無邪気な筈のこの時期に、成長が早いというのは、良い事なのか悪い事なのか……。

「デイオさん、ありがとうございました。デイオさんの御蔭で色々な事に整理が着きました」

そう言うと、花のような笑顔を浮かべて去っていく。

やれやれ、もし同年代ならば惹かれたかもしれないな。

しかし興味深い事を言っていた。

バレたら拒絶される……か。

私にはこれといった親友はいなかった。なので既に故人となつてしまった両親で考えてみる。

「……………むう。確かに少々…いや、かなり辛いものがある」

自分の絶対の味方と信じていた者に裏切られる。
想像してみただけで辛い思いを感じた。

そうか、その為に俺は……………

「 吸血鬼のお仕事！！！！」

ディオの朝はない。理由は簡単、寝ているからだ。

吸血鬼であるディオは太陽の下を歩けない、つまりは必然的にディオは夜型にならざるを得ない。

お昼時に目覚めると、漸く起床する。しかしこれから直ぐに仕事に行くのかといえば、そうではない。お昼時に世間一般でいう朝食を摂ると読書タイムに入る。読む本は様々だ。推理物、恋愛物、ファンタジー、ホラー、しかしながら毎週日曜日にはジャンプを読む。これだけは不変だ。ワンピース等を読んだ後にこち亀で笑い本を閉じる。その流れは絶対に変わらない。

さてさて、漸く日が落ちてからがディオの時間。

吸血鬼でありスタンド能力も持つディオ。そんな彼のアルバイトは勿論一筋縄でいくものではないッ！ある時はヤクザ、またある時はテロリスト、またある時は謎の猫型怪生物、またある時は謎の借金

執事、そのまたある時は魔法少女、等と彼の戦う相手はどれも一癖も二癖もある強者達、ディオは皆の知らない間に海鳴市の平和を守っているのだッ！！

とそんなアホな冗談は置いて……………ディオの職場はファミレスである。特に理由などない。ただ最初に催眠術に掛けた相手が、そのファミレスでアルバイトしていたから、それだけの単純な理由だ。

そのファミレスの名は『ジョナサン』……………何か物凄く因縁を感じるが気のせいだろう。

「遅いぞディオ。早く入れ！！」

「はい、今すぐに！」

何度目かになるか分からない遣り取りをした後に、店の服に着替える。

そこでの仕事ぶりは特に特質すべき事はない。他のバイトと同じ様に働く、ただ一点を除いては。

「む、また割ったか。スタンドの精密動作がこうも難しいとは……………」

そう、なんとディオは皿洗いをスタンドに任せているのだ。

一見するとスタンドに任せて、自分はサボっているようにしか見えないだろうが、スタンドに複雑な作業をさせるのは思いのほか難しい。ちなみに他の店員達はディオの催眠術に掛かっており何も気付きはしない。

日が昇る前に月村邸へと戻ると、己に与えられた部屋へ行き、そして眠る。

アニメで発生した事件は、この世界でも起きる。そうならば自分の身も危険に晒される可能性が大だろう。ディオは未来の事を考えながらも……束の間の平穏を過ごしていた。

第4話（後書き）

少しだけネタバレになりますが、無印編ではデイオはあまり関わりません……というより関われません。無印での戦闘は、殆どが太陽が出ている間での事なので、吸血鬼であるデイオはその時は参加出来ません。

なので第一部ではデイオは機動戦士 ガンダムにおけるクワトロ大尉のようなスタンスになるかもしれませんね。勿論戦う時には戦いますが…

第5話（前書き）

アリサ、そしてなのは登場の巻

第5話

「未来のエースとお嬢様」

日曜日の午後。

世間一般の社会人達が、一時の休息をとる曜日である。

俺もその例には漏れず、日曜日は休みだ。

何時もより遅く起床すると、ココアとサンドイッチを摘みながらジャンプを読む。

やはり日曜はこれがないとは始まらない。しかしこの世界にもジャンプがあつたのは幸いだった。

流石に『ジョジョの奇妙な冒険』はなかったが、ワンピースやち亀はしっかりとあつた。

一通り読み終わった後は、新聞をチェックする。

また総理大臣が替わるのか……。この

国は大丈夫なのか？

少しだけ呆れながら新聞を畳んで読書を開始する。

本当なら外へ出かけたいたのだが、俺にはこの時間は出歩けない。日が沈むのを待たなければ……。吸血鬼というのも不便なものだ。

「さて……………うん？」

何やら騒がしい。誰か来ているのだろうか？

しかし月村忍はデート、メイド達が勤務時間に騒ぐ可能性は低い。見れば丁度よく日も落ちたようだ……………行ってみるか。

俺はイスから立ち上がると、部屋を出た。

声の聞えた場所に行くと、すずかの他に同年代と思われる二人の少女がいた。

一人は金髪の外国人、もう一人は栗色の髪の日本人。という彼女達がすずかの言っていた、アリサとなのはだろ。三人は唐突に現れた俺に、驚きを隠せないようだ。仕方ない、少しだけ誤魔化すか…。

「驚かせてしまったなら、申し訳ない、私はディオ・ブランドーという者だ。

すずか君の父親とは、仲良くさせて貰っていてね、とある縁で暫く厄介になる事となったのだ。

君たちはアリサ・バニクス君と高町なのは君でいいかな？」

「あ、はい。でもどうして私達の名前を…？」

最初に口を開いたのは、金髪の少女だった。

既に最初に見えた驚愕の色はなく、純粹な好奇心からの問いだと窺がえる。

「いやなに、すずか君から二人の事はよく聞いていてね。二人共大事な親友だと…」

「ディオさん!!」

顔を赤くした、すずかが言った。

この年の少女には、この程度でも恥ずかしいのだろ。

「そして君が……確か恭也君の妹だったね」

「えっ、お兄ちゃんを知っているんですか？」

「ああ、私がこの屋敷を訪れた時に、偶然鉢合わせして、それからの知り合いだよ。」

ところで君の両親は喫茶店をやっているそうだね。今度行ってみようと思うのだが、お勧めの品はなにかね」

「翠屋のお勧めですか……………そうですね。シュークリームが人気らしいんですけど」

「シュークリームか！！そうかそれは良かった。私もシュークリームは好物でね、では今度邪魔させて貰うよ」

「あ、はい。喜んで！！」

シュークリームの美味しい喫茶店、翠屋か。実に素晴らしい情報を得たぞ、俺は！！

と、違った。思考が別の事柄へ向かっているぞ。

『高町なのは』についてだッ！俺の考えるべき事は！

『魔法少女リリカルなのは』それが俺のいる世界らしい。

そして『なのは』！この題名が示す意味は、この少女『高町なのは』が主役だということ！

この何の変哲もない少女ッ！しかしこの小娘はチンケなスタンド能力者をブチ殺す程のエネルギーを秘めている！

俺の記憶している内容は曖昧だ。

そもそも『魔法少女リリカルなのは』とて落し物のカバンに入っていたDVDを何となく見ただけ。しかもV o l . 1 だけ。

内容は確か……………如何にも魔法少女のマスコットのようなイタチが、

謎の宝石を少女に渡す……ような話だった気がする。いや、木が大きくなる話だったか？サッカーもしていた気がする。犬もいたな。つまり今後の展開は

マスコット襲来

変な宝石を渡す

怪人Xを倒す

犬と喧嘩

サッカー

木が大きくなる

なんだ、これは……。これでアニメが成り立つのか？

つまり『魔法少女リリカルなのは』という物語は、イタチと一緒に怪人Xを倒し、犬と喧嘩し、サッカーでシュートを決めて、木が大きくなるだ！？

俺はこれ程までに無茶苦茶な展開のストーリーを見たことないぞ！！どうやら、余りの混沌とした雰囲気、俺は大抵の記憶を抹消してしまったようだな。

いや落ち着け。

情報はそれだけじゃあない。俺の知り合いに『魔法少女リリカルなのは』が好物だと宣言していた糞野郎がいたッ！あいつの口走っていた内容をトレースするのだ！！

キーワードは……………

『淫獣』『魔王閣下』『白い悪魔』『冥王』『チビ狸』『死神』『露出狂』『二浪』『乳揉み魔』『勇者王』『最強の凡人』『凡骨』『固定砲台』『社長』『二ト』『暴力シスター』『トンファー』『オレンジ博士』『戦闘種族』『鬼軍曹』『変態仮面』『ニャンコ先生』『斬馬刀』

・
・
・
・
・

なんだこれは…

カオスどころの話じゃあないぞ。

しかし魔法少女の要素が何一つ見当たらない。

日本のアニメ業界は、どうなっている。こんな作品を世に送り出すなんて。

だが折角だ。これらの要素で実際のアニメを再現してみるか。

【魔法少女リリカルなのは原作再現〜ディオ監督完全監修版〜】

小学校受験を二浪した乳揉み魔である、現小学三年生である高町なのはは、ある日イタチを発見した。

その時、何の脈絡もなく怪人Xが現れる。

それが後の世に『血の日曜日』と伝えられる事件の始まりだった。

「魔法少女に……なってくれ…」

イタチの妙な言葉に従い、魔法少女となった高町なのはは、見事に怪人Xを撃退する事に成功した。

しかし事件はまだ終わっていないかった。

犬と喧嘩した後に、地元のサッカーチームをコテンパンにした高町なのは。

そんな時に、新たなる敵が現れる。

露出狂と淫獣の連合軍、それに乳を揉んで立ち向かう高町なのは。

相手のゴールデンボール等を見てしまうが、何とか乳を揉む事に成功して、辛くも勝利した。

更にその翌日、海鳴市に謎の巨大ロボットが出現。

「光になああああええええええええ」

と叫びながら襲い掛かる勇者王。

徹底的にボロボロにされた高町なのはは、ついに自分が戦闘民族サイヤ人の末裔だと自覚した。

スーパーサイヤ人となった高町なのはは、圧倒的な力と地元の暴力シスターからレンタルした、トンファーと斬馬刀を振るい、これを撃滅。

海鳴市の平和は守られた。

ついに現れる黒幕、通称オレンジ博士は全世界に向けて、オレンジ栽培計画を実施。

あらゆる土地をオレンジ畑へと変えていった。

その頃にはスーパーサイヤ人を超越して魔王閣下となっていた高町なのは。

彼女は固定砲台からの砲撃で、地球総人口の半分とオレンジ畑を抹殺した。

余りの死者の多さに、激怒する冥王。

冥王は魔王に戦いを挑むが、部下のチビ狸とニャンコ先生と変態仮面により撃退された。

ついにオレンジ博士の下に辿り着いた魔王閣下。

オレンジ博士が率いるのは、魔王の独裁から離反した勇者達。

対して魔王に付くのは、どれもこれも一癖二癖ある馬鹿ばっか。

凡骨と社長がタッグを組んで魔王に襲い掛かるが、デストロイギガレイズにより秒殺。

鬼軍曹も戦死、白い悪魔と恐れられたNT戦士も戦死。

相次ぐ戦死者に絶望するオレンジ博士。

そして……………魔王の一撃によりオレンジ博士は滅びる。

それは世界の滅びと同義だった。

魔王という職業に飽きた高町なのはは、自宅に閉じこもりニートとなる。

世界は何時までも戦争をしていましたとき。

めでたしめでたし

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

忘れよう。こんなアニメがあつたなら色々な意味で有名になっている筈だ。

大体、あの糞馬鹿の言う事は、話半分……いや話丸ごと出鱈目ばかり。
考える方が無駄だ。

「あのく、どうしたんですか？」

いかな、どうやら俺が何も話さないので不審に思っただらしい。その高町なのはが俺に話しかけてきた。
少なくとも今言ったアニメがある訳がない。というよりあんな作品を世に送り出すキ　ガイがいるとは信じられない。もしもいたとしても、周りのものが止めるだろう。

「いや…何でもない。考え事すると周りの声が聴こえなくなる悪い癖があつてね。

どうやら思考の中に埋没してしまったようだよ」

「ありますね、そういうこと」

アリサ・バニクスが言った。

「さて、友人同士の語らいの時間を邪魔するほど野暮ではな。

邪魔者は早々に消えるでしょう……それとシュークリームの兼は頼んだよ」

このディオ・ブランドーには予感がある。

人はこれを胸騒ぎというかもしれないが、これはそんなチャチなものじゃあない。

そういう意味でこれは、予感ではなく確信だった。

スタンド能力者はスタンド能力者を引き寄せる。この世界にスタン

ド能力者がいるかは不明だが、そうでなくとも『異能』を呼び寄せ
てしまっだろう。

まだまだ俺のザ・ワールドは、パワーも精密さもDIOのザ・ワ
ールドより下。

はつきり言って最強とは言い難い状態だ。

もっとだ、スタンドは成長する。更にその性能を高めなければ……

第5話（後書き）

漸く次回からは原作に入れます。まともな戦闘シーンも始まります。

第6話

〓 〓 原作考察 〓 〓

「……………むっ、妙な夢だったな……………」

何時も通り昼頃に目覚めると辺りを見渡す。

身体の調子も問題ない、こんな年になって変な夢を見るとは、もしかして疲れているのだろうか？

吸血鬼であるこの肉体は、生半可の事では消耗しないが、精神的に疲れているのかもしれない。今度息抜きに温泉にでも行こうか……と考えてみる。

良さそうだな、機会があれば行ってみるか……………しかし日の落ちた時間帯に行かなければならない。部屋の選択も需要だ、日の当たらない部屋にしなければ！

「さて、今は他に考える事があるだろう……………」

変な夢というキーワードで思い浮かぶものがある！それは即ち物語の始まり！

アニメの序盤でも、こんなような感じだった記憶がある。

状況を整理しよう。

この夢が物語が始まる兆し、それはほぼ間違いない。

内容は……………曖昧だが分かっている事はある！

一つ目はイタチに出会うことで主人公が魔法少女になること

二つ目は犬と戦う事

三つ目は木が巨大化する事

信憑性のある情報はこれだけだ。

少なすぎる……………いや逆に考えるんだッ！情報が少なくて厳しいではない、少しでも情報があつてラッキーだと考えるんだ！

そう、よくよく考えれば未来など本来なら分らないもの、ならばアニメの内容など気にする程のものでもない。寧ろ少しでも知っていたのを幸いと考えよう。

「少なくとも…戦いは夜にあつた」

それは確定情報だ。

初戦は間違いなく夜間で行われていた。ならば初戦においては俺の参加が許されるという事だ。しかし思えば俺にとつても初陣だ。前に殺した誘拐犯は、敵にすら値しない雑魚、あれでは戦いにはならない。

そして何よりも、月村家には恩がある。

受けた恩は返すのが、俺の心情だ。魔法とやらがこの街に被害を及ぼすのならば、月村家にも被害が出る。受けた恩を返すどころか、俺まで危ない。

大抵の敵なら殺す自信はあるが、昼や朝に襲われては弱い。

ままならないものだ、吸血鬼も……

俺は溜息をつく、夜に備えた。

〓〓帝王出陣〓〓

目線の先には、謎の怪物に追いかけられるイタチがいた。

月村すずかからの情報により、イタチ（正確にはフェレットらしい）を保護したという情報を得て、これがアニメの始まりだと確信した。頭に直接語りかけるような声を頼りに、来てみたが……まだ主人^{高町な}公が到着していないようだ。

もし間違つてイタチに死なれても困る、貴重な情報源なのだ。

今いる位置は分かるが、万が一の場合は間に合わないかもしれない。ならば………

「イタチ君、私が足止めする。逃げたまえ」

「あつ、貴方は！？」

デイオは、イタチと怪物の前へ降り立った。

ポンポンと埃を払うと、後ろに居るイタチに振り向いた。

「二度は言わんツ！逃げろ！君には聞きたい事が、山ほどある！」

「はっ、はいイイ………って危ない！」

怪物がその口を大きく開くと、デイオの身体に体当たりを仕掛けてきた。

だが動かないツ！デイオの身体はピクリとも動かない！

「ほおお~~~~~思考能力すらない、虫けら同然の、たかが黒い塊が、よくもこのデイオに無礼な態度がとれたものだ……
今、俺に体当たりを仕掛けたな、おもしろいッ！」

デイオは怪物を蹴り上げると、後ろへ跳躍する。

そこから助走をつけて……

「本物の体当たりというものを教えてやるッ！死ねえ虫けら！！」

巨大な筋肉の塊が、怪物に衝突した！

それは正に必殺の一撃！ダンパーにぶち当たった程の威力！怪物は成す術もなく吹っ飛んだ。

だが終わらない！既に吹っ飛ばされた方向にはいた！最強のスタン
ドが！

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アア
アア!」

吹っ飛ぶ。ボロ雑巾のように！

そのまま地面に激突すると……動かなくなった。

「口ほどにもない。ザ・ワールドを使うまでもなかった……むっ！」

だが怪物はまだ滅びなかった。

あの怪物を倒すには、回復能力を上回る威力で吹っ飛ばすか、原因を何とかするしかないのだ。

「ディオさん！如何して此処に！！」

ディオが振り向くと、先日に出会った少女、高町なのはが正に魔法少女ツ！といった服装で立っていた。どうやら既にセツトアップは済ませたようだ。

「話は後だッ！今はこれを何とか……出来るか？」

「やつ、やってみます!!」

「そうか……………来るぞッ!」

怪物が大きく跳躍した。

その先にいるのは……………高町なのは

どうやらディオには勝てないとみて、ターゲットを変更したようだ。

（お手並み拝見といこうか……………主人公君）

ディオはここは傍観に徹する。

日のある間は行動出来ない、ディオとしては手足となる手駒が欲しかったが、この程度で死ぬような者なら手駒にすら値しない。

しかし心配は杞憂だった。

襲い掛かる怪物をバリアのようなもので防ぐと、魔法使いの杖みたいなものを操り、怪物の動きを止めた。そして……

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印!」

「sealing・receipt number XXI」

電子音のような声が響き、怪物は消滅した。

残ったのは青い宝石。状況から考えて、その宝石がこの事態を引き起こしたと考えるのが、妥当だろう。

「その……………ディオさん」

「なのは君、お互い言いたい事はあると思うが、一先ず離れよう。」

かなり大騒ぎしてしまった。もう少しすれば人も来るだろう」

見れば、辺りはボロボロ。

まるで隕石がぶち当たったみたいだ……………もし警察に見つかれば逮捕はないだろうが、少なくとも事情聴取を受ける事になるだろう。

「う、ごめんなさい！」

故に、二人と一匹はこの場から退散した。

ⅡⅡ 家族会議ⅡⅡ

その夜、月村邸にはディオ、イタチのユーノ、恭也、忍、なのは、美由希、ノエルといった者と、高町家の大黒柱であり恭也達の父である高町士郎が揃っていた。

ユーノから聴いた話はこうだ。

- ・自分は異世界から来た魔導師である
- ・事故により、この世界に、ジュエルシードというロストロギアを落としてしまった

- ・ジュエルシードとは、単純に言ってしまうえば持ち主の願いを叶える力を持っている。

ただし取り扱いには非常に難しく、現実的には使用不能

- ・自分はそのロストロギアを回収する為に、地球にやって来た
- ・しかしながら途中で倒れてしまい、一つしか回収出来ていない

・仕方なく周辺の人間に助けを求めたら、偶然にもディオとなのが駆けつけてくれた。

・今に至る……………

「今回は僕のミスで、迷惑を掛けてしまい申し訳ありませんでした！」

「…………もう一度聴くがイタチ君。つまりそのジュエルシードの為にあの怪物は生まれたと？」

「はい…………ですが、あれは単なる思念体で、もし生物…………特に人間の願いに反応すればあの程度じゃすみません。人間は他の生物より願いが強いですから…………」

再び唸りだす月村家に集まった面々。
次に口を開いたのは恭也だった。

「その…強さと言うのはどれ程なんだ？」

その問いにディオが答える。

「それは私が答えよう。私にとっては大した事ではないが、少なくともパワーもスピードも常人では、到底及ばないレベルだ。耐久性も中々だ。残念ながら日本刀で斬られてもビクともしないだろう。それに、あのジュエルシードとやらで生まれた怪物……………ダンプカー並みの威力を食らわせたが、直ぐに回復した。……………たぶんだが、ジュエルシードで生まれた怪物達は、皆こうなのではないかな、イタチ君？」

「はい、ジュエルシードの影響で物質化した生物は、原因であるジ

ユエルシールドを封印するか取り除く事でしか倒せません。ミサイル程の威力ならあるいは、といったところでしょつか……」

恭也が押し黙る。

彼とて自分の実力は、中々のものだとは自覚している。相手が近代兵器で武装していようと倒す自信もある。

しかしながら恭也も馬鹿ではない。

自分にミサイル並みの威力が出せない事も知っているし、ユーノの話聞く限りでは、魔法の力の源であるリンカーコアがあるのは、なのはとディオだけだという。

これではかなり厳しい……いや戦いにもならないだろう。

つまり……自分は足手まといなのだ。

恭也も、ディオにはある程度の信用はしているので、よく知っている。少なくともこんな時に、こんな嘘をつく男じゃない。

「ところで……なのはが魔法使いになったという事は、飛んだり、魔法を撃つたりも出来るの？」

「はい。今日もシールドを張っていましたが、それなら出来ると思います」

美由希の問いで、重くなった空気が、多少和らいだ。

しかしそれでは終わらない。

「だけど、そんな怪物がポンポン出現したら、この街が吹っ飛びかねない……」

「ああ、だけどよりもよって、怪物を倒す力を持つのが……」

和らいだ空気が再び、どんよりとする。

魔法の力を持ってしまったのが、恭也なら問題ない。

今すぐにでもジュエルシードとやらを捜索しに行っていただろう。だが運悪く魔法の力を持ってしまったのは、末っ子のなのは。そして幼い妹を、危険な戦いに送り込むほど、恭也を含めた高町家の人間は非情ではない。だが自分達では足手まといになる……………その事実が彼等を苦しめていた。

「デイオ、お前の力でどうにかならないのか？」

「無論、私も協力する……………しかし知つての通り私は、夜にしか行動出来ないし、今回は兎も角として、ジュエルシードは夜にしか発動しないような代物という訳じゃあないのだ。日のある間に、発動されては、私にはどうする事も出来ないよ」。しかしながら大の大人が幼い少女に、全てを押し付けると言うのはよくない……………なのは君の意見を聞こうか。君はどう思う？」

「私は……………ユーノ君のお手伝いがしたいです！」

なのはの方はやる気十分。
ならば……………

「しかし危なくはないか……………」

「まあ落ち着け。仮になのは君が、やらなくてもだ。ジュエルシードは存在し続ける訳だから、今回のような被害が出るだろう。この広大な街の至る所に落ちたジュエルシードとやらを、私一人で回収するのは、はつきり言うところと厳しい。それに私はこのデバイスとやらと相性も悪い。情けない事だが、なのは君の協力は必要不可欠だ」

理由は納得できる。

しかし感情がそれを認めない。

「幸いな事に、ジュエルシードとやらで生まれた怪物は、知性が薄い。いざとなれば逃げるのは、そう難しくはない」

結局、この日に決められた事は

- ・夜のジュエルシード搜索はディオが担当する
- ・危なくなったら逃げる事
- ・足を使った搜索は、全員で行う
- ・もしもジュエルシードを発見した場合、適切な行動をとる
- ・魔法の練習の為にユーノは高町家で預かる

夜も遅いので、ここらでお開きにしようと、ディオが立ち上がった時に、ユーノが口を開いた。

「ところで、ディオさんは、一体何者なんですか？

さつき見た使い魔のような人……………もしかして魔導師なんじゃ……………それに夜にしか行動出来ないというのは……………」

「いや…私は魔導師じゃあない。そしてあれは、スタンドと呼んでね。君達の世界でいう魔法の一つだとも思ってくれ」

「レアスキルなんですか？」

レアスキル？と首を傾げると、ユーノが教えた。

何でも魔導師の中で一部の人間だけが持つ、固有技能らしい。

「まあ、そんなものだよ。

ちなみに夜には動けないのは、昔に少し性質の悪い呪いに掛かってね、色々と治療してみたんだが、効果はなかった。それ以来、太陽

の下を歩けない身さ」

「あつ……………すみません」

悪い事を聞いてしまったと、バツの悪い表情をする。
だがディオは気にしない。元より半分は嘘だ。

「それと、なのは君」

「あ、はい……………」

「不安になるのも分かるが、そう堅くならなくていい。私も出来る限りバックアップする」

「はい！宜しくお願いします！」

「いい子だ……………」

最後にそう言つと、

ディオは自らの部屋へと戻っていった。

第6話（後書き）

無印編開始！！ですが次回は、一気に海鳴温泉まで話が飛んじやったりします。ぶっちゃけフエイト登場場面でもディオは寝てるので関われません。

第7話（前書き）

GO! GO! 温泉!! の巻

第7話

さて、戦争において勝敗を決する要素は多々あるが、目に見えて分かり易いのは、やはり数だろう。「戦いは数だよ兄貴！」と言った中將の言葉は間違っていない。たった一機のMS……もとい人間が戦局をひっくり返すなどありえない。最も少数の兵で多数の兵を打ち破った例はかなりの数がある。しかしそれは綿密に計算された作戦と、それを率いる総大将の実力があってこそだ。愚かな総大将と無策で突っ込む軍勢では、玉砕するのがオチである。

結論から言おう。…ディオの作戦は成功した。高町士郎を始めとした面々は、知り合いや友人などに、片っ端からジュエルシードの搜索を依頼した。本来の歴史ならば、なのは一人で街中を探した為に効果は殆どなかったが、今回は違う。士郎の方でもサツカー少年が持っていたジュエルシードを発見。お礼に翠屋のタダ券を渡すと喜んで譲ってくれた。ジュエルシードは発動しなければただの宝石封印するのに大した労力は掛からなかった。

一度だけジュエルシードの影響を受けた犬と戦った以外は、殆ど戦闘などせずに事は進んでいた。

だがここで誤算が起きる。ジュエルシードの一つは、なんと月村家の庭に落ちていたのだ。灯台下暗しとは正にこの事……月村家の全員がこの事に気付かず、なのは一人を戦わせる羽目になってしまふ。しかしながらそれだけなら仕方ないで済ませただろう。

金色の少女が現れるまでは……

「つまり、その少女にジュエルシードが奪われたのかね？」

旅館の部屋内でディオがなのはに問い掛けた。

それ程有名ではないが、かなり立派な造りをした部屋、冷蔵庫にあるコーラを飲みながら、なのはと念話で会話する。

「はい……………猫さんを元に戻そうと思ったら、突然あの子が来て……………」

GWという事で、家族一緒に海鳴温泉へ向かう事になった、なのは達。

そこにディオも付いて行く事になった。深い理由はない。ただ、ディオだけを留守番にしておくには、色々と問題もあるし、最悪の場合、海鳴温泉でジュエルシードが発動する可能性もある。最も一番の理由はディオ自身が温泉に行きたかったからなのだが……………それは置いておこう。

「君の話を聞く限りでは…………え、なんだったか……………時空浣腸局だったか「管理局です！」」そうそう、その管理局とやらが派遣した者ではないようだ」

時空管理局とは、簡単に言えば次元世界の警察組織らしい。もしもその組織の者ならば、なのはを攻撃する理由はない。つまり、なのはが遭遇した同年代と思われる魔導師は、違法魔導師である可能性が非常に高い。

「しかし、なのは君の言葉が間違いないなら、どうも妙だ」

「何が妙なんですか？」

「考えてもみたまえ、君と同年代という事は、まだ9才やそこらだ。……そんな年の少女が、自分の意思でロストロギアなんて危険な代物を集めようとするかな？」

「つまり……どういう事ですか？」

「簡単に言えば、陰でその少女を操る黒幕がいる可能性が高いという事だ。

しかし厄介な事になった。

もし、その少女が朝や昼に襲ってきたならば、私に対処法はない。そいつが、夜に現れた時に、始末するしかないな……」

「駄目です！」

ディオとしては、至極当然の事を言っただけなのに、なののは強い反論には面食らう。

「どうしてだね？ 障害は早急に消すのが、ベストな方法だと思うが……」

「駄目です！！……私はあの子と、キチンとお話したいです！！」

「お話だと……好奇心から聞くが、何を話すつもりだね？」

「…それは、名前を教えて貰って、どうしてあんな事をするのかを聞きたいからです。言葉にしくちゃ分からない事もあると思うんです！！」

「ふむう……」

ディオは考える。

なのは自身は深くは考えていないだろうが。実のところ妙手ではある。

ディオの目的は、ユーノにジュエルシードを返す事ではない。ユーノにそんな事をしてやる義理も恩もないし、精々ユーノの価値というのは、次元世界や魔法に関しての知識だけ。

今でこそ月村家の厄介となっているディオだが、こんな街で一生を終えるつもりは毛頭ない。というより蘇生前より野心溢れる男だったのだ。それがディオの身体となった事で、更に増幅したと考えてもいい。だが今は動けない。戸籍もない上に、この世界についての知識もないのだから。

ディオは組織の力というものを侮ってはいない。そして管理局とやらに一人で戦いを挑む程とち狂ってもいない。

実際のところ、ジョジョ本編におけるディオが、吸血鬼となったのは最後の手段だったのだ。

ディオにとってのベストは、誰にも気付かれずジョースター一族を抹殺する事により、己が全ての財を手に入れることだったのだ。しかしジョジョによって、その計画が感付かれ、ジョジョの抹殺を計画する過程で石仮面の秘密を知ったのは、皮肉としか言いようがない。

だが石仮面の力を知っていても、直ぐに吸血鬼とならなかったのは、不確定な情報が多すぎたからだ。

ディオは短気な面もあるが、酷く狡猾で頭が切れる、いきなり未知の塊である石仮面を被る程、馬鹿ではない。

だが、警官隊に囲まれ、完全に追い込まれたディオは石仮面の力を使い吸血鬼となった。つまりディオは意外と慎重なのだ。

話を戻すが、ディオの目的はジュエルシードを地球上から無くす

事である。

ジュエルシードが制御可能なエネルギーならば、ユーノを密かに抹殺してでも手に入れたかもしれない。

しかし、兵器にとつて重要なのは性能じゃない、信頼性だ！

いつ暴発するか分からない、エネルギーの塊を用いるなど愚策以外の何物でもないのだ。

それ故に、その金髪の少女がジュエルシードを何に用いようと、最終的に地球から無くなるのであれば特に異論はない。

ユーノが何か言うかもしれないが、上手く口車に乗せる自信はあるし、根が善人で理知的な奴は思考回路が読み易い。上手い具合に言えば、金髪の少女と共闘関係になる事も可能。そうすればジュエルシードはより早く集まるだろう。

逆に厄介なのは、その少女が地球に害をなす存在だった場合だ。それならば仕方ない。早急に殺すのがベストだ。

「なのは君の言いたい事は分かった。しかしながら前の事で、向こうは警戒しているだろう。大事なのは相手を交渉の場に着かせる事だ。それすら出来なければ話し合いの余地すらない」

「あの、どうすればいいんでしょう？」

「いや、そう難しく考える必要は無い。まずは白旗を持って接近する。イタチ君の話によると白旗は次元世界でも共通らしいからな。向こうも突然の白旗に驚き、直ぐには攻撃しないだろう。つまり僅かに話し合いの時間が生まれるという事だ。ここで重要なのは、相手にも話し合いをする利点がある事を述べることだ。人間は誰しも、利のない行いは、したがないものだからね」

「利点があるように………ですか？」

「そうだ。和平交渉でも何でも、相手に好印象を与えて悪いという事は無い。例えば君がその少女だとして、銃を突き付けられながら、話を聞けと言われたら、いい気分はしないだろう。」

彼女として目的がある以上、こちら側の存在が、自分の利益になると分かれば攻撃しないだろう」

「でも、あの子にとっての利益が、分からないんですけど……」

「だからそれを聞くのさ。ジュエルシードは願いを叶える力があるというからね、もしかしたら利用法はあるのかもしれない。例えば自分の病気を治すとか、金が欲しいとか……」

そして、その願いが地球の害とならない望みだったなら、彼女達に協力する」

ディオの予想外の発言にユーノが驚いた。

そして問い掛ける。

「何を言ってるんですか！！ジュエルシードは危険な物なんです！もし扱いを間違えれば……」

「扱いを間違えればどうかね？」

悪いが、私は地球の為に、君に協力しているが、君にジュエルシードを返す為に協力しているのではない。私や月村家にとっての優先事項は、地球上からジュエルシードを無くす事だよ。今はなのは君一人で集めてはいるが、もしその少女と二人で回収すれば、実に効率がいいとは思わないかね？」

「そ……それは、そうかもしれませんが……」

（扱いやすい奴だ。やはりこの手の善人とは扱い易い。寧ろ扱い難

いのは感情で動く馬鹿だ)

「勿論、その少女の目的が、地球を破壊するだとか、世界征服どかならば止めねばならない。しかし彼女の目的が、地球に害のないものならば、私達が戦う理由はない」

「……………」

正論、故に反論出来ない。

ジュエルシードが地球に落ちたのは、そもそも自分の責任であり、なのは達を巻き込んでしまった負い目もある。

そして、ディオの言った通り、協力して搜索した方が、ジュエルシードを効率に封印出来る。それはこの街の安全にも繋がるのだ。

「っと、長く話し込んでしまった。

先ずは温泉に入ろう。折角来たのだからな」

「 漢の入浴」

温泉、そこには一切の隠し事が通じない世界。

どんな疲労でも、温泉に浸ければ一発回復、そして裸の付き合いにより、どんな人間でも分かり合えるという理想郷……………それこそが温泉なのであるッ！

ちなみに、覗きというのは温泉の隠れ風物詩でもある。まあ、そこは置いておこう。

ここ、海鳴温泉にも、日頃の疲れを癒しに訪れた漢達がいたッ！
誰も、現代の軟弱な男子のように、大事な所を隠そうとはしないッ！

堂々と勇ましく晒す！

順々に説明していこう。

先ずは高町家大黒柱、高町士郎！

第一線から退いて久しいが、少しの衰えもない肉体！海鳴中の奥様達が憧れるのも無理はないだろう。

そして恭也！

この年で師範代となった腕前は伊達じゃあない。一切の無駄なく引き締まった身体に、股間のマグナム。

月村忍嬢もウハウハだろう……

最後に我等がディオ・ブランドー

正確に言うならば、彼の肉体の首から下は、ディオ本人の物ではなく、ジョナサン・ジョースターの物である。しかしながら、完全に馴染んでいる為、それはもはやディオの身体そのものと言って過言ではない。

195cm強の肉体、そして100kg以上はある体重。今時のヒョロヒョロ主人公とは物が違う。やはり主人公はマッチョでなければならぬ……そう思うのは作者だけだろうか？

生前はラグビーをやっていただけあり、その鋼のような筋肉は、銃弾ですら防いでしまいそうだ。そして股間のスーパーピクマグナム、いやこれはマグナムではなくミサイルと表現するのが正しいかもしれない。正に漢の中の漢に与えられる最強の兵器がそこに具現化していた。

「うん、ディオさん。首筋にあるそれは？」

士郎がディオの首にあるアザを指して言う。

「ああ、これは生まれつきだね。それより、中々ガツチリした身体じゃあないか。もしや何かをやっているのでは？」

「はははは、昔にちよつとね。今は翠屋のマスターさ」

それ以上追求するのは、失礼に当たるだろう。

人に歴史ありとはこの事、士郎もそれなりに、修羅場を潜り抜けてきたようだ。

「そういつ、ディオは何かやっているのか？随分とガツチリしてるが……」

恭也からの質問、ディオは一瞬だけ考える。だが直ぐに本編のストーリーを思い出して、言った。

「少しラグビーをやっているね。競技柄貧弱な肉体じゃやっていけないさ」

そうか、と言うと三人は身体を洗い温泉に浸かる。
だがそんな三人を尊敬の目で見つめる者が一人……

「すつ、凄い筋肉……………それに比べて僕って…………」

自分の身体の貧弱さに、少しだけ悲しくなるユーノ。
もう、男としての自信を失いかねない。知識だけじゃなく、身体をもっと鍛えようと、密かに決意したユーノであった。

〓〓 対決！ 恭也VSディオ！！〓〓

場は異様な雰囲気包まれている。

普段なら和気藹々と騒ぐ人影も、今は見当たらない。全ての人間が、互いに構えた二人を見守っている。

一人は、ご存知悪の帝王ディオ・ブランドー。

そして、それに対するはディオに、強力な敵意を向ける恭也。

誰も何もしない、否！出来ない！例え魔王でも二人の激突は止められない。

「恭也……お前如きが、このディオに挑むとは……人というのは、余りにも壁が高すぎると馬鹿になるようだ」

「ほざくな、俺がお前に引導を渡してやる、この日、この場所でない！」

抜いたツ！恭也は己の獲物を抜く！そして構える！全ては目の前の強敵を倒すために。

勝利の栄光を、この両手で掴むためにツ！

「高町恭也、推して参る！」

「精々足掻くがいい、このディオが直々に歯向かった事を、後悔させてやるっ」

ついに……

ついに戦いの火蓋が切って落とされてしまう。

二人は激突した
互いに全力全開

油断慢心は一欠けらもない
お互いがお互いを敗北させる為に力を振るう。

そう二人は激突した

卓球で………

「ええい、貧弱！貧弱ウ！」

恭也の打った、弾丸のような球を容易く打ち返す。

だが、譲らない。恭也は神速と呼ばれる秘儀を使い、ディオに対抗していた。

卓球では、余りにパワーを込めればアウトになる………つまり吸血鬼としてのパワーを使えば、簡単にアウトになってしまう。

だがパワーが封じられたところで何か、吸血鬼の能力は^{チカラ}パワーだけじゃない。動体視力、スピード、反射神経、全てにおいて人を凌駕するッ！

しかし、それでも恭也は諦めない。

元々、スペックでは劣っているのだ。ならば作戦で勝つのみ！

「なっ、カーブだとオ！」

高すぎる反射神経が災いした。

既にディオは、球が来る方向へと移動済み。幾らディオといえど0

秒で、方向転換する事は出来ない。ならば諦めるのか？否！断じて否である！

決して諦めない不屈の魂、その魂の力が動く！

そしてデイオは蹴った！ラケットを！

吹き飛ばされたラケットはッ！

「馬鹿な！蹴り飛ばされたラケットが、球を弾き飛ばしただとッ！」

勝利を確信していた恭也は、反応が遅れた。

しかし、それは僅か数瞬の時間。だがその僅かな時間が勝敗を分けた。

球は恭也のラケットに触れぬままに通過して……………勝利者が決定した！

「どうやら、俺の勝ちのようだな、恭也！」

「クソッ！……………俺の…敗北だ…」

恭也は悔しそうに言うが、誰も恭也を馬鹿にしない、いや出来ない。何故なら二人は、全力を尽くして戦い……………その結果としての敗北なのだから。

「だが、いい勝負だった」

デイオは、吸血鬼である己と、人の身でありながら拮抗した恭也に、素直な賞賛を送る。

彼は、相手の実力を過小評価するような愚か者ではない。相応の実力を持つ者ならば、敵だろうと嫌悪する者だろうと評価する。

「ではもう一戦……………又ッ！」

恭也にもう一回誘おうとした時に、感じる気配。

「どうしたディオ？」

怪訝になった恭也が訊ねる。

「どうやら発動したようだ」

「発動したって、ジュエルシードか!!」

探す、ジュエルシードの気配を！

どうやら既に、なのはは向かっているらしい。

直ぐに、服を変えると一目散にジュエルシードの下へと向かった。

第7話（後書き）

次回は、交渉人ディオ・ブランドー

第8話（前書き）

全くリリカルの欠片もない、大人の時間です。交渉と言う名の……
…

第8話

ディオが、その視力をフルに使って、現場を見ると話し合いをしている二人と二匹が見えた。しかし、話し合いは長く続かなかつた。犬がなのはに襲い掛かり、ユーノがそれを転送魔法を使ったのか二匹とも何処かへと消失する。

それだけじゃない。どうやら、なのはも、停戦交渉の事を忘却して戦おうとしているようだ。これは不味い。

「待ちたまえ！二人共！！」

ディオは二人の間へと割り込む。

「ディッ、ディオさん！！」

「新手ッ！？」

なのはが驚愕し、金髪の少女が警戒する。だが、構わずに話を続ける事にした。

（どうやら、理知的な思考はあるようだな……それにこの様子なら、話し合いの途中で攻撃する等という事はしないだろう）

「なのは君も言ったと思うが、こちらに戦闘の意思はない。先ずは話を聞いて貰えないだろうか？」

「ッ！！……話をしても……意味はありません……」

「いや、意味はある。

君は勘違いをしているかもしれないが、我々の目的はジュエルシードを収集する事ではない」

「えっ！ならどうして…ジュエルシードを集めているんですか？」

「それは誤解だよ。

我々の目的は、あくまでもジュエルシードをこの世界から無くす事であり、それを利用するつもりは毛頭ない。

という訳で……………君の目的を教えてくださいか？
目的次第では、我々は君に協力しよう」

「へっ、協力？」

「そうだ。無論その目的が物騒なモノならば敵対する事になるが…

……………」

「いえ……………たぶん物騒な目的じゃないと思います…」

（たぶんだと？曖昧な返答だな。

もしか、こいつ……………ジュエルシードを何に使うのかも知らないのか？

ならば、利用されているだけなのか……………それとも、こいつには言えない事情があるのか……………）

「その言い方では、君は己の意思で集めているのではないようだが……………一体誰の為なのかね？」

「…私は母さんに頼まれたから……」

(……！)

ディオは心の中で笑みを浮かべる。

(母ッ！これが、この餓鬼の行動原理！
ならば、これを上手く利用して……)

「そうか、それで君の母親は、ジュエルシードを早急に手に入れた
がっているかな？」

もし、そうであるならば悪い条件ではない筈だ。一人で搜索するよ
り人数を揃えた方が、効率的なのは分かるだろう」

「……………」

(よし、こちらの話に食いついてきたな。
後は引くだけ……)

「もしも、早く手に入れば、君の母さんも喜ぶだろう」

「！」

ディオの語る、悪魔の囁きに少女の肩がピクツと震えた。
少女は、ディオの目を見て……

「それは……本当ですか？」

「勿論だ。必ずや君の母君はお喜びになられるだろう」

（勿論、喜ぶだけだが。

娘を、危険なロストログアの探索に出す程だ。どうせ碌な親じゃないだろう。ならこの餓鬼は、単なる手駒の一つ……………そしてこの忠誠心、洗脳でも施しているのかもしれないな……………）

「ディオさん……………その……………」

話が終わったと見るや、なのはがバツの悪そうな表情で話しかけてきた。

「どうやら、君は交渉事には向いていないようだ……………」

「すみません……………」

「ははははは、そう気に病むことはない。

君は若い。大人とて失敗する事があるというのに、君の年齢で完璧を求めるほど、私は酷い男じゃあない。

しかしだ……………交渉が失敗したからとはいえ、直ぐに暴力に訴えるのは良くない。暴力ほど非生産的な行いはないからね」

「はい

」

なのはは、ディオに言われた事を肝に銘じて、次こそは同じ失敗を繰り返さないようにしようと誓うのであった。

〓〓 仇敵思考 〓〓

「待ちたまえ！二人共！！」

私が、白いＢＪの魔導師と戦おうとした時、突然にもう男の人が乱入して来た。

私と同じ金髪赤目……………

そして旗から見ても分かる……………強烈な存在感。

男の人なのに、女性のような色気を感じる人。

そんな人が、言った言葉は…

「なのは君も言ったと思うが、こちらに戦闘の意思はない。先ずは話を聞いて貰えないだろうか？」

そんな…………あの子の言った言葉と、あまり変わらない内容だった。

何となく腹立たしさを感じる。この人は、他の人と同じ行動をしちゃいけない人だと思ったから…。何でか？と問われても困る。ただ、そう…なんとなく、そう感じたのだから。

「ッ！！……………話をしても…………意味はありません…………」

だから、若干の腹立たしさを込めて、そう返答した。

彼の表情は全く変わらない。もしかしたら、こちらがこう答える事も予測済みだったのかもしれない。

「いや、意味はある。

君は勘違いをしているかもしれないが、我々の目的はジュエルシードを収集する事ではない」

この言葉には、素直に驚いた。この人と、白い魔導師は仲間同士、たぶんそれに間違いはない。そしてその、白い魔導師はジュエルシ

ードを集めている様子だった。
だからこそ、私は猫の時も問答無用で撃墜したのだ。
しかし……………それが間違い？

聞くところによると、ジュエルシードがこの世界にあるのは、輸送中の事故が原因らしく、彼と白い魔導師は、放って置くと地球が危ないからこそジュエルシードを収集しているのであって、別にジュエルシード自体には用もないそうだ。

それで……こちらの願いが、地球に害さない事ならば協力するとも言っている。しかし……………どうしよう。

私は彼の問いに答えられない。何故なら、私は母さんの願いを知らない。

それに母さんからの“お願い”はジュエルシードを集めてくる事だけ……………

勝手なことをして、母さんに怒られるのは……………嫌だ。
だからこそ、私は次の言葉に食い付いた。

「もしも、早く手に入れば、君の母さんも喜ぶだろう」

喜ぶ、誰が？

決まっているじゃないか、母さんだ。

もし喜んでくれれば、また昔みたいに優しい母さんに戻ってくれるだろうか……………いや！絶対に戻る！そしたら、また私に笑いかけてくれる筈だ！

私に、彼の要求を拒否する術はなかった。……………気付いたらアルフに戦いを止めるように言ってから、ゆっくりと頷いていた。

「クール・マザー」

「悪いね、急な事だったので、満足な接客も出来ない……………これで我慢してくれ」

少女と使い魔？らしい女性に自販機で買ったお茶を渡す。

此処は、旅館から少し離れた公園、そのベンチ。旅館内で話したのでは、こちら側の数が多すぎる。それでは、この少女も警戒してしまい交渉にならないかもしれない。

「では交渉に……………と言いたいが、先ずは名前を教えてくださいかな？何時までも君では面倒だろう。……………私の名前はディオ・ブランドーという。ディオと呼んでくれて構わない」

「私は高町なのは。私立聖祥大学付属小学校の三年生です！」

「……………フェイト・テストロッサ」

「……………アルフだよ……………」

アルフと名乗った女が、胡散臭そうな顔をする。

直情的なタイプだな。

ご主人様に付き従う忠犬か……………実に吐き気がするッ！
やはり、犬というのは気に食わない。

「フェイト君、私の要望は変わらない。

私達と協力関係を結んで欲しい。その場合、信用の証として、こちら側の所持するジュエルシードを進呈しよう。これは発掘責任者であるイタチ君も了承している。

だが、それは君の母が奇妙な目的を企んでいなければの話だが……」

「大丈夫です……………母さんは優しいですから……………」

クッククック、典型的な依存だ。

これは、思考誘導もやり易い。フエイトの思考回路は全てが母中心、母の命令は、全てにおいて優先される。

飼い犬は主人に似るとは、よく言ったものだ。正に犬同然じゃあないか。それも有能な獵犬だ、屍生人^{ゾンビ}にでもしようか、中々に有能な部下となるやもしれない。

「では、君の母君の居る場所へあんな「その必要はないわ」
ッ……」

何も無い空間に、突如として画面のような物が出現した。

画面に映るのは、冷たい目をした、具合の悪そうな女性。

駄犬の糞でも詰まっているのか、この餓鬼の目は？

色眼鏡を使っ^{フエイト}て見ても、到底優しい母とは思えない。

寧ろ、こいつは餓鬼^{フエイト}の事を道具……………いや嫌悪しているように見える。例えるなら気に食わないが、道具としては優秀だから使っている、とでもいった様子だろう。

新発見だッ！親馬鹿じゃあなく、娘馬鹿というのもあるようだ。初めて知ったぞ。

これは何だ？世に言うマザコンというものなのか？

「これは、これは…………盗み聞きとは人が悪い……………君がプレシア・テストロッサ女史で相違ないかな？」

「ええ、私がプレシア・テストロッサ。その子の……………母親よ」

随分と嫌そうに母と名乗る。

この女がフェイトを嫌悪しているのは、ほぼ間違いないな。
しかしどうしてこうも、女というのは感情が出易い。

女のヒステリックは煩かったからな……………暇潰しに、一緒に
出かけたぐらいで付き合った気になりやがって、もしも元の世界へ
戻ったら殺してやるッ！

っと、そんな如何でもいい女の事など考えている場
合じゃあない。時間の非生産的な活用だ。そんなくだらない事を考
えるなら、空は何で青いのか考えるほうが、よっぽど生産的だ。

それにしても、この女、フェイトを監視していたのか。つまり信頼
はしていない相手だという事でもある。娘が心配だからという確率
は刹那にも劣るッ！

この女も現代の子供を殺す母親と同類か……………世界は違えども物事
の本質は変わらないという事が。

「話は聞いていたと思うが、念の為にもう一度言おう。私はフェイ
ト君との共闘を提案する。

だが条件としては、先ずプレシア女史……………君の目的を教えて貰
おう。幾ら何でも、私を害する相手と共闘するようなM野郎ではな
いのでね。

もし君の目的に納得がいった場合、我々は君に協力する。二つ目の
条件はジュエルシードを集め終わったならば地球には干渉しない事
だ」

「私のメリットは？」

「言うまでもないが、短時間でジュエルシードを収集し終える事が
出来る。

そして、我々と争い、そして敗れるというデメリットがなくなる事

だ」

「……………いいわ、その条件呑みましょう」

「そうか、では目的を言って貰おう。
全てはそれからだ」

「分かったわ。フェイト下がりなさい。貴女に聞かせる必要はないわ」

「ちょっとまちな！どうしてフェイトが聞く必要はないんだい！ジュエルシードを集めてるのはフェイトなんだよ！！」

「はぁ……………フェイト。貴女は使い魔を造るのが下手ねえ。余計な感情を持ち過ぎるわ」

同感だ。道具に感情は必要ない。

道具はただ決められた事を忠実に行えばいいだけだ。
物事を感じ、行動に移すのは人の役目だ。

「クツ、あんたねえ……………」

アルフが再び食って掛かろうとするが

「アルフ、母さんにそんな事を言っちゃ駄目だよ……………」

「…フェイトがそう言うなら……………」

しかし、一応は娘であるフェイトには話せない内容。
腹黒い事を考えているようだな。ならば……………」

「なのは君、きみもフェイト君と一緒にきたまえ」

「えっ、でも……」

「こういう交渉は大人の仕事だよ。

君はフェイト君と話せばいい。お話がしたかったのだろう？

これから共闘関係になるやもしれない間柄……互いを知っていた方がいい」

「そうですね……はい！分かりました！」

そう答えると、フェイトの後を追って行く。

これで……

「邪魔者は消えた………大人の時間を始めようじゃあないか」

デイオはゆつくりと、画面上のプレシアへ微笑みかけた。

その顔は一見すると天使のようでもあり………その実は悪魔の笑みであった。

「 交渉と動機と愛娘 」

「口で言うより、見た方が早いでしょうね。これが私の“動機”よ」

「なッ………なんだと………」

驚愕するッ！画面上に映る場所。地面から現れた魔法陣から一個の生体カプセルが現れた。

別に、そのカプセルに脳髓や死体が入っていても驚かなかった。魔法がある世界だ。そんな事があっても不思議じゃない。驚くのは中にある死体ッ！それは正に……

「フェイト・テストロッサだと……」

「違うわッ！あんな人形と一緒にしないで！」

『人形』 『同じ人間』 『フェイトより幼い』 『娘への憎悪』 『プレシアの態度』

全てのピースを組み合わせると、一つの仮説が浮かんできた。

元の世界ならば荒唐無稽な戯言だが、この世界は魔法の世界………
…それもイタチの話を聞く限りでは、魔法と科学が融合し極端に発達した世界。

ならば、こういう事もあるのかもしれない。

「まさか、フェイトはクローンなのか？」

「大正解！アレは私の娘、アリシアのクローン！でもクローンというのも相応しくないわね。アレはアリシアの記憶を挙げたのに全然駄目だった。姿形は間違いなくアリシアよ！！だけど違うの。全然違うのよ！行動も性格も才能も言葉遣いも態度も食べ方も歩き方も頭の出来も優しさも魔法も呼吸の仕方表情の変化も全てがッ！！全然違うのよッ！！」

「つまり君の目的は、娘の蘇生でいいのかね？」

「そうよ、私は取り戻す。私達は旅立つの。。アルハザードへ！」

この時は聞き流していたが、アルハザードというのは、既に遺失した古代世界であり、卓越した技術と魔法文化を持ち、そこに辿り着けばあらゆる望みが叶う理想郷として伝承される場所だそうだ。

しかし、これが俗に言う『ヤンデレ』なのか……。

先程の考えは訂正しよう。

自分の子供を殺すような親に爪の垢を煎じて飲ませたいぐらいだ。同時に侮れない女でもある。

俺は人間を侮りはしないッ！

“ディオ”を倒したのは、それ以上の力を持つ怪物ではない、人間だッ！

ジョジョが言った言葉だが、人間は成長する！

このディオ、認めよう。人間は時に恐ろしい爆発力を発揮する。

そして“ディオ”は、人間の爆発力に二度までも敗れ去った。

「いいだろう。君の言葉を信じようじゃあないか、我々は君の目的に協力する。」

このディオ、誓おうじゃあないか」

「そう、こちらとしても良かったわ。あの出来損ない一人じゃ心配だったから……」

プレシア…………俺の目的は変わったよ。

お前は、このディオが直々に殺すッ！

“ディオ”が敗れた人の感情が生み出す爆発力！

そして、プレシア。娘を想う貴様の気持ちは、ジョジョに決して劣ってはいない。

ならば、その爆発力。克服してみせよう！

「交渉が上手くいって良かったよ、プレシア女史。
では、夜も遅い。Good night!!」

「そうね、私も忙しいから、この辺で終わらせるとしましょう」

全く本音のない、悪魔と魔女の化かしあいが終わる。

二人は外面では笑顔を浮かべながら、お互いがお互いにお互いを殺そうと思案するのだった。

第9話（前書き）

クロノ登場！

第9話

共同作業は捗る。

同じ作業でも一人で行うのと二人で行うのでは、作業時間も大きく違う。単純な計算でも二分の一、もしかしたら更に時間を縮められるかもしれない。

ジュエルシードが暴走して暴れたとしても関係はない。

二人は幼いながらもAAAランク相当の実力を持っている。勿論、歴戦の強者には勝てないだろうが、真つ向勝負ならば相手が魔導師でも難なく倒せる強さを、二人は持っている。

つまりジュエルシード回収作業は実に……実にスムーズに事が運んでいた。

妨害する者もなく、また海鳴市の人々も青い宝石を見かけたら、翠屋に連絡が来る。

温泉旅行から帰って二日で、既にジュエルシードは海鳴市から無くなっていた。

だが未だ終わらない。

ジュエルシードはまだ残っているのだから……

青い宝石は、海底で静かに時を待つ。

「時空管理局執務官」

「じゃあやるよ…」

フェイトが自分のデバイスであるバルディッシュを構える。
彼女が行おうとしているのは戦闘ではない。

海底にジュエルシードがあるのは分かっている。だから海に魔力を流しジュエルシードを強制発動させようというのだ。

今回は危ないかもしれないのでディオも一緒に来ている。ちなみにディオはリンカーコアはあるらしいのだが、未だ上手く魔法が使えないのでユーノの補助で飛行……………というより浮遊していた。

フェイトの額から汗が落ちた。

無理はない。かなり危険な上に、本人にも負担の掛かる方法なのだ。このような作業には魔力量よりも繊細な技量が必要になる。なのは

魔力を掛けすぎれば大暴走、掛けなさ過ぎたら発動すらしない。

慎重に、慎重に作業していく。

そして

ついに発動した。

荒れ狂う竜巻、しかしながら数は一つ。

確認したところジュエルシードは五つあるようだが……………やはり慎重に行ったのが良かったのだろう。これならば、何とか封印出来る。

「どうやら…俺の出番はないようだな……………」

素人目から見ても、なのはとフェイトは順調に封印作業を続けており、このままいけば何事もなく封印する事が出来ただろう。

そう、何事もなければ……………

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。事情を説明して貰えるだろうか？」

固まった！時空管理局という単語に！

フェイトは今でこそユーノ達と協力関係となつてはいるが、自分達
のしている事が、一般には犯罪と呼ばれる行為だという事は理解し
ている。

故にフェイトのつた行動は……

「アルフ！その人を抑えてツ！私はジュエルシードを！」

「フェイト！何を！」

無謀！それは余りにも無謀過ぎる特攻！

フェイトは僅かに沈静化したとはいえ竜巻の中へと飛び込む。

「フェイトちゃん！」

それを黙って眺める、なのではない。

自分の出せるMAXスピードでフェイトを追った。

だが時既に遅くフェイトは竜巻の中へと飛び込んでいた。人には得
て不得手がある。そして高町なのはの才能はどちらかと言うと砲撃
に偏っており、スピードという面においては完全にフェイトには及
ばない。

故に誰もフェイトに追いつく事は出来ない。誰にも止められない。

その頃、乱入して来た執務官

クロノ・ハラウン

も思考していた。

（どういう事だ？

最初は協力してロストログアの封印作業をしてると想定していたの
に………

完全に予想外だ。遺跡発掘責任者であるユーノ・スクライアも一緒
にいる。ならば二人はユーノ・スクライアの協力者と見て間違いな

いと思っていたのに、これでは無茶苦茶だ)

だが現実には、クロノの発した時空管理局執務官という肩書に反応して焦っている。

清廉潔白な人間ならこういった態度はとらない。つまり彼女には何か後ろめたい事がある証拠。

直ぐにでもフェイトを抑えたいクロノだったが、冷静に状況を観察する。

(しかし、あの少女を捕まえるにしても、今はロストロギアが暴走している。

それ程、大した暴走でもないから、僕には難なく止められるだろう。しかしあの少女を捕まえるのに時間を掛ければ、被害が増えるかもしれない。

ならば……………仕方ないッ！)

「君達、色々と聞きたい事はあるが、先ずはアレを何とかするのが先だ！」

だが、そんなクロノの言葉を遮る存在がいた。

「フェイトの邪魔はさせないよ！」

「くっ、君は……………邪魔をするなら、君からやらせて貰うッ！」

クロノは素早く複数個の魔力弾を形成、そして放つ！アルフへ！だがアルフとて未熟じゃない。あっさりと避けるが、それはフェイント！本命は……………

「後ろッ！回り込んだのかいッ！？」

師であるアリアとロツテから教わったのは魔法だけじゃあない。いや、もしも魔法だけしか習っていなかったのならば齡14で執務官を勤めるなど不可能！

一般的な子供が、学校で遊んでいる中でクロノは毎日毎日、気が遠くなる程の鍛錬を積んできたのだ。

その実戦経験という名の力は、フェイトやなのはを大きく上回る。ただ才能だけに頼った力ではない。地味な反復練習と学習によって培われた蹴りを、アルフの背中に叩き込むッ！

「ガハッ」

大きく弾き飛ばされたアルフ。

しかし、フェイトの為に戦うという執念により踏みとどまった。

だが、既に死神は直ぐそこにまで迫っている。

クロノは新たに展開した複数個の魔力弾を発射して……………
白い少女に防がれた。

「……………君も彼女達の仲間なのか？」

「突然、攻撃を仕掛けてくるなんて何処の子！？どうしてこんな酷い事をするの！！」

「僕は管理局の執務官クロノ・ハラOWNだ。さっき言っただろう……………ッ！不味いジュエルシードが」

迂闊、これ程に大暴走が早いとはッ！

クロノは急いで封印しようと準備するが、時既に遅く、フェイトがジュエルシードを両腕で掴んでいた。

「無茶だ！暴走中の………しかも五つのジュエルシードにあんな封印をしたら………」

最悪の場合、逆に次元震を巻き起こすかもしれない。

そんな言葉を発する間もなくフェイトは多量の魔力をジュエルシードへと与えていた。

同時期にディオも混乱状態にあった。

しかし、卓越した頭脳で直ぐに状況を把握する。

（あの小僧は“時空管理局執務官”と名乗った。執務官という役職は分からないが、随分と偉そうな口ぶりだった。あれは下っ端には出せない声だ。

ならば小僧は管理局という組織内において、ある程度の地位にある可能性は高いッ！

こんな時こそ災いを転じて福となすのだ。この俺の計画としては、時空管理局へのコネを作るのは必要不可欠、だが詳しい組織体系は分からない。やはりこの期に接触しておくべきだ。

そうなるとフェイトは用済み………ここらで切り捨てるのが利口だな。しかし管理局の実態が不明な以上、過剰な行動は避けなければならぬ。殺すのは無しにするか
ッ！！）

だが思考中にディオが見たのは、信じられない光景だった。

飛び込んでいたのだッ！フェイトが！単身で竜巻の中へと……

そして掴む！それでもジュエルシードは収まらない

いや寧ろ逆に活性化しているようにも感じられた。

（くっ、獲らぬ狸よりも、今は差し迫った危機を防ぐのが先決だッ！それにしても出鱈目な行動をとりやがって！この下種女がッ！）

だがディオのスピードでは、どう考えても間に合わない。見れば既にフェイトはジュエルシードを掴んでいる。あそこまで一瞬で移動するとなると………そうだ、時を止めるしかないじゃあないか。ディオはニヤッと笑う。

時よ止まれ

ザ・ワールド!!

0・5秒経過

ディオがユーノを放り投げる

一秒経過

途中で停止したユーノを踏み台として二段ジャンプ

二秒経過

竜巻へと到着した

三秒経過

“世界”がフェイトを押し退けてジュエルシードを掴む

そして時間は動き出す

「グッ、これは中々に辛い…」

ディオの手がどんどんボロボロになっていく。

スタンドが傷つけば本体も傷つく………そのルールからは吸血鬼であるディオですら逃れられない。

「馬鹿な、君はさっきまでそこに居た筈だ!!何故そこに現れたんだ!?!」

クロノは混乱していた。

まさか瞬間移動でもしたというのか、この短時間で？誰にも気付かれる事もなく！？

ありえない、素人なら兎も角として、此処には執務官である自分がいるんだぞ！

混乱し掛けた頭を、自分の尊敬する人物である、提督の言葉を思い出して沈静化させる。

（そうだ……………こんな時でこそ冷静さが最大の友だ……………

落ちつくんだ…『素数』を数えて落ちつくんだ…『素数』は1と自分の数でしか割ることのできない孤独な数字…僕に勇気を与えてくれる。2…3…5…7…11…13…17…19……………）

ディオはクロノが阿呆な事をやっている間にもジュエルシードの封印を続けていた。

外へ飛び出そうとする魔力！それをスタンドのパワーで強引に…押し留めるッ！

「止まれ、止まれ、止まれ、止まれ」

止まらない、止まらない、止まらない、止まらない。

ジュエルシードは止まらない。

「止まれえエエエエエいいいいいいい……！」

気合一閃！

ジュエルシードは停止した。

「ふんッ、たかだが石ころ風情が手こずらせる」あの……」

ああ？」

「どうして、私を助けて……………」

くれたんですか？

そう聞こうとしたところで絶句する。ボロボロの手、先ず間違いないジュエルシードの封印の際に出来た怪我だろう。遅しかった手の平は、今では無残なまでに破壊され尽くしている。

「こんな怪我、血でも搦れば治る。さて……………」

手の平がやられたところで、ザ・ワールドには戦うのに、何ら支障はない。

幸いフェイトは油断しきっている。今なら楽にフェイトを無力化させられるだろう。

だが予定とは上手くいかないものだ。

「フェイト、今の内に逃げるよッ！」

「アルフ……………うん」

フェイトが一瞬だけディオに視線を送った後、大空へ向かって飛翔する。

ディオは再び時を止めようとしたが、思いとどまる！恐らくは“管理局”とやらもこの映像を見ているだろう。余り自分の能力を晒すのは得策ではない。

「フェイトちゃん！」

なのはが呼び止めようとするが、

「じめん」

一言、それだけ呟くとフェイトとアルフは何処かへと消え去っていった。

それは、短い…短い共闘関係が消失した瞬間でもあった。気を取り直しディオは、再び微笑を浮かべる。

「さて、時空管理局と言われたようだが、こちらとしても状況が掴めない。お互いこの辺りでお互いに理解を深めた方がよいと思うのだが……………どうかね？」

「どうやら、君には話しが通じるようだな…」

漸くまともな話が出来る人間を見つけた、少し安心する。それにしても今日は、予想外の事の連続で疲れた。だが、クロノは未だに知らない。

この男の存在が、最も予想外な存在だという事を……………クロノは知らなかった。

「君達には一度アースラ……………次元航空艦に来て話をしたいところなんだが……………」

「なんだが？」

クロノが海面を指差す。

そこにはボロ雑巾……………もといディオに踏ん付けられてボロボロとなったユーノが一匹。

「彼を回収しないと……………余りに不憫だ」

第9話（後書き）

この話で三度目のザ・ワールド。

というよりは主人公が一回も戦闘らしい戦闘をしていない事に気付いてしまいました。

何故かアンチ管理局が流行る昨今。この小説では敢えて流れに逆らって、少しでも印象の良い管理局を目指そうかな～と思います。ぶっちゃけるとアンチは余り好きな要素ではないので……

第10話

「女狐と悪魔」

「つまり貴方達は、街に落ちたジュエルシードを効率良く封印する為に、あの子と手を組んでいたというのね？」

「はい。敵対しながらジュエルシードを集めるのは効率が悪いですから」

次元航空艦アースラ、何故か艦内にある和室にディオとなのはとユーノ、そしてリンディ・ハラオウン艦長とクロノ・ハラオウン執務官がいた、今までの経緯を話す為である。

「そうか、それで他に彼女達について知っている情報はないですか？何でもいいのです」

クロノがディオに問い掛けた。

彼は、フェイト達との共闘関係を結んだのも搜索を指揮していたのもディオと聞いている。つまり彼は、フェイト達の黒幕と………そして動機を知っている筈なのだ。

「それについては………なのは君とユーノ君は一回退室して貰えないかな？少しばかり子供の教育には芳しくない内容なので………」

「……分かりました。なのはさん、ユーノさん。二人は一回退室してくださいませんか？」

最初はなのは反抗した。

だがディオがやんわりと諭すと頷く。どうやらディオの言う事には逆らえなくなってしまうたようだ。これもディオのカリスマ性の所以だろうか。

「さて、単刀直入に言いましょう。フェイト達の黒幕、それはプレシア・テストロッサという名前の女です」

「ッ!!」

プレシア・テストロッサ……………

数年前に唐突に姿を消した大魔導師。まさかそんな大物が関わっていたなんて……」

リンディはプレシアの名を知っていたようだ。クロノはその名を聞いて、何処かへ念話をする。

だがディオは構わずに話を続けた。

「そしてプレシア・テストロッサの目的
の蘇生です」

それは娘

「そつ、蘇生!? 如何いう事なんだ! プレシアの娘はあの子じゃないのか!」

クロノは敬語を使うのを忘れて叫ぶ。

予想外の連発に、流石のクロノも頭が痛くなるのを感じた。

「驚くのも無理はありません。これは全てプレシア女史から聞いた話なのですが、フェイト・テストロッサは彼女の実の娘、アリシア・テストロッサのクローンだという話です」

「くっ、クローンですって!？」

「かあさ…艦長。エイミィに確認をとったところ、プレシアは最初の事件の時に娘の……アリシア・テスタロッサを亡くしているようです……そして彼女が最後に行っていた研究が……使い魔とは違う、使い魔を超える人造生命の研究。

プロジェクト「F・A・T・E」つまり彼女は……」

「そう、フェイトという名前はそのプロジェクトから……」

苦虫を噛み殺すような顔をする二人。

リンディは少しだけ黒い面もあるが、基本的には善人に分類される人間だ。

このような事を聞いて気分が良い筈もない。

「彼女達の動機については分かりました。だが例の使い魔のような奴は何なんですか？僕は今までにあんな魔法を見た事がない」

「あれはスタンドというものです」

「スタンド？魔法とは違うのかしら？」

「いえ、それ程違いはありませんよ。言ってしまうえば貴方達言うようなレアスキルと違いありません・召喚魔法と同じ様な事です」

「レアスキルか……この世界には魔法文明はない筈なんだが……
…君の力は何処で身に付けたんですか？」

「生まれつきという他ないですね。この世界に生を得てから直ぐに、

この能力は使えていました。

まあ便利な力なのでこの機会に色々と利用させて貰いましたが。けれど、何かと不便な面もある力ですよ。

私の半径十メートル以内までしか動けませんし、ですから移動するとなると私まで一緒に動く必要があります」

それには普通に驚く。

管理外世界とはいえ魔法の素質を持った人間はいる。

事実クロノの知り合いであるグレアム提督もイギリスの出身だ。

しかし管理局でも未知のレアスキルが、管理外世界の住人が持っている等というのは、滅多にない……というよりは、そんな例は未だ嘗てない。

地球が管理外世界に登録されているのは、単純に言えば魔法文明がないからだ。

昔には“魔法”を使う事の出来る一部の人間がいたが、魔女裁判を始めとした弾圧により、今では完全に廃れてしまっている。使用法が完全に確立されている訳でもないので魔導師のような力を得る事は少ないが、それでも極々少数の高魔力を持った人間は、魔導師に匹敵する能力を身に付けてしまう場合がある。

魔法文明のない世界に、卓越した魔導師がいるのは良くない。簡単に犯罪も出来るし、魔法無しでは逮捕出来ないからだ。なので魔法を使って犯罪を犯した場合は、その犯人は管理局で裁かれる。

ジュエルシードのような危険なロストロギアの場合でも同様だ。

日本政府も含め、地球に存在する国家に“魔法”という力で構成されたロストロギアを対処する手段はない。だから仕方ないので、そのような場合は管理局に対処を依頼する形が執られている。これは国連で正式に決定した事であり、各国の元首と一部の人間しか知らないトップ・シークレットでもあった。

だがスタンドは違う。

ディオは生まれ付き持っていた能力であり、また自由に操れたとも言った。

もしも、ディオと同じ様にスタンドを自由自在に操れる人間が多かったとすれば、管理外世界という名称も考え直さないとならないかもしれない。

「君と同じ様にスタンド使いと呼ばれる人間は、他にはいるのか？」

「いや、私の他にスタンド使いは知らない。たぶんだが、私以外にスタンド能力者はいないだろう。私が世話になっている月村家は、ある程度は裏の事情に詳しいが、私の他にスタンドのような能力は確認されていないと言っていた」

ディオの答えは否定であった。

「先ずは安心する。」

「そうだ。君のスタンドというのは、さっきの戦闘で瞬間移動したように感じたんだが、あれは……」

「“瞬間移動”で間違いないよ、クロノ・ハラウン執務官。

私のスタンドには、瞬間的に移動する能力がある。勿論、それ程遠くには行けないし、連続使用も不可能、まあ切り札のようなものだ」

「話は分かりました。これよりこの事件は、管理局が担当します。貴方はなのはさんと一緒に家へ戻ってください」

「つまり我々はお役御免と？」

「そうです。ロストログアの確保が管理局の仕事です。民間人が関

わっていい事じゃありません」

クロノはそう断言する。

まあ当然だ。管理局は言ってしまえば警察組織だ。

警察が捜査に民間人を使うなどはない。

探偵が警察と一緒に事件を解決するのは、物語の中だけの話だ。

「ですが、いきなり言われても頭の整理も出来ないでしょうから、家に帰ってなのはさん達と一緒に、よく話し合って下さい」

(ッ!.....)

(話し合っッ！)

つまりそれは、俺となのはとイタチに今後の事を決定しろと、そう言いたいのかこの女はッ！

仮定の話だが、なのはが大人しく家へ帰って話し合えと言われた場合、採るであろう選択は.....即ち捜査協力！もしも普通の警察

組織ならばこんな事はしない、ただ大人しく家へ帰れと言うだけだ。つまり管理局側には、なのはに協力させたいという事情があるという事だ。情報は.....関係ないな。となると人材としてか。しかしジュールシードは、ほぼ集め終えた。残りは少ない。

ならば、この艦は人手不足なのかもしれない。それに折角だ。折角管理局と接触出来たのだ、これを利用しない手はない。ならば俺が取るべき選択肢はッ！」

「リンディ艦長で宜しかったですね」

「ええ、なんでしょう？」

「少しお話をしませんか...？」

（こいつ等と友好的な関係を結ぶ事だッ！）

「子の愛情、親の憎悪」

此処は時の庭園。

プレシア・テストロッサの拠点であり、数多の傀儡兵が守る城でもある。

その玉座の前で、フェイトは鞭打たれていた。

「本当にッ！使えないッ！駄目な子ねッ！」

「うう…ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「貴女がッ！泣いても！叩くのをやめないッ！」

狂気！正に狂気の行い！

実の娘を鬱憤を晴らすかのように叩き続ける！
そこに“容赦”という言葉はない。

「いい？フェイト。貴女はこの大魔導師、プレシア・テストロッサの娘なの。」

失敗は許されない、分かる？」

「はい……………分かります……………」

「ならこの失態は如何いう事かしら？」

管理局の介入を許して、五個のジュエルシードすら回収出来なかったッ！

母さんにとって、五個のジュエルシードがどれ程に大切なのか分からないの！」

「……いえ………分かります」

「ならその命を賭して奪ってきなさい！

さもないと、一生貴女に構ってあげないわ！」

ビクンッ！

反応した。鞭で叩かれても反応しなかった身体が揺れた。

「お願いします………頑張るから見捨てないで下さい………お願いします………」

「なら、さっさと行きなさいッ！次はないわよ！」

フェイトを吊るしていた鎖が消えた。

自由になったフェイトはヨロヨロと立ち上がると、ゆっくりと扉へと歩いて行った。

「相変わらず使えない子………けどもう直ぐよアリシア………」

ジュエルシードはかなりの数が集まっている。

全部ではないが、この数なら問題ないかもしれない。

だがプレシア・テストロッサー一生一代の大博打、出来る限り念には念をいれておきたい。

彼女もフェイトがジュエルシードを奪い返せる可能性は、殆どない事は理解している。

ディオとは共闘関係を結んでいたが、それは互いの利益の為に利用し合っていただけ、管理局という利用対象を得た今となっては、自分を切り捨てているだろう。自分ならそうする。

フェイトが戻ってくるなら良い、例え捕まったとしても、あんな出来損ないの人形が、死んだところで自分には痛くも痒くもない。寧ろ清々しいくらいだ。

「フェイト……私にとって貴女は……果てしなく如何でもいい存在なのよ」

呟く。フェイトが聞けば発狂し兼ねない言葉を呟いた。
今宵、運命は交差する。

第10話（後書き）

そんなこんなで無印編もラストスパート。

ラストのディオVSプレシアを残すだけとなりました。

少しだけ時間があるので、この機会にA・S編の予告を一つ……

第一級搜索指定ロストロギア！通称は闇の書ッ！

数多の主を取り殺してきた呪いの魔道書

しかし悪とはより巨大な悪によって吞まれる運命

それは闇の書も……そしてディオですら例外ではない

侵食される精神

奪われていく記憶

そして遂に……

冥府の底から……

あの男が

蘇るッ！

ヴァンパイア・オブ・リリカル
く過去からの遺産く

偽物は本物に勝てるのか！？

その答えは……………“世界”だけが知っている

2010年夏

始動！！

第11話（前書き）

後書きでお知らせがあります

第11話

〓 〓 単機出撃 〓 〓

「敵影接近！第一種警戒態勢ッ！」

アースラ艦内に喧しいアラーム音が響き渡る。

悲壮な決意を固めたフェイトと、それを苦々しく思うアルフの姿がスクリーン上に映し出された。

「クロノ君！フェイトちゃんが来たって本当なの！？」

「ああ、どうやら捨て身覚悟の特攻に出たらしい……………アースラは次元の海を航空している。もしも攻撃を加えようというのなら次元跳躍魔法を放つか、特殊な魔法を使って次元の海に来るしかない。個人の力でアースラを落とそうなんて言うのは愚の骨頂だよ。遅かれ早かれ自滅する」

「そんなッ！なら助けに行かないと…」

「駄目だ。彼女にも色々理由があるとはいっても犯罪者である事に変わりはない。そんな犯罪者を助ける為に、アースラの戦力を出す訳にはいかない」

「なら私一人でも…」

「それも駄目だ。」

デイオさんと艦長が話し合って決めた約定は

・此方の指示には最大限従う事

・命の危険を感じた場合は直ぐに撤退する

・報酬としてデバイスと金一封を貰う

君には悪いけど、出来るだけ民間人である君を戦いに巻き込みたくはないし、何もしなければ勝手に自滅してくれる相手に、わざわざ手を出す理由もない」

「そんな……！」

「私達は常に最善の手段を取るしかないのよ、辛いけど……これが現実よ」

デイオは黙して語らない。

実際のところ彼はフェイトの事を、思考の片隅にも置いていなかった。それにフェイトが居る場所は地球。そして時刻は五時、つまりはデイオの活動可能な時間ではない。

プレシアという人間はそう甘い女じゃない。一つの目的の為ならば、幾らでも他を犠牲にするだろう。そしてプレシアにとってのフェイトとは“吐き気のする程に嫌いな存在だが有能な手駒”といった感じだ。そして無謀すぎる特攻………これの示す事は既にフェイトはプレシアによって切り捨てられており、フェイトの特攻は、処分を兼ねた行いなのだろう。失敗して当然、成功したら万々歳。そういった策なのだこれは。

（プレシアめ………既にアルハザードへと渡る準備を整えたのか。これは不味いぞ………実に不味いッ！）

このままでは、予定が台無しだッ！
プレシアの命は自らの手で奪い去ると決めた。アルハザードだかブリザードだか知らないが、そんな奇妙な場所へ逃げられる訳にはい

かない。

「…あつ、なのはさん！何処へッ！」

「すみません……………高町なのは、命令違反をします」

どうやらディオが思考に没頭している間に、展開は進んでいたようだ。なのはとユーノがリンディの命令を破り出撃した。

戦力比は……………なのはとユーノが有利だろう。

万全の状態ならばフェイトが負ける筈が無いが、生憎とフェイトとアルフは万全とは程遠い状態だ。アースラへの次元跳躍魔法の連発、極度の肉体的、及び精神的な疲労……………これでは歴戦の勇士でも路上の石ころに躓きかねない。

結果は予想通り。

フェイトと同様に疲弊していたアルフは、ユーノのバインドによって捕縛された。

だがなのはとフェイトとの戦いは簡単には終わらなかった。

一步も譲らずに互いの力をぶつけ合う二人。

魔法を学んで少しでしかない、なのはも凄いが、それ以上に凄いの
はフェイト。

今のフェイトはクロノとの戦闘後、直ぐに時の庭園へ帰還し、プレシアからの虐待を受けた為に殆ど眠っていない。それに追加して高威力の魔法の連発……………断言しよう。フェイトは既に限界を超えている。今の彼女は気力で戦っているに過ぎない。少しでも気を抜けば墜ちるッ！

捨て身の猛攻になのはは押されている、このまま押せば或いはフェイトが勝っていたかもしれない。しかし彼女は魔導師として優秀だったが、戦士としては未熟だった。

故に間違っ！最後の選択を！

「えッ！？これは…バインドッ！」

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

「あれって！不味い、ただでさえフェイトは疲れてるってのに、あんな魔力を喰う魔法を使ったら身体がッ！」

アルフが叫ぶッ！

しかし止まらない……否！止まらない！

ここで止めてしまえば、もう二度と母は自分に笑いかけてはくれないから。

バインドでなのはを拘束し、フェイトが詠唱を始めた魔法『フォトンランサー・フアランクスシフト』

並大抵……いや常識的な相手ならばこれでチェックだったのは間違いない！相手がクロノだったとしても防げなかっただろう。

しかし今回は相手が不味かった！高町なのはという魔導師は、接近戦、機動力、手数、熟練度、反応速度、精神力、我慢強さ、勝利への執念、総合能力、その全てにおいてフェイト・テストロッサに劣っている。今はフェイト自身の実戦不足と極度の疲労により戦いになっているが、もしフェイトが万全ならば敵ではなかった。しかし、なのはがフェイトに勝るモノが二つあるッ！

それは防御力と砲撃！たった二つの能力だけは高町なのははフェイト・テストロッサを上回るのだ！

「フォトンランサー・フアランクスシフト！撃ち砕けッ！ファイアアッ！！」

「あ…あんな！ あんな野糞に群がった蠅みたいな数の魔力弾を喰らっちゃアツ！なのはアアアアッ！」

ユーノの叫びが木霊するッ！

いやユーノだけではない。アースラに居るクロノやリンディ……
…そしてディオでさえも確信していた。なのはの敗北を！

「か…勝った？」

己の最大威力の魔法である『フォトンランサー・フアランクスシフト』を決めた事で、フェイトは油断してしまった。それは一瞬の気の緩み。

だがそれは、疲弊したフェイトにとって！そして戦場において！

余りにも…余りにも！

長すぎる時間だったッ！！

油断していたフェイトの四肢を

ピンク色の鎖が縛るッ！

「ばっ、バインドオオッ！？そんなッ！貴女は墜ちた筈なのにッ！」

「え…へへ……一応、頑丈さだけは自信があるの！」

フェイトはまるでその少女が悪魔のように見えたと後に述懐する。
しかし本当の所は、なのはの方も一杯一杯だった。バリアジャケツトは原型が分からぬ程に破壊され尽くし、本人も息が荒い。正に最後の全てを込めた一撃！

「駄目だッ！外れないッ！」

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！」

そして、収束された大気中の魔力と己の中にある魔力を一気に解き放つッ！

これぞ高町なのは究極奥義ッ！

「これがわたしの全力全開！！スターライトッ！ブレイカアアアッ！ッ！！」

魔力！膨大な魔力！

高町なのはの真っ直ぐな思いを体現したかのような真っ直ぐな砲撃！力の奔流は少女一人の身体を容易く飲み込み……そしてそれは、フェイト・テストロッサの敗北でもあった。

力尽きて海へと落下するフェイト。

慌ててフェイトを受けとめると、優しく受けとめる。

気付けば夕陽が二人を照らしていた。

思えば何と奇妙な光景だろうか。

夕陽を背負った二人は、古き時代における番長を沸騰させる。

死力を尽くし喧嘩をした好敵手二人は、互いの実力を認め朋友となるのだッ！

そして二人の表情は正しく朋友同士の顔と同じであった。

「ッ！ 艦長！次元跳躍魔法、来ますッ！推定オーバーS！」

オペレーターのエイミイの声がブリッジに響く。

プレシアはどうやら束の間の休息すら許してはくれなかったらしい。アースラを襲う揺れ、しかしこの魔法によってプレシアの居場所は特定出来た。

「艦長！私はプレシアの確保へ向かう！後は任せたッ！」

「デイオさんッ！他の局員達も……」

「相手はオーバーSランクの魔導師、ハラウン執務官なら兎も角として、他の局員では相手にもならない。それに奴の性格は心得ているッ！」

リンディは動けなくなってしまう。

なのはが損傷してしまった今となつては、唯一の戦力であるクロノを易々と動かす事は出来ない。何せ相手は歴史に名を残す程の大魔導師。異次元から此方^{アースラ}を攻撃する手段など幾らでもあるだろう。リンディ自身が向かうという手もあるにはあるが、それは最後の手段。指揮官が前線に赴くというのは利点もあるにはあるが、実際は下策でしかない。

下策を上策へ変えるには超人並ではなく怪人並の強さが必要だ。しかしリンディは気付けない。彼女が思わず動けなくなったのは、そんな理屈など関係無しに、ただデイオという人間が持つ圧倒的なカリスマのせいだった事に……

ⅡⅡ運命交差ⅡⅡ

「此処が、時の庭園か……よく出来た城だ」

個人でこれ程の施設を所有しているとは、プレシアを侮っていたかもしれない。

暗い……城中に女の妄執がこびり付いている。何十年か前に娘を失ったと聞いたが、それからずっと一人で死者蘇生の研究を続けていたのだろうか。

そして個人の力では不可能と悟り……未知の塊であるアルハザードに救いを求めた……か。

誰も居ない。

何の気配もない。

俺が早く来過ぎた為だろうか。城を警備する為の物や防犯機能は全くといっていい程にない。

一歩ずつ

一歩ずつ

歩いていく。

そういえば……忘れていたが俺は元々は別の人間だったのだ。

昔はあった憤りも今ではない。

自然に自分がディオ・ブランドーだと受け入れられる。

もしも嘗ての自分が見ればどう思うだろうか？

プレシアが娘のクローンを偽物と断じたように、俺は俺自身で偽物と断じるのだろうか？

少しだけ自分の心を覗く。

安心した……俺はまだ俺としての精神がある。

だが俺は今後、どうなってしまうのだろうか……もしかしたら今のように自分に悩む事無くディオ・ブランドーだと認めてしまうようになるのだろうか。

昔の記憶を捨て

昔の思い出を捨て

昔の生き方を捨て

昔の思想を捨て

それは悲しい、そう思った。

いや、今はそんな事は如何でもいい。

下らん雑事は後回し、今は本件を片付けるとしよう。

辿り着いた玉座の間。

この城の支配者へと宣言する。

「プレシア・テストロッサ。貴様の娘を蘇生する為の最後の障害がやって来たぞ」

「……………如何いう事かしら？貴方の目的はジュエルシードを地球から無くす事であって、私じゃなかった筈なのだけど。
まさかあの出来損ないに同情でもしたの？」

「まさかッ！

何故この俺が他者に同情しなければならぬ。俺がこの場所に来たのは、お前を殺すためだ。プレシア・テストロッサ」

「冗談にしては笑えないわね。私を殺して貴方に何の得があるの？」

「冗談ではない。

……………よく殺す殺す、と軽く言うド低脳がいるが、この俺はそんな馬鹿に言つてやろう。

男ならば有言実行。一度言つたならば綺麗に殺せッ！…と。

だからだよ、プレシア。俺は殺すと宣言したからには、徹底的に殺すッ！と決めているのだ」

先ずは小手調べだ。

世界がプレシアへ向かって直進する。

時は止めない……………芸がないし、何よりも相手の出方が分からない。

「…んッ？」

違和感。突然として感じた違和感。
身体が倒れていく。まさか奴の魔法なのか！？

違った。

良く見れば崩れていく……

そう、俺の身体がバラバラに引き裂かれていた。

俺が最後に見たもの…

それは、プレシアの前に悠然と立つ

紫色のスタンドの姿だった。

第11話（後書き）

という訳で次回はディオVSプレシアです。

今回のなのはVSフェイト戦の方は軽く済ませました。

何でかって？逆に考えるんだ！原作と殆ど一緒な場面なんて軽く流そうと考えるんだ！

なのはVSフェイト戦で意識したのは勝ち方と勝った理由ですね。少しだけ感じていた『何故昔から魔法の訓練を受けていたフェイトが、才能は段違いだったとはいえ、習って少しのなのはに負けたのか！？』という疑問について私なりの解釈を試みました。

しかし、ディオなんて筋肉ムキムキの漢を送り込んだせいで、萌えの欠片も無くなってしまった本作。

このまま進むとstsでは男キャラの雰囲気はジオンの漢達のような感じになるかも！？

そしてラストバトルのプレシア戦の序章。

プレシアがスタンド能力を発現していた理由に関しては次回！

最後のお知らせ！

実はオリキャラ（スタンド能力者）のネタが浮かびません……
何とか数人は思い浮かんだのですが、全然足りません。
という訳でオリキャラを募集します！

オリキャラはスタンド能力者限定です。一般人は不可！

名前：

容姿：

性格：

一人称：

口調：

服装：

特技：

好きな物：

苦手な物：

スタンド能力名：

能力の詳細

を明記した上で送ってください。

- ・空白期かs t s編で登場する予定です。

- ・殆どは単なるやられ役で終わる事になります

- ・一人か二人はs t s編などで準レギュラーになるかもしれません。

- ・作品の都合上、どうしても登場させられないキャラがいるかもしれません。

- ・悪役限定です

以下のような能力とオリキャラはご遠慮下さい
登場させられません。

- ・極端に強すぎる（チート）能力

例：世界を操る力

・原作に登場する能力に類似した能力
例・時間を止める

・他の作品を完全にパクった能力
例：無限の剣製、写輪眼、ガンダム

・時間を操る能力
例：時間旅行

・アンチ能力
例：魔法を無力化する

・他作品のキャラと全く容姿が同じキャラ

・正義のキャラ
例：ケンシロウ、衛宮士郎のようなキャラ

・カリスマ性のあるキャラ
例：ギレン総帥、ギルガメッシュのようなキャラ

期限は次の投稿の際にお知らせします。

皆さんお忙しい中で迷惑で無ければ暇潰しのつもりで送ってください。

宜しくお願いします。

第12話

「プレシアの能力」

油断した？この俺がッ！

認めたくは無い。ああ認めたくは無いッ！

しかし現実として、俺の上半身はバラバラに引き裂かれている。

「馬鹿……な……」

油断は無かった。

常に罠や奇襲の可能性を疑っていたし、警戒していた。

プレシア・テストロツサがスタンド能力者だったのは予想外だったが、それでも反応は出来た筈なのだッ！普通ならば！

つい先程の光景を思い起こす。

プレシアは何もしていなかった、全く動いていなかった！

スタンドを展開するにしても、そんな様子は無かった！ありえない。気付けば身体がバラバラになっていて、前にはプレシアとプレシアのスタンドが立っていたのだ！

「ふんっ、あつけないものね……瞬間移動、興味深い能力だけど………温いのよ」

……クククク…だがミスを犯したなプレシアッ！

貴様等人間とは違うッ！このディオが上半身をバラバラにされたくらいで死ぬと思ったのが、貴様の命取り…ククククッ……貴様は便所の糞にでも集るハエのように勝利の余韻に浸っていればいいッ

！そう…それが……

「貴様の命日だア！死ねイ！」

「なっ！生きてッ！！」

遅いッ！既に貴様は、将棋で言う所の王手に嵌ったのだッ！

今から貴様が何をしようと考えても遅すぎる！貴様は0秒で何が出る。所詮、貴様に出来るのは小細工が精々……このディオの力の前に平伏すがいいッ！！

「ザ・ワールド！！」

止まる！全ての時間がッ！全ての人間がッ！

このディオの世界で動けるのは一人……世界の支配者に他ならない。

「どうだ？…これが世界だ！最も貴様には何も分からんだろうがな。自分の身体が突然バラバラになった時は、ほんの僅かばかり肝を冷やしたが、所詮は女。この程度よ」

ボロボロになった上着を破り捨てて。

上半身裸となったディオはゆっくりと近づいて行った。

一秒経過

「しかし魔導師とは厄介なものだ……如何に時を止めようとも、

自身を守るＢＪと防御魔法だけは健在とは……………だが、逆を言うならば魔法を習得すれば、このディオは更に進化するッ！
ジヨジヨの奴は「人間は成長する」と言っていたが、このディオは違っッ！成長ではない進化するのだッ！そしてプレシア……………貴様には俺の進化の礎となつて貰うぞ」

ディオがプレシアのスタンドの前に立つ。

そしてザ・ワールドがゆっくりと断罪の拳を振り上げた。

二秒経過

貫くッ！プレシアのスタンドを！

手応え……………なし？

何も感じない。まるで空を殴つたような感覚。

「まさかッ！これは奴のスタンド能力！？この世界内でも発動しているのか！！

……………不味いッ！限界かッ！」

三秒経過

そして時間は動き出す

「くッ！」

取り合えず状況を確認しよう！

停止時間の中で奴のスタンドを殴ったが何も起こらなかった！

この現象から想定される奴の能力は、幻影を操る能力と考えるのがベストッ！

これならば説明が付く！俺がバラバラにされた時、俺には奴のスタンドが見えなかった。

つまり、見えなくなったり幻を見せたりする能力であると考えられるッ！

「ふふふ、まさか瞬間移動だけじゃなく回復能力まで持っているとは……驚いたわね。だけど終わり。

私の『アルジーヌ』には勝てない……死になさいッ！！」

能力の詳細は分からんッ！

だが目が駄目ならば、目などいらんッ！

五感の一つ「見る」が封じられたが、まだ「嗅ぐ」と「聞く」が残っている。

一旦距離をとり、集中……奴の居場所は……

「！！」

五感じゃない。第六感の危機察知。

それが俺を左に動かした。

瞬間

何も起こらない。やはり間違い……

微かな臭い、そして音、その二つの要素は、プレシアとアルジーヌが、その姿形のある場所に居ると示しているッ！此方に向かってくるかと思っただが、そうではない。

全くの違う場所へとすっ飛んで行った。

「ぐっあああああッッ！！」

突如として襲ってくる強烈な痺れ……これは電気だと！！

失念していた……プレシアはスタンド能力者だけじゃあない。優れた魔導師だという事を、失念していたッ！このままでは死ぬッ！

ザ・ワールド！！

「一時撤退するか？……いや、この女程度に躰いていては世界を手に入れる事など不可能！能力の詳細が分からないならばヒントを探すだけの事だッ！」

冷静に把握しろ。

そつすれば答えは見つかる筈さッ！

先程まで立っていた場所を見る。

何も無い……しかし近付けば……

「ウツグツ……やはり痛む…痛むぞオ！ならば此処に奴の魔法があるのは確定、だが何故見えない！？攻撃を不可視にする能力？」

一秒経過

「不可視はない……俺にはプレシアもアルジーも見えている。いや目だけじゃあない。俺の耳そして鼻！五感の内の三つが狂わされている……」

二秒経過

「なら残るは触覚と味覚！味覚は論外だ。ならば触覚。しかし先ずは触れなければ始まらない……………クツ、せめて能力さえ分かれば…」

三秒経過

そして時間は動き出す

時が止まった瞬間、感じる悪寒！

後ろに避ける。だがそこにはプレシアが掌を翳していた。

「死になさいッ！」

放たれる魔法。

これは幻じゃあない。この肌にダイレクトに訴えかける感覚。間違はなく本物だッ！

だが……………当たらなければどうと言うことはない！

「ッ、今度は実態が襲ってくるのか…！」

プレシアのスタンド……………普通ならば間違いなくスタンドだと断言出来る筈だが、今回は状況が違う。五感の内の三つは、これが本物だと告げている。

しかしだ。これを避けるのは容易い。しかし何もしなければ情勢は変わらんッ！

「ここは敢えて受けるッ！」

さア！こいッ！

貴様の能力暴かせてもらx t j おk s d j えあw

痺れ！これは……………電気ッ！プレシアアアアア！

いかん……………時を……………止め…ね……………ば……………

「母さんッ！」

辺りに再び静寂が戻った。

〓〓人形娘の訴え〓〓

フェイトの叫びが木霊するッ！この城の主である女は、有り得ない物を見たような目でフェイトを見た。

それは……………間違っても親が子に向ける目ではなかった。

「ディオさん！」

クロノが息切れをしているディオへ駆け寄る。

かなりの重症だ。あのスタンドとかいう超能力と凄まじい身体能力を持つディオが敗れたッ！

つまりプレシアはそれだけ油断ならない相手だと言う事だ。

「フェイト……………君はプレシアに言いたい事があつて来たんだろう？ディオさんは僕に任せて、プレシアを頼むッ！」

「分かった……………ありがとう……………」

フェイトはプレシアの前に立つ。

彼女は、此処へ来る前に、実の母であるプレシアに宣告された。いない、と……………

だがそれでもフェイトは母の前に立つ。

言わなければならない事があるから。

「誰かと思えば……………出来損ないが何をしに来たの？……………言うわ。はつきり言うけれど邪魔よ。貴女」

「……………あなたに言いたい事があって来ました。私はアリシア・テストロッサじゃありません！貴女に造られた道具なのかもしれません！」

「……………」

「だけど……………だけどフェイト・テストロッサは貴女に生み出して貰った貴女の娘です。もしも貴女が望むなら私はどんな事だってする！どんなものからも守る！」

それは私が貴女の娘だからじゃない！

私の……………私が世界で一番大好きな母さんだからッ！」

「はアゝ。貴女は本当に駄目ねッ！

私は貴女を要らないと言ったの。つまり私にとって貴女の価値は、便所の紙にも劣る虫ケラって事！分かる？

もう……………いいわ。貴女と話すのも沢山。それでも最後の情で命だけは奪わないであげるわ。勝手に生きて勝手に死になさい、フェイト」

16個のジュエルシールドが起動するッ！

圧倒的な力の波、前に竜巻とは比べ物にならない。
これがジュエルシールドの本当のエネルギー。

「不味いッ！逃げるんだ！！このままじゃ大規模次元震が起きるッ
！」

「でっ、でも……………」

「でもないッ！危ないんだッ！

プレシア！馬鹿な真似は止めるんだッ！そんなエネルギー、人間に
制御出来る限界を遥かに超えているッ！そんなんでアルハザードに
行けるはずがないッ！！このままじゃ時の庭園だけじゃない。地球
や他の世界まで危ないッ！」

「黙りなさいッ！私は今の今までアリシアを生き返らせる為だけに
生きてきたのッ！もう降りれないのよッ！！グハッ、ゴホッゴホウ」

「…………病気なのか…………」

必死に思考を働かせる。フェイトを残すのは論外。一緒に心中し兼
ねない。

しかしこのままでは、次元世界が危ないッ！

クロノの精神にアースラの面々、そして地球で出会った三人の協力
者が浮かぶ。

そして…………父クライド・ハラウン！

思えば父も、皆の為に自らを犠牲にした人だった。

デバイスを握る手を強める。

クロノ・ハラウンは覚悟を決めたッ！

「フェイト、君はディオさんを連れてアースラへ戻るんだ。
プレシアは……………僕が如何にかするッ！」

「えッ、でもそれじゃあッ！！」「行くんだッ！」

「僕が執務官になったのは、父さんのように……………多くの人を
守る為に執務官になったんだ！ならばこれは僕の役目だ。そうクロ
ノ・ハラオウンの使命だッ！」

クロノとて命は惜しい……………

いや命の惜しくない人間など、生に疲れた老人ぐらいだ。
助かる可能性は低い……………あの意味不明な能力を持つディオですら
倒した能力。大魔導師プレシアの実力は未だに未知数だ。

（ごめん……………母さん……………）

心の中で母へ謝る。

自分が死ねば母は泣いてしまうだろう。
だけど逃げられない。

「だって、誰かを守る為に管理局に入ったんだもんね……………」

死を覚悟した漢の目とは、ここまで清々しいものなのだろうか。
だがそんなクロノを止める者がいた。

「うぐッ……………ディオさん……………なにを？」

「此処は君のような若者が死ぬべき場所ではない」

腹に一撃を受け、悶えるクロノ。

予想外の一撃に、全くの無防備で受けてしまった。

駄目だッ！そう思いながらも意識が薄れていく。

最後にディオの顔を見ると、完全に意識を手放した。

「フェイト君、クロノ君を持ってアースラへ逃げろ」

「それじゃディオさんがッ！」

ディオは曖昧に笑うと、天井から岩が落ちてくる。

見ればスタンド。どうやらディオが天井を破壊したらしい。

このままでは閉じ込められると本能的に悟ったフェイトは、直ぐに離れる。

「今からは”大人の時間だ”……それとも、この俺が信じられないのか？」

気付けば岩がディオとフェイト達を遮る境界線となっていた。

もう間に合わない。

フェイトが時の庭園から出る前に見たもの。

それは絶対の安心感を与える、ディオの背中だった。

第12話（後書き）

多くのご応募ありがとうございます!!

御蔭でsts編も何とか乗り越えられそうです。

勝手ながら応募期限は7月10日までとさせて頂きます。今後とも
応募宜しく願います!!

えゝ、本来ならばこの話がラストになる予定だったのですが、何で
かもう一話分消費する事に…………

クロノで字数をとられました（笑）

次回こそはプレシアVSディオ決着!

ディオはプレシアの能力を見破れるのか!?

では次回に……

第13話

「電撃疾走」

「さて最終ラウンドだ……………いくぞッ！」

ディオが疾走！プレシアの身体を貫く！

だが何も無い、いや見えるのだが無いッ！プレシアの肉体を確実に貫いた筈の拳には、血の蠢きも生の鼓動も無い。ただ空を切るばかりだ。

「ふんッ！……やはり効かないか。

だが止まりはしないッ！止まれば貴様に後ろから撃たれるからな！」

ディオは理解していた。

もしも疾走を止めれば、猛烈な威力の電撃が襲ってくる事も！鮮烈な威力のスタンドが襲う事も！

この世界で知った魔法という力。魔力を使った身体能力！

魔法と吸血鬼としての能力の相乗作用が、ディオを大きく助けていた！

「ぬー！右腕がッ…！」

だが不利は否めない。

今また右腕が両断された。接合する事は容易いが、その為には動きを止める必要があるッ！

今は諦める。

（答えは出掛かっているッ！

虚像のプレシア、そしてスタンド！

頭ではなく感覚が理解しているのだッ！違和感に！

時間を止めて落ち着きたいが……………誤算だ！ダメージを受け過ぎたッ！

念の為にとデバイスに輸血パンクを収容していたのが幸いだったが……やはり血は生きた人間から摂取するに限るッ！生の人間からの吸血でなければ効能は薄いッ！……………新発見だな）

「ぐッ……………またかッ！また突然の激痛ッ！これは槍が何かに刺されたような痛みッ！……………身体がッ！俺の肉体に穴が空いているッ！攻撃は見えないッ！奴の能力は五感に作用するものじゃあないのかア！？」

答えは出掛かっている。

しかし後一步……………後一步答えには届かない。

このまま攻撃を受けていればヒントが見つかるかもしれないが、自分の体が不味い事を悟り、時を止めて脱出した。

（はぁ、はぁ……………ダメージを受け過ぎた！

輸血パンクの血もこれが最後……………所詮は輸血パンク、完全回復にはこの程度では足りんッ！

これでは時を止められるのも一秒……………いや0・5秒が限界かもしれないッ！）

プレシアの行使している魔法は、なのはやフェイトが行使していた非殺傷設定ではない。殺傷設定だ。

そして彼女の魔法はどれも大威力、一撃一撃が高町なのはのスターライトブレイカーを超えるッ！

もしも吸血鬼としての回復能力があるディオじゃなかったならば、

確実に一撃でTHE ENDだった。

（それにしても……………何て回復力！そして回避能力ッ！
私は一切の手抜き無しで魔法を使っている。常人……………いや鍛えられた騎士相手でも一撃で殺せるだけの魔力を込めているッ！なのに如何して、あの男は立ち上がれる！”危険を冒してまで”魔法を使っただのに、まさか三度も魔法を使う羽目になるなんて！）

魔法を使う時は一撃必殺！

それがスタンドを使う上でのプレシアにとってのルールだった。
魔導師としての才覚！そしてスタンドパワー！

この二つが揃った自分ならば、どんな相手でも容易く殺す自信が、
プレシアにはあった！

だがディオは未だに死なない。自分に屈しない！

ディオ・ブランドーという男の能力を見誤った……………それはプレシアにとって人生最悪の判断ミスだった。

（ええい！……………冷静になるのだッ！

ヒントはあるッ！プレシアは魔法をまだ三度しか使っていない。出し惜しみはありえないッ！

娘が蘇生出来るか否かの瀬戸際に、そんな事はしない。

ならば行使出来ない事情があるッ！そこはガチだ。

そうだ！こんな時は”チェス盤をひっくり返す”とかいうやつだ。
相手の立場になって考える！

俺がプレシアならば魔法の出し惜しみはしないッ！

寧ろ誘導段、砲撃、電撃、あらゆる魔法を使って完璧に追い詰める！
！なら何故それをしない？……………何か危険があるのか？……………リ
スク？）

アルジーヌがディオに迫る。

どうせ幻影と……油断したディオだが、悟るッ！この肌触り！
経験からして、五感の内触覚だけはまともだ。ならば真に頼れる
のは肌の感触。そして圧倒的スピードで接近するスタンドから感じ
るのは、空気の振動！
右から囲むようにして迫るスタンド！なので左に避けるディオ！
そこには既に魔法発射体制になっているプレシア！

不味いッ！

そう思った瞬間には、避けていた。
しかし危機は終わらない。跳躍したディオに迫るナニカ。
そのナニカは微塵の容赦も無く……ディオの肉体をバラバラにした
……

(……糞がッ………さてよ……あの位置………そして魔法………そ
うかッ！分かったぞ！あの女の能力がッ！)

ⅡⅡ戦いの決着！ⅡⅡ

ザ・ワールド！時間が停止する

停止時間の中でディオは考える。

もしも予想が正しいならば、プレシアは先ず間違いなくバラバラに
なった自分に、強烈な魔法で確実な留めを刺すだろう。

そう…プレシアのミスはここにもあった。それはディオの能力が瞬
間移動ではなく時間停止だと気付かなかった事だ。

何とかバラバラになった体を全て繋いだが、それは応急処置に過ぎ
ない。完全に回復する為には血が必要だ。

もう直ぐ停止時間も終わる。ボロボロの状態では時間もそう長くは停止させられない。

しかしだ！先程までのディオと違う所があるッ！それは遂にプレシアの能力を知ったこと！

敵を知る事は兵法の基礎の基礎！敵を知らなければ策は立てられない。

そして時間は動き出す

「……………」

無言のプレシア。

言葉一つ発しない。いや……………発せないのだ。

疾走！ディオが再び疾走する！

プレシアは先程とは変わらぬ疾走だと感じるだろう！しかし違うッ！これはさっきまでの疾走ではない。逃れる為ではなく勝利の為の失踪！

そう、ディオ・ブランドーには勝機がある。

プレシアの執拗な猛攻を受けながらも待つ。

ひたすらに待つッ！勝機を！

（貴様に二度目にバラバラにされた時！俺は気付いた！

実態のある貴様が魔法を放った位置！そして魔法の種類！

そして…………俺が立っていた場所、それは前に貴様の魔法を喰らった位置と殆ど一緒だったのだッ！

一度なら偶然かもしれない、だが違うッ！

記憶を掘り返せば前回前々回も同様！

何故前に居た場所に立っていたのか？

……その答えは簡単、奴のスタンドに誘導されたからだ

。如何してそんな面倒な事をするかといえば、それも簡単な答えだ。

……何も無い場所に攻撃するという不自然過ぎる映像を誤魔化す為だ。手順はシンプル。

スタンドの映像とスタンドとを重ね合わせ、映像と本体を一緒にする。そしてわざと俺に、このスタンドが実態があると悟らせ回避させる。

その後には上手く俺を、前回攻撃を受けたポイントに誘導し、プレシアの映像は俺に攻撃を仕掛ける。

しかしそれは、攻撃さえ見えていれば簡単に避けられるレベル……実際問題簡単に避けられた。

映像はお前の意思で変える事が出来ない。

つまりそこから推定されるプレシアの能力は、即ち”認識時間”をずらす！それも視覚だけじゃない。聴覚そして嗅覚までだ。

適当に測ると大体、9秒か10秒だ……つまり俺には本来の映像の約10秒前の映像が見える事となる。

しかし俺自身の体だけは別のようなのだ。だが、能力が分かっても居場所が分からなければ如何し様もないッ。だからだ……)

アースラで一時的に借り受けたデバイス。

魔力という名のエネルギーはディオに新たなる力を与えた！魔法の力を！

黄金の魔方阵が出現する。黄金でありながら黒！圧倒的な黒！

黒い波動を放つ黄金！

狙いを定める、チャンスは一度きり

ば、この様な奇襲は二度も通じないだろう。

外したなら

[illegible]

それでも止まらない！

更に恐ろしいのはプレシアの防御！これ程に頑丈とはディオにも予想外！だが殴るのを止めない！

割れる！バリアがッ！
同時に吹っ飛ばされるザ・ワールド。恐らくはプレシアのスタンドが妨害したのだろう。

しかし……遅い！

「見えたぞッ！これが勝利への道標^{ロード}！！

スベース・リバー・スティンギー・アイズ
最後だッ！空裂眼刺驚！！」

ディオの目から飛ぶ一筋の閃光ッ！

嘗て仇敵ジョナサン・ジョースターの命を奪った技。

高速で撃たれるソレは人体など容易に貫通する。

（避け……られない……）

プレシアは悟ってしまう。

自らの運命を……

自らの命運を……

自分は今日この場で死ぬ！それが確定した事を知る！

（こんなはずじゃ………なかったのにッ！）

何時どこで間違ってしまったのだろう。

自分はただアリシアと二人で暮らせればそれで良かった。

たったそれだけの望みを何故に、こうも世界は無情なのだろうか。

アリシアを失って

自暴自棄になって

プロジェクトFに参加して

フェイトを造って

八つ当たりして………

最低だ。

頭では理解していた………

勝手に造って、勝手に娘としての記憶を与えておきながらも虐待する。

どんなに酷い行為なのか、分かってはいた。でも止められない。

アリシアとは別人だと理解しても、あの顔を見るだけで腹立たしさが芽吹く。

アリシアと同じ顔をしていながら、性格から仕草に至るまで全く違う、フェイトがッ！

狂おしい程に……憎かった…。

でも終わる。

全部終わる……

心臓が貫かれるような感触……これで自分の命は、残り数秒。

そんな最期の最期になって

プレシアは、自分の前に誰かが立っているのを見た。

「…アリ……シア……？」

母さん、もういいんだよ。もう自分を責めないで。大丈夫！アリシア・テストロッサは 貴女の娘でいられて幸せだった。それは絶対に……永遠に変わらない。

だから、もう休んでもいいんだよ。母さんの苦しみも知ってる。

だって……母さんは優しいから。

まるで奇跡！

分らない！これが願いを叶える宝石の能力なのか、はたまたプレシアの幻想なのかは分からない。

それでも、彼女は紛れもなくアリシア・テストロッサだった。

「そう…ね。……私も少しだけ疲れたわ………だから…一緒に休みましょう……アリシア…」

それが、たった一人の娘の為にだけに生きた女の最期の思考だった。

「終わったのか……」

見れば、綺麗に心臓を貫かれたプレシア。即死は間違いないだろう。戦いは終わったのだ。

それは勝利！誰の力でもない自分自身で勝ち取った勝利！己はプレシアという強敵に、真っ向から立ち向かい、そして勝ったのだッ！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

しかし依然として状況は最悪。

ジュエルシードの暴走と二人の戦闘により時の庭園は既に限界だった。

そして

ゆっくりと崩壊が始まった。

「クレイジー・カーニバル」

「遅いッ！デイオさんはまだなのかッ！」

「まだです！探しているのですが……」

クロノは自分の不甲斐なさを怒鳴りたい程だった。

自分だけ逃げて、民間協力者を置き去りにするなんて管理局員以前に、一人の男として情けない！

だが怒鳴っても状況が変わらない事も

「艦長！もう限界ですッ！……このままではアースラまで次元震に巻き込まれますッ！」

オペレーターの悲痛な叫び！

リンディ・ハラオウンは考える。

デイオは自分の一人息子の変わりに、あの場所に残ったのだ。

一人の人間としては、次元震に巻き込まれたとしても待っていたい。だが残念ながら彼女の立場がそれを許さない。

アースラの搭乗員そして、民間協力者の二人。それら全ての命を背負っているのだ。最後には例え後ろ指を指されようとも、この場から離脱しなければならない。デイオを置き去りにして……

「デイオさんはまだ戻らないんですかッ！」

なのはの声がブリッジに響いた。

度重なる連戦で既に立つのがやっとの体に、鞭打って歩いてきたの

だ。

しかし、そんな少女の声に答える者はいない。

誰も、9才の少女に、そんな悲しい現実を教えたくはなかった。

「私の……せいだ……」

フェイトは先に逃げた自分に責任を感じる。

あの時、自分も一緒に残っていたればこんな事には……

アルフはそっとフェイトを抱き締めた。

「艦長！……来ましたッ！！……ディオさんですッ！」

その時、ブリッジに吉報が届いた。

「本当！……画面に！」

アースラのモニターに、全速力で走るディオの姿が映し出される。

幸運は二つあった！

プレシアの……魔導師の血が思ったよりも馴染んだこと！

虚数空間にジュエルシードを放り投げるまで暴走しなかったこと！

「不味いぞッ！崩壊は始まっている。このままじゃ巻き込まれる！」

転移を使わない所を見ると、魔力が切れたのだろう。

ならアースラが直接回収するしか方法はないッ！

「艦長！」

「分かっていますッ！面舵いっぱい！アースラを時の庭園へ寄せて

ッ！」

「了解！面舵いっぱい、時の庭園寄せ！」

艦が崩壊の余波で激しく震動する。

だがもう少し……もう少し近付かなければ届かない。

「限界です、艦長！！
込まりますッ！」

これ以上はアースラが巻き

「これ以上は無理なの！……これでは飛び移れませんッ！」

「無理ですッ！これ以上は搭乗員全員の命に関わりますッ！」

悔しさで歯噛みする。

ここまでなのか！？

アースラの誰もが諦めかけた時、ディ

オが信じられない事をしたッ！

「と、飛んだ！？……艦長！飛びましたッ！ディオさんが飛びましたッ！」

「って無茶なッ！？この距離では……」

「いやでも、これなら届くかもしれません！」

ディオの人間ではありえない程の跳躍！

これならばアースラに届く！……かもしれない。

「届け」

ブリッジの誰かがそう呟いた。

「届け」

クロノが言った。

「届け」

なのはが言った。

「届け」

リンディが言った。

「届け」

ユーノが言った。

「届け」

エイミィが言った。

「届け」

フェイトが言った。

「届け」

アルフが言った。

「かつ、艦長！生き残りの傀儡兵が襲ってきますッ！数80！！」

「なんですってッ！！

ガンデーヴァ照準！目

標、敵傀儡兵团！！」

「了解！ガンデーヴァ照準！目標、敵傀儡兵团！！」

アースラに装備された、対艦砲。魔導砲アルカンシエルには劣るが、魔導師の撃てる砲撃とは、一味もふた味も違う、強力な威力を誇る！その破壊の矢が、今！時の庭園へと向けられた！

「風穴空けてやりなさいッ！ガンデーヴァ！ッてー！！」

命令と同時に放たれる砲撃！

業火は一瞬にして傀儡兵を焼き尽くす。

「最大戦速でこの場から離脱しますッ！離脱上昇！」

「アイ・アイ・mamッ！離脱上昇！！」

時の庭園が崩れる。

激闘の場が、フェイトの暮らした場所が………崩れる。

アースラは急上昇すると、空いた空間に飛び込むッ！

そしてアースラが消失するのと、時の庭園が完全に崩壊するのは、同時だった。

＝エピソード＝

医務室で手当てを受けると言うクロノの意見を、丁寧に分ると食堂へ向かう。

魔導師の血が、これ程に効力があるとは思わなかった。あれだけポロポロだった体は、今では少々の損傷程度に回復していた。

「チーズバーガーだ。急いでくれよ」

食堂のおばちゃんにバーガーを頼むと、ゆっくりと疲れを癒した。なのはは医務室でぐつぐつと眠っている。

無理も無い……こんなにハードな一日は人生初体験だろう。

食堂は静かだった。

色々あったからな……忙しく動き回っているんだろう。

「ディオさん……」

「んっ……フェイトか……一応お前はこの事件の重要参考人だろう。こんな場所に居てもいいのか？」

言ってから気付く。

疲れ過ぎていて口調を変えるのを忘れていた。

「うん、アースラの人達は皆忙しそうで、私の事を忘れてるみたい……」

ちょっと悪いことしちゃったかな。

そう言いながら曖昧に笑う。だが知っている。

フェイトが此処に来たのはそんな理由じゃあない。

「それで……母さんは……どうなりましたか？」

「死んだよ。死体は虚数空間に落ちたから……もう無いだろう……」
ストレートに真実を告げる。

別に俺がこいつに気を使う必要は無い、
フェイトは肩をピクンと震わせると……下を向いた。

「……予想は……してたんです。
ディオさんは酷い母だと思うかもしれないけれど……それでもあの人はッ！……私の大切な……たった一人の母さんだったんです……」

泣くのを我慢しているのか……
この年で難儀なものだ。

「泣けばいい………人は泣けるだろう。好きな人間が死ねば……
…泣けるだろう？」

そういえば俺は泣けるのだろうか？
少なくとも昔の俺は泣けた。父の死に、母の死に。

「うつ……ごめんなさい……泣いても……いいですか？」

ああ、好きに泣けばいい。
そう言う前に、フェイトは俺の胸に抱きつき、泣いた！

「いやいやいやいや、如何してこうなる？」

泣けばいいと言ったが、俺の胸を貸すとは言っていないぞ！
完全に意表をつかれた。

「ううううわあああああああああああああ」

やれやれだ。

まあ、偶にはいい……かもしれない。

俺も少し疲れた………今日は色々あり過ぎた。

ディオはゆつくりと意識を手放した。

しかし彼は知らない。

この先に、今回とは比べ物にならない死闘が待っている事を。

だが今は休むといい。

一時だけの休息………それは必要な事だ。

闇は………静かに動き始めたッ！

ディオ・ブランドー

精神汚染進行中。

しかし、今は一時の休息を得る。現在三秒まで時間停止可能。

管理局から報酬として多額の金と専用デバイスを受け取る。

相変わらず月村邸に滞在。

高町なのは

ディオに物事を諭してくれる教師のような印象を受ける。

命令違反について厳重注意を受け、報酬が減るが本人は気にしていない。

事件後、フェイトと友人になった。

フェイト・テストロッサ

ディオに少しでも好意を持つ、本人は無自覚。
事件後、なのはと友人になる。

クロノの話によれば、保護観察処分で落ち着けるとの事。

リンディ・ハラオウン

ガンデーヴァを撃った事で始末書を大量に書く羽目になった。

クロノを助けてくれたディオに対して恩を感じる。

クロノ・ハラオウン

自分のせいで危険に晒してしまったディオに対して、申し訳ない気持ちがある。

事件後に、お礼と謝罪の意味を兼ねて、ディオのデバイスの手配を行った。

アルフ

フェイトと一緒にミッドへ裁判へ向かう。

取り合えずフェイトが元気になったので、ホクホク。

食堂のおばちゃん

ディオに泣きつくフェイトと、疲れて眠るディオを、微笑ましい笑顔で見守る。

クロノに、何故報告しなかったのだと怒られたが、やんわりと誤魔化した。

プレシア・テストロッサ

スタンド名：アルジーヌ
完全敗北！死亡。

ヴァンパイア・オブ・リリカル
～イノセントブラッド～

【第1部完！！】

第13話（後書き）

漸く第一部完結！

次回からは第二部へ過去からの遺産へがスタートです！

余談ですが、プレシアがスタンド能力者だった理由は簡単、一応ジョジョの二次創作でもある訳ですから、ラスボスは時間を操らなければ駄目でしょう。

では第二部で会いましょう……

To Be Continued
／ \
<

第14話（前書き）

A・S編がスタート！

第14話

「ゴフッ…」

異様な光景だった。誰も居ない廃ビル。

その中に一人の男がいた。

金髪赤目の大柄の男性、名前はディオ・ブランドー。

対峙しているのは桃色の髪をポニーテールで纏めた女性、手には炎を纏った剣。それは実に非日常的な光景。もしも一般人が見れば映画の撮影とでも思っただろう。

しかしこれらは全て現実だった。

だが異様なのはそんなことじゃあない。

一般人から見れば異様な光景でも『魔導師』と呼ばれる人間にとっては、こんな光景は珍しくもなんとも無い。

驚くべきなのはディオの胸。そこからありえない物が生えている。

手だ、人間の手。その細さからすると女性の手だろう。

目を凝らせば握っている物が見えるだろう。それこそリンカーコア。魔導師の力の源であり、魔法を使うに当たって必要不可欠なものだ。手がそれを握って引く張ると、やがて……ディオは崩れ落ちた。

ⅡⅡ序章ⅡⅡ

話は今日の朝の三時にまで遡る。

P.T事件、正式にはプレシア・テストロッサ事件から数カ月後。ディオはクロノから送られてきたデバイスの試運転をしていた。

「成る程、インテリジェントデバイスとか言ったか……道具に人格を持たせるなど不要と考えていたが、その認識を改める必要があるようだ」

「It is grateful」

《恐縮です。》

ディオの戦闘法はあくまでも魔法主体ではなくスタンド主体だ。認めよう。確かに魔法は便利だ。

しかし肉体強化や飛行までなら兎も角として、スタンドの精密動作と放出系の魔法を同時運用するのは、一人では難しい。魔法というのも簡単に見えて、案外と難しいものなのだ。（プレシア戦で一回だけ砲撃を放ったが、その時はスタンドを展開していなかった）そんな訳で、クロノはある程度、魔法運用を補佐してくれるインテリジェントデバイスを送ったのだが、当初ディオは乗り気ではなかった。

というのも、道具に人格は不要というのが、彼の考え方であり、独立した意思を持っている道具など欠陥品以外の何物でもないと思っていたからだ。

しかし良い意味でこのデバイスはディオの期待を裏切ってくれた。あらゆる質問にも律儀に返すし、無駄口は話さない。これがお喋りなデバイスだったら貰った早々に叩き壊していたところだが………：どうやら相性の良いデバイスを送ってきたようだった。

「よしッ！……飛行も問題ない。まさか生きている間に単体飛行が可能となるとは………異世界に來た甲斐があったかもしれない」

そういえばフェイトの裁判がもう直ぐ終わると言っていたな。

ふとした拍子に前のビデオレターを思い出す。

フェイトの裁判は、艦長であるリンディ、執務官であり時期幹部候補でもあるクロノが味方についた事により、かなり優位に進んでいた。更にクロノの個人的なコネで、管理局のお偉いさんがバツクについたとかで、99%勝利は決まったと言っている。

余談だがビデオレターでフェイトは、ディオの事を気にするような言葉を発したが、当の本人は全くと言っていい程に、その事に気付かなかった。

別に彼がエロゲ主人公のように朴念仁なわけではない。単に9才の少女など性欲の対象として眼中にないだけだ。

そこところは十年後に期待するとして……どうやらフェイトはもう直ぐ海鳴市に来るようだ。クロノ達も挨拶がてら来るらしい。

少しでもクロノやリンディと接触してコネを作らなければ

ディオはPT事件の報酬として結構な額を受け取っていた。無駄遣いは無論！しない！

この金は来るべき時に使う軍資金だ。

ディオが新たな決意を固めているとき

そう、これが今後十年間と続く”二人”の戦いの序章だったのかもしれない。

「誰だッ！」

敵意を感じ飛び退く。上手く隠れているようだ、その溢れんばかりの闘気は隠し切れない。

誰か……そう何かが居る。

「気付いたか……悪いがお前のリンカーコアを貰い受ける！」

現れたのは桃色の髪の女性。

手には剣、形状からするとあれもデバイスなのだろう。

「リンカーコア……だと」

「そうだ」

リンカーコアという名に聞き覚えがあった。

確か魔導師に必要な不可欠な、大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積することと体内の魔力を外部に放出するのに必要な器官。それがリンカーコアだった筈だ。

「その物言いに態度……………貴様が次元犯罪者とかいうやつか。いいだろうツ！実験台には丁度いい」

どんな技術でも、実際に戦場で使えなければ単なる飾り。

これは丁度いい実戦経験を得る機会だ。

「クツクツクツ、行くぞツ！」

デバイスを起動。大地を駆って飛翔する。

先ずはお手並み拝見……

フラッシュギルド・シンシフト
「刺血穿処刑！！」

展開される赤い刃。その数50！

デイオはまるで壇上に立つ指揮者のように、腕を振り下ろすと同時に、処刑の剣は我先にと、死刑囚へと向かい始めた。

「この程度ではやられん！」

「なにツ！」

驚愕はディオ！女は何かを呟くと薬莢のような物が剣から吐き出された。

驚くのはそれから。女はあろう事か回避も防御もせずに突っ込んできたのだ。

赤い剣を容易く弾いて女は進むッ！

そして一瞬でディオの間合いに入ると、赤く燃えた剣を振り下ろす……さなかった。

ディオの側から出現した何かの気配を察知して、寸前で飛び退いたのだ。

（ヌッ、奇妙だ！あの魔法、どことなく俺の使う魔法とは違うッ！……… ような気がする。）

そして厄介なのは、あの女。あいつ戦いなれていやがる！おまけに接近戦の力量はフェイトやクロノとは比べ物にならんッ！）

（確実に獲ったと思った時に感じた、奇妙な気配！咄嗟に飛び退いていて世界だった。もしあのまま攻撃していれば確実に、あの妙な使い魔みたいな奴の手でやられていただろう……）

（（こいつ強いッ！））

だが二人の間で決定的に違う者がいる………ディオだ。

もし早急に殺すだけなら至極簡単。時を止める………それだけだ。

それだけで、強力な力を持った騎士は、何の抵抗も出来ずに敗北するだろう。

プレシア戦では能力の相性の悪さによって苦戦したが、こと真つ向勝負においてザ・ワールドは、間違いなく最強のスタンドなのだ。

P.T事件の時とは違い、近くには管理局員もいない。なので時を止めて女を殺すのは非常に簡単。

しかし今戦っているのは、魔法の実戦経験を得る為である。ただ殺すのは容易い。しかし楽な道を選んでばかりでは成長する事は出来ないのだ。

ディオの魔力量はなのはやフェイト程多くはない。魔法だけの戦闘ならば、なのはとフェイトにも遅れをとる可能性はある！しかし、その劣った箇所を吸血鬼としての常人離れの身体能力で補っているのだ。それでも魔法だけで女に勝つ可能性は………低いッ！そう言わざるを得ない！

彼女はどうか、接近戦を中心として鍛えられたエキスパートだ。接近戦には自信のあるディオだが、スタンド無しで戦った場合の勝率は、良くて五分五分、悪くて勝率20%だ。

「仕方ない………少しばかり貴様を侮っていたようだ。ここからが本番だッ！」

ディオの選んだ方法は、時間停止を使わずに、スタンドと魔法を使う！………だった。

「ヌウ！だが私にも負けられない理由があるッ！
守護騎士が一人、シグナム！推して参る！」

女性 シグナムは更に薬莢のような物を放出する。

そして彼女はディオの感じた通り、ミッド式魔法を扱う”魔導師”ではなかった。

遠距離戦・複数戦闘をある程度切り捨て、近接系による個人戦闘に特化しているのがその特徴であるベルカ式を扱う者 ”騎士

”と呼ばれる者だった！

ベルカ式のもう一つの特徴がこのカートリッジシステム。

圧縮魔力を込めたカートリッジをロードすることで、瞬時に爆発的

な魔力を得るといふ極めて扱いが難しい技術だ。これがベルカ式が衰退した一因でもあるのだが、それは置いておこう。

しかし扱いの難しい技術だけに、極めた者というのは、相当の強さを誇る。そしてシグナムと名乗った女性は、ベルカの騎士として経験、力量において、現代ではそう並べる者は居ない程の女性だった。

「フンッ！少し……少しばかり、このディオが使う魔法とは毛並みが違うようだが、その程度！」

「パワーが違うのだ！パワーがアア！」

凄まじいザ・ワールド！

カートリッジによる爆発的なパワーをも上回るパワー！
苛烈な攻撃にシグナムは押される。

「所詮は女！それが限界よ……………死ねイ！キラ・スマッシュ・バスター魔烈殺凶砲！！！」

消える！スタンドがッ！

突然に自分の戦っていた相手が消えた事に驚いて、一瞬だけ反応が遅れる！

黄金の柱に飲み込まれていく四肢……………恐らくは死んだだろう。

「フフフフフッ！クハハハハハハハハッ！！！！いいぞオ！スタンドパワーだけじゃあない！この圧倒的な力！魔法！いいぞ……………手に入れる！この力！そしてスタンドパワー！不老不死！これだけ揃えば世界を支配する事が出来るッ！出来るぞオオオオオオオオオオオ！！！」

スタンドという一つしかない能力じゃない。

魔法には攻撃、防御、結界、転移、治癒、召還、e t c……………あらゆる利用法があるッ！

スタンドを用いた戦闘に少しばかり魔法を混ぜてやればこの通りだ。

ディオは感じていた。

体の内部から湧き上がる高揚感、圧倒的な喜び。

ドス黒い感情。

「喜んでいる所、悪いが……………終わりだッ！」

「なにイ！」

爆煙の中から一筋の影が飛び出すッ！

そして一瞬の躊躇いなく剣をディオに突き刺したッ！

「GUOOOOOOOOOOO！！！！！！熱いッ！クッ！きさまア！！よくもこの俺に剣を！」

非殺傷設定なのだろう。剣はディオを焼くことは無かった。だが身体の内部分から焼かれる激痛を、ディオは感じていた。思いっきりシグナムに蹴りを入れて突き放すッ！

「カエルの小便よりも……………下種な！」

下種な魔法なんぞをよくも！よくもこの俺に！

女風情がッ！調子にのるなよ！KHAAAAAAAAA！！！！！」

「な…なんという邪悪な気配！……………これが…人間…なのか？」

シグナムは感じていた。

圧倒的な悪意を！邪悪を！

何百年もの間、闇の書の守護騎士として戦ってきたシグナムだが、これ程に…これ程に邪悪な気配を感じた事は一度としてなかった。

(…この私が恐怖しているのか? …あの男に!)

信じられなかった。幾度の戦場を駆け、敵を殺してきた。

何度も殺したし、逆に何度も殺された……………なのに何故! 如何して今更恐怖を感じるのだ!

「さて…………このディオに手を出したのだ……………ただで死ぬると思ふなよ、その面を野良犬の餌としてくれるッ!」

(くッ……………来る!)

だがシグナムに退路などない。

そう……………ディオがアレを使うと決めた時点で、シグナムに勝機など一欠けらもないのだ。

あらゆる努力、あらゆる技量、あらゆる魔法を嘲笑うかのように、ディオは容易く世界を止める!

「ゴフッ…………」

そう…………シグナム一人なら勝機はなかった。

ディオの身体に腕が突き刺さる。

シグナムと同じ守護騎士の一人、湖の騎士シャマルの使う特殊魔法「旅の鏡」

空間を繋ぐ「鏡」により、離れた場所の物体を「取り寄せ」する魔法。

戦闘用ではないので、戦闘中の相手に使うとなると命中率の低い魔法だが、ディオが油断しておりBJを着ていなかったのが幸いした。シャマルの手には黄金の球体……………ディオのリンカーコアを掴んでいた。

「……スタンドが！魔法が！使えん！……UOOOORRRRY
YYYYYYYY！！！！」

抜かれる！全てがツ！奪われる……

リンカー コアだけじゃない！そう全てだ！

「よ……よくも！よくも貴様！よくもこんなアアアアアア――――
――ツ！！」

こんな！こんな糞共に！このディオがッ！このディオがアアアア
アアーーーーツッ！！！」

その腕がリンカーコアを引っ張りぬく。

すると糸の切れた人形のように、ディオの身体は、ゆっくりと崩れ落ちていった。

第14話（後書き）

ディオ敗北！しかし最初は敗れるのがジャンプの基本！一回負けた主人公が、次の戦いでは作戦や修行で勝利するッ！それもまた基本！という訳でディオが敗北しました。…………油断慢心はよくないです…………本当に。

第15話（前書き）

お待たせしました！応募されたオリキャラの初登場です！
どのキャラなのかは見てからの楽しみに…

第15話

「知らない天井」

「……」

いつもとは違う白を基調とした天井。周りの器具や雰囲気からすると医療施設に間違いないだろう。

敗北……その二文字が、思考が覚醒した瞬間に、脳裏に浮かんだ。油断していたというのは言い訳にすらならない。屈辱だッ！あの程度の女如きに！このDIOがッ！

「ディオさん！目が覚めたんですか」

クロノが入室してくる。

こいつが此処に居るという事は、管理局の病院にでも運ばれたのだろうか？

クロノの前で激高する訳にはいかない。慌てて猫を被るのに専念した。

どうやら私は、廃ビルの中で倒れていたらしい。

クロノによると俺を襲ったのは、第一級搜索指定ロストログア『闇の書』の守護騎士と呼ばれる者だそうだ。闇の書は歴代の主の元を渡り歩き、破壊される度に、次の主へと転生するという厄介極まりない品のようだ。

ジュエルシードの時もそうだが、少しは平和的なロストログアはなのか！この世界には！

「それで……………その守護騎士の居場所は、分かっているかね？」

「いや、まだ搜索中だ……………なにせ今回の守護騎士達はかなり慎重に蒐集してるようなんだ……………」

実際、今までの犠牲者でも殺された者は皆無だった……………それは喜ぶべき事なんだが、その影響でなのはが襲われるまで、これが闇の書事件である事さえも、管理局は掴めなかった」

つまりは、居場所は全く見当が付いていないという事か。
使えない奴等だ……………」

やられっ放しで黙ってはおけない。どうせ今回も管理局は人手不足だろう。事件の捜査に加わるのは難しい事じゃあない。

「……………何を言ってるんだか分からないと思うが質問に答えてくれ」

「ん？どうしたクロノ。このD I Oに質問があるだと？」

「はい……………貴方は本当にディオさんですか？」

「何を言っている。私の何所が、D I Oではないと言っただね」

「いえ……………なんとなく雰囲気……………忘れてください！たぶん僕の勘違いです」

それじゃあ、と言うとクロノは退室した。
奇妙な事をいう奴だ。

この私がD I Oではないだと？
私がD I O以外の何者だと言っただ……………」

「あっ！」

気付く。自分で言って漸く気付く。

私は……いや俺はッ！ない！

”俺の記憶”がないッ！どうでもいい……そう知識として学んだ記憶はあるッ！

小学校の算数から英語の文法まで覚えているッ！

しかしだ、俺は誰だったのか……何者だったのか？

記憶が無い……馬鹿なッ！こんな事は、ちょっとばかり前にはなかったッ！

いつだ！いつなんだッ！……

「まさか蒐集された時？」

あの時に感じた、全てが奪われるかのような感覚。リンカーコアなんてチャチなもんじゃあない。全てだッ！全てが奪われる感触を感じていたッ！

馬鹿な！闇の書はリンカーコアを抜き取るだけじゃないのか！

クロノは何も言っではいなかったぞ！……あの生真面目な奴に限って、重要な事を言い忘れるとは考えづらい。だとしたら、蒐集の際に記憶が奪われたというのは、勘違い？

それはない！断言できる！

俺はあの事件の前まで、過去の記憶を覚えていた……これはガチだ。

何故だ、何故だ、何故だ、何故だ……

理由は幾ら考えても分からない。

しかしこれだけは言える……

「情けない……」

敗北した上に、自分を奪われた。

ここまで不甲斐ないと、あの女ではなく自分自身に殺意が沸く。

情けない…

本当に情けない……………

「ちくしょおおおおおおおーーーーッッッ！！
！！」

敗北者の絶叫が、

この病院内に木霊した。

「『新手のスタンド能力者』」

「この辺なのか、シグナム？」

イングランドの山中。

飛行する影が二つ。

一人は先日ディオを襲いリンカーコアと……意図した行為ではなかったが記憶を奪った実行犯であるシグナム。もう一人？はシグナムと同じ守護騎士の一人にして盾の守護獣ザフィーラである。

守護獣の名が示す通り彼は人間の形をしていない。青い狼…それがこの守護獣の容貌だった。

「ああ、確かにシャマルはこの辺りで魔力反応……のような気配を感じたと言っていた」

「ような、だと？……魔力反応じゃないのか？」

「私には分かん。だがシャルが言うには、魔力のようだが魔力じゃないような反応らしい」

曖昧な言葉……しかしシャルは探知や補助魔法において守護騎士内では並ぶ者は居ない程の使い手だ。何よりも何百年と共に旅してきた仲間の意見、無視出来る筈がない。
二人はシャルの曖昧な言葉を胸に刻んだ。

「この辺りだな…」

草原に降り立った二人は、リンカーコアを持つ者を探す。
やはりシャルに来て貰うべきだったか、ともシグナムは思う。
しかし彼女等の主である八神はやてを一人にする訳にもいかない。
此処にはいないがヴィータもリンカーコアを蒐集するために出ている。

「俺に何か用ですか？」

「「ッ！」」

振り返る！咄嗟に！

そこに立っているのは、神父服姿の男。一般的には美形と言われるであろう外見をしているが、その目付きの悪さが、どこか恐怖を感じる容貌へと変えている。

「シグナム……どうやらこいつが…」

「ああ。…悪いが、お前のリンカーコアを貰い受けるぞ」

（しかし、この男……一体全体何所から現れた？…私は騎士だ。常に後ろは警戒している。

その私がこうも容易く後ろをとられうなど……。転移魔法が使われた形跡はないッ！私の知らないレアスキルなのだろうか…）

「リンカーコア？…何です、それ？」

「ッ！……貴様、もしかや魔導師ではないのか？」

「魔導師なんて単語、俺にとっては初耳ですよ。まあ人と犬が空飛んできた時点で、ただ事ではないというのは理解してましたがね」

どうやら本当に知らないようだ。

しかしシグナムとザフィーラは、この男に間違いなく魔力の源たるリンカーコアがあるのを感じていた。

稀に魔法の認知されていない世界でも、突然変異で高い魔力を持つ者が生まれるのは、ある事だ。恐らくは、この神父もその一人なのだろう。

「魔法を知らない一般人を手につけるのは心苦しいが、我等にも果たさなければならぬ目的があるッ！

悪いが……少しの間だけ眠って貰うぞ」

しかし、このような人里離れた場所に一人で寝かせて置く訳にもいかない。

リンカーコアを蒐集した後で、街の何処かへ連れて行かなければならない。

主の為に騎士の誇りさえも捨てる覚悟を持っている守護騎士達……

…主の笑顔に誓って殺しはしない、そう決めたのだ。

だが、シグナムは見誤っていた。確かに彼は魔導師ではない。魔法

の存在も知らなかった。しかし彼は、魔法に匹敵する程の異能を持った男である事を！

「チツチツチツチ、違いますよ。本当に分かっていませんね。少しの間だけ眠って貰うウー？そんな、なまっちよろい遊びなんて面白さの欠片もありません」

何を言ってるんだ、こいつは……

シグナムとザフィーラには、目の前の男の言葉に付いていけない。

「だから……殺し合いを始めましょう？」

ニコリと……人を魅了する笑顔で言う男の顔は……
酷く純粹であり……同時にとても狂気に満ちた顔だった。

「グおつオツ」

「ザフィーラ！……こいつはッ！」

シグナムは一瞬、何が起きたのか理解不能だった。
どんな行動に移るか分からない神父の挙動を、凝視していたのだが、全く動いていないのにザフィーラは吹っ飛ばされたのだ。

「これは……ディオという男が使っていた能力に似ているッ！？」

ザフィーラを吹っ飛ばした人影。

それは人の形をしていながら人ではなかった。

スタンド！それがこの影の名前。

「俺のレディオヘッドの前にこうもあっさりと……実に呆気ない。」

殺し甲斐のない犬ですね…」

ザフィーラを侮辱する言葉を放つ。
だがシグナムに気にした様子はない。

「おや？どうしたんですか？仲間がアリのようにあっさり殺されたのに、全く動揺しないとは……
あの程度の犬コロは死んだ所で如何でもいいという訳ですか？」

「まさか。…ザフィーラは我等の盟友。死んで如何でもいい訳がない。」

一つだけ言わせろ。貴様は少し我等を舐めすぎだ」

「なに…？」

悪寒！背後から感じる悪寒！

既にザフィーラの拳は背後にまで迫っていた。

「クッ、レディオヘッド…！」

「AAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!!!!!!!!!」

雄叫びを上げてザフィーラが突くッ！

寸前に衝撃！拳は再び本体の前に、戻ったレディオヘッドにより止められていた。

「ぐウ…なんていうパワー…」

「ベルカの守護獣を舐めるなアアアアアアアッ?????????
?!?!?!」

神父は感じる！腕の痛みを！

スタンドから伝わる気迫、そしてエネルギー！

「驚きました。先程の言葉を訂正します。

貴方達は実にツ！殺し甲斐があるツ！」

先程よりも狂気に満ち溢れた笑顔。

二人は隣に立つスタンドのプレッシャーが増したのを感じた。

「では「シグナム！ザフィーラ！お前等、何やってんだ！」…ハア
オー…！」

意味不明の絶叫。

神父はヴィータの姿形を見た瞬間に、体中に有刺鉄線が巻き付いた
ような衝撃が走った。

口調、容姿、服装、愛らしさ……

「敢えて言わせて貰いましょう。

その貴女………パーフェクトツ！！エクセレント！！素晴らしい
ツ！！…完璧ですツ！！」

「はあ！？」

ヴィータを含めた三人は、神父の突然の変貌振りに付いていけない。
神父はシグナムとザフィーラを完璧に無視して進める。

「その麗しきマドモアゼル。私の名前はレオ・ヴェルナスと申し
ます。レオ神父と呼ば下さい。他の者もそう呼びます」

「あ…ああ」

ヴィータは話の流れに全く付いていけない。なんなのだ、この男の妙なプレッシャーは！

この今まで出会った事のない存在に、ヴィータは思考がグチャグチャにされてくような気がした。

「そしてレオ・ヴェルナスは貴女に訊ねる。美しいお嬢さん。貴女の名前をお聞かせ願いたい」

恭しく頭を下げる姿、それは全く隙がなく洗練されていた。

大抵の女性ならこんな態度をされただけでコロッといかされるだろう。

「ヴィ…ヴィータだ…」

「ヴィータ…！！……んっゝ素晴らしい！！素晴らしく麗しい名前です。」

どうですマドモアゼル。今から私のきつ…えr jけけr jゅ」

守護騎士の中でも、ある意味で一番まともなザフィーラが、教育上宜しくない気配を察知して神父の頭を殴り飛ばす。

流石の神父も守護獣のパンチをまとも喰らったのだ。

物理法則に従って吹っ飛ばされると……ピクピクと痙攣した後、動かなくなった。

「シグナム……リンカーコアを…」

「……そっ、そうだったな！」

漸く思考が回復したシグナムが、レオ神父からリンカーコアを抜く。結構な量だ。なのは程ではないが、それでも十分すぎる量。

「帰るぞ、主が待っている」

「この男、街へ連れて行かなくていいのか？」

ザフィーラは、恍惚の笑みを浮かべたまま気絶している神父を指差すが

「問題ない。別に山中に置き去りにしたぐらいで、これが死ぬとは思えん」

「……そうだな……」

「結局なんだったんだこいつ？アタシを見た瞬間、変な風になるしよ」

「……ヴィータ。色々あるのだ……男には……な」

何故だか知らないが哀愁漂う顔をするザフィーラ。ヴィータとシグナムは頭の上に？マークを浮かべる。

「そうだ！そんな場合じゃない！今日ははやてが焼肉だって言ってたぞ！」

「なに！本当なのか……！」

「ああ、間違いねえ。はやては『焼肉』って言ってた……！」

「よし！ヴィータ、ザフィーラ！急いで帰るぞ！主はやてと焼肉が我等の帰りを待ちわびているッ！」

今日、出会った神父の事を、完全に頭から振り払う。

気になる事はあるが、先ずは焼肉だ。

三人は全力で焼肉……もとい八神家へと帰っていった。

第15話（後書き）

という訳で登場したオリキャラは y o uさんの応募されたレオ・ヴェルナス神父でした。

ですが、今回出番が少ないと感じる方も多いと思います。ですがこのレオ・ヴェルナス神父の出番は A・s 編だけじゃありません。s t sでも元気に活躍する予定です。

最後にこのキャラを応募してくれた y o u様に感謝を！！
ありがとうございます！

第16話（前書き）

フライング第二弾！今回はオリキャラではなく、あの人が登場します。

第16話

〓 〓 転入手続き 〓 〓

守護騎士達の襲撃から時間は過ぎ、闇の書事件をアースラが担当する事が、決定した。

しかしながらアースラは暫く使えない状態なので、事件の発生した近隣に作戦本部を置くことになる。

その場所選ばれたのが海鳴市、つまりなのはの実家がある街だ。

「ユーノ君久し振りだね」

さすががユーノを抱いて言った。

アリサとすずかは、なのはの友人であり何度かビデオメールでは何度か会っていたフェイトが、海鳴市に来るというので二人一緒に、フェイトに会いに来たのだった。

「キュツキュ」

「可愛いわね。……でも見た事のない種類ね……雑種犬？」

「クーン」

一方でアルフを抱いているアリサは、可愛いと言いつつも、今まで本でも見た事のない品種に、少しだけ頭を捻らせている。…尤も正確に言えばアルフは犬ではなく狼、それも地球ではなく次元世界出身の狼なのでアリサが知らないのは当然である。

「……という訳で、これから暫く近所になりますので、宜しく願います」

「いえいえ、此方こそ」

子供達がテラスで談笑してる間、リンディとなのは母である高町桃子は、お約束である引越しの挨拶をしていた。しかしそれにしては、二人の様子はとても今さっき出会ったばかりとは、考えられないほど仲が良かった。

リンディは大の甘党なので気が合うのかもしれない。

「フェイトちゃん、三年生ですよ。学校はどちらに？」

「ああ。それなんですけど……」

その時、翠屋のドアが開いた。

現れたのは、包みを抱えて少し困惑気味のフェイト。そしてなのは、アリサ、すずかの三人。

「あ、あのリンディでいと……リンディさん！」

「はい、なあに？」

「え、えと……その、これって」

フェイトが包みの中を見せる。
仲には白い制服が入っていた。

「フェイトさんの転校手続き取ったから、週明けからなのはさんのクラスメイトね」

言葉がでない。

なのはのクラスメイト……頭では理解しているが、それが信じられない。

「あらあら素敵」

「聖祥小学校ですか、あそこはいい学校ですよ。な、なのは」

「うん！」

高町夫妻が、フェイトがその事をまるで我が事のように喜び歓迎した。

なのは自身もフェイトと同級生になれると聞いて、喜びの大気圏を突破している。

「良かったわねフェイトちゃん」

「は、はい、その、えと……ありがとうございます」

漸く手に入れた、当たり前の日常を噛み締めるように、フェイトは包みを抱きしめた。

「ところでフェイトって髪の色や目の色が、ディオさんと同じけど……もしかして親戚？」

「へ？…ちつ、違うよ！ディオさんとは会ったばかりで…」

しかしアリサの言う通り、そう言われれば兄弟や親戚に見えない事はない。

勿論、二人の間に血縁関係などある訳が無いが、予想の斜めをいく言葉に、フェイトは少しだけパニックになってしまう。

「ふん。でもその反応は怪しいわね……それは一先ず置いといて。そういえば昨日、すずかの家に言ったらディオさん留守だったみたいけど、どうしたの？」

「え！……それはその……な、なのはちゃん！」

「にゃ！……ここは私よりフェイトちゃんが……」

「わ、私なんかよりすずかの方が上手に説明してくれると思うけど……」

どうやら事情を知っているらしい三人は、自分で説明するのが難しいのか口を閉ざす。

他の誰かが言う事を期待して、自分から言おうとはしない。

「ああもうッ！面倒臭いわね！きりきり吐きなさいッ！」

しかし、なんだかんだいって、このグループの中で一番強い（性格が）のはアリサ。

結局は二人からの裏切りにあったなのはがポツポツと語り始めた。

〓 〓 風林火山 〓 〓

南アメリカ大陸の北部、ギアナ高地！

とある世界では、多くの豪傑達が、この場所で己の殻を破り、大きく成長したという、ある意味では神聖な場所である。
その地にディオはいたッ！

「まだだッ！この程度ではッ！」

イメージトレーニング！

絶えず強敵の姿をイメージして、それに勝利する為に動く！

今、ディオが相手しているのは、自分を嘗て滅ぼした相手、星の白金チナを使う空条承太郎である。皮肉な事に、記憶が奪われたせいでDIOとしての記憶が濃くなり、簡単にイメージする事が出来た。

「ヌウウウッ！ザ・ワールド！！」

時が止まる。

しかしスタープラチナは止まらない。

DIOの記憶から正確に再生された空条承太郎は強いッ！ギアナ高地に来て、時間を止められる時間は四秒になっていたが、ディオのイメージする空条承太郎は三秒の時を止める。

これだけ聞くとディオ有利のような気がするが、実際にはディオはイメージした空条承太郎に、ただの一度として勝った事がない。毎回イメージトレーニングは自分の敗北で終わる。

ブラッテイング&キョーションシフト
「刺血穿処刑！！」

この世界にあった既存の魔法を、ディオが改良した新魔法。通常の魔導師の使う『ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフト』よりも密度と威力において上！

「オラア！」

しかしスタープラチナは最小限の攻撃で、血の刃を叩き落とすと、そのままディオへ跳躍！

[illegible]

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラ」

交差するラッシュ！

だが次第にディオが押され始める。

隙を見つけたスタープラチナがザ・ワールドの頭に、強烈な一撃を叩き込んだ。

威力、当たった場所を考えると、例え吸血鬼のデイトだろうと致命傷。

つまりはディオの敗北という事だった。

「これで〇勝二〇敗か……何故だッ！何故こうも勝てんッ！」

総合的なスペックでは上回っているのだ。

その相手に真つ 向勝負で何故こうも勝てない！

ディオは気持ちを抑えきれずに回りの木々に八つ当たりをする。

「荒れてるようだね……」

「誰だッ！」

振り向く！この場所に他の誰かが来る？

その事自体が奇妙だ。ここはギアナ高地の奥深く。到底人が来れる場所ではない。おまけに一応のため人払いの結界も張っているのだ。

「そう警戒しなくてもいい。私は単なる観光客。面白い事がありそう。うな雰囲気が出て来てみただけだよ」

観光客というのは、見るからに妖しい。

金色の目をした爬虫類のような顔の男。それがディオにとっての、この男の第一印象だった。

おまけに着てる服は白衣。どう考えてもギアナ高地に来る時に着る服じゃあない。

「貴様……………何者だ？」

「何者…か。」

答えたいのは山々なんだけど、こちらにも事情があつてね。本名は答えられない。

しかし娘達は私をドクターと呼ぶよ」

ドクター！。

つまりは医者……………ではなさそうだ。

医者というよりはマッドサイエンティストと言われた方が、納得できる。

「それで…わざわざギアナ高地にまで、観光に来たドクターが私に何のようかね…」

表面上は平静を装っているが、内心では突然現れた男の存在に腹が立っていた。

他に人もいない……殺した所で特に問題はないだろう。

「フフフフツ、そう怖い顔で見られても困る。

それよりもオレンジを食べないかい。私の好物だね」

「……………」

「ほら、オレンジだけじゃない。オレンジジュースもある。
私の研究所の前にあるオレンジ畑からの産地直送だよ」

流石に、ここまで吹っ飛んだ対応をされると、興が冷める。

それに丁度イメージトレーニングが終了した所だ。一旦休憩を入れるのも悪くはない。

「これは…………中々に美味しい…」

「だろう！…このオレンジ達は私の自信作だね。味だけではなく健康にもいいのだよ。

私の娘達も大絶賛だったからね」

言うだけあってドクターのオレンジはどれも素晴らしかった。

デイオはオレンジは余り食べた機会がないので分からないが、オレンジジュースに限って言えば、コンビにで売られているのでは、味に本鮪とアカテガニぐらいの差がある。

「それで、君は誰と戦っていたんだい。

どうやらイメージトレーニングをしていたようだがね」

「良く分かったな。あれがイメージトレーニングだと」

少なくとも普通の人間が見れば、ディオのやっていた事は、ただ虚空に向かつて、攻撃していたようにしか見えない。逆に言えば、ディオがイメージトレーニングをしていると見抜いた、この男は普通じゃあないという事だ。

「そんなに警戒しないでくれたまえ。別に私は君の敵ではない。ただ……………そう、気になっただけだよ。

君をあそこまで必死にさせる存在にね」

そう、それは単純なる知的好奇心。

知りたいという、ある意味では最も人間らしい欲望の発露であった。

「まあいい。

このディオが戦っていた相手……………そいつは空条承太郎。DIOを倒した男だ」

「ほう、面白いね。つまり君は自らの敗北した相手と戦い……………そして負け続けていると？」

「負け続けていると何故分かった？

私はお前に、そんな事を一度たりとも話した覚えはない」

「なに、君のその表情から推測しただけだよ。しかし…ふむ。今の君なら、その空条承太郎とやりに負けたのは当然だろうね」

「なにイ！」

ザ・ワールド
世界が現れる。

そして、拳をドクターの顔面スレスレで寸止めた。

「今からお前の脳味噌を潰すのがどれだけ容易いか………例えて言うならHBの鉛筆をベキツ！とへし折る事と同じように簡単だ………だがこのディオ。一応は美味のオレンジを食した恩がある……。だからこそ一つ質問をしよう。……死にたいかね？」

結界の張られているこの場所に、入ってきたという事は、ドクターは十中八九魔導師だろう。

つまりは世界が見えているという事だ。

だが変わらない！ドクターの表情は！

目の前に自分の顔面をプチッと潰すギロチンがあるのに………変わらない！

寧ろ面白そうな物を見るように笑っている。

「フフフフツ！面白いッ？

しかし故に残念だよ………今の君には理性がないッ！」

「……三度目はない……死にたいかね？」

「死ぬのは嫌だね。私にはまだしたい事が山ほどある。

だが哀しいね。私のこの知的欲求は自分の命と天秤に掛けたとしても留まらないのだよウ！

しかしだよディオ君……私は君の想像がついていると思うが、自分の欲望に忠実な……そう本能が理性よりも強い人間だ。しかしだッ！私には冷静な判断が出来るッ！本能で動きながらも冷静さを持つ事が出来る！そう、それが人間なのだよ」

「……興味深いな。……いいだろう。このディオ、お前の処刑を先延ばしにしてやろう。

さあ、話すがいい」

「ではお言葉に甘えて。

私の見た所、今の君は猛獣そのものだ。一見すると冷静に見えて内心では、直情的にしか物事を考えていない。はつきり言おう。君は感情に”支配”されて動いている」

「！」

「君は本来なら支配する者である筈だ！ いやあらなければならぬ！ あると信じたまえッ！！

それが逆に支配されるッ！……………笑えないよ、正直に言ってね」

「このディオが……………感情に支配されている……………」

心当たりがあるッ！

思い起こせば先程のイメージトレーニングでも、安易な真つ向勝負をせず距離をとって戦っていたら、あるいは、勝てたのではないか？ それにだ……………記憶が奪われた事にだけ、思考が支配されていて、どうすれば記憶を取り戻せるかを考えていなかったのではないか？

「……………認めるしかない……………これは俺の欠点だ……………克服せねばならない事だ……………」

認める。ディオは自らの過ちを認めた。

（そうだ。過ちを認めねば進めぬ。過ちを認めず過ちを繰り返すのは馬鹿の所業！俺はそうではないッ！過ちは改めてこそだッ！）

「クックク、どうやら理解してくれたようで幸いだよ。

それ故に残念だ。実は時間が迫っていてね。そろそろ帰らねばなら

ないのだ」

「そうか……残念だな。

こうして話をするだけで心が落ちつく人間は、この世界で君が始めてだったのだがね」

悪いね……

そうドクターが呟く。

最後に後で食べてくれとオレンジを渡すと、ドクターは転移魔法らしき物を使い…消えた。

??????????

「そうだ……感情に支配されるのではないッ!……感情を支配するのだッ!」

再び世界を出す。
ザ・ワールド

感情の高ぶりを抑えて……そして全ての意思を支配。

ディオは不思議な感覚を覚えていた。

今までは見えていなかった視界がクリアになる……そんな気分。

「抑える……そして認識しろ……」

エンヤ婆は言った。

スタンドを操る事は、出来て当然と思う精神力。

「そうだ、俺は次元世界の帝王となる男。時を支配出来て当然。それが自分の感情すら支配出来ずしてどうするッ！」

まるでスタンドと自分が融合するような一体感。

スタンドから感じる肌触り、視界が全てダイレクトで俺に伝わる。イメージするのは空条承太郎。

ジョースター家の末裔であり自分と同じ『時を止める』能力を持つ男。

「ゆくぞッ！承太郎！」

スタープラチナが迫る。

だが先程のように真っ向から挑んだりはいしない。

後方へバック、そして血の刃の雨を降らせる。

キラ・スマッシュ・バスター
「魔烈殺凶砲！！」

黄金の砲撃が承太郎を襲う。

だがその程度でやられるような男ではない。あっさり避けると凄まじいスピードでディオに接近。

接近したスタープラチナがディオの頭を吹っ飛ばした。

しかし……………

それは幻影。

そう、承太郎の吹っ飛ばしたディオは、魔法によって作り出された幻影、偽者。フェイク

本物のディオは…

「後ろは貰ったぞ承太郎ッ！」

一瞬の戸惑いも躊躇もない。

そして力まない。相手の身体を貫くように……突くッ！

心臓を貫かれる承太郎。

ディオのイメージによって造られた彼は、イメージの死と共に消失していった。

「これで……1勝20敗。

そうだった1勝だが……今まで異常にスカッとした気分だ。

一つ歌でも歌いたいくらいスカッとした気分だ……フフフフ。
フ。

あつたまテカテカ さえてピカピカ……」

ギアナ高地にディオの歌声が響く。

狙うは闇の書に取り込まれたであろう記憶。そして自分の記憶を奪った張本人である女には、落とし前を付けなければならない。

ディオが修行を始めて一週間。

彼はギアナ高地を……降いたッ！

第17話

〃〃冷酷無情〃〃

数ある次元世界には当然ながら人の住んでいない世界もある。

この世界もその一つ。

終わらない永遠の冬が支配した世界。

世界全体が北極のようなこの世界では、人が住めないのは自明の理だろう。

「くっ…油断したッ！」

思わずシグナムの口から、そんな言葉が漏れた。

疲労というのは馬鹿に出来ない。

普段ならば容易く倒せる筈の蛸の怪物にさえ少しの隙から拘束されてしまう。確かに大きなならば巨大だが、所詮はデカイだけ。攻撃を避けるのは易く、当てるのは難しくない。

（…不味いッ！）

蛸の怪物は巨大が口を開いてシグナムに迫る。

彼女は、此処にはいない主と仲間達に、心の中で誤ると……………目を瞑った。

「Thunder blade」

電子音！デバイス特有の電子音が聞こえる！

飛来する電撃の剣。それ等は容赦なく竜を貫いた。

（今だッ！）

自身に絡み付いていた足を切断。

だが敵は去ってはいない。何故ならば守護騎士に先程のようなミッド式魔法を使う者はいない。

そしてあの魔力光と電撃には心当たりがある。

「礼は言わんぞ……テストロッサ……」

「……お邪魔でしたか？」

「蒐集対象を潰されてしまった」

「まあ、悪い人の邪魔をするのが、私の仕事ですし……」

「そうだったな。私は悪人だった……」

少しだけ緩かった空気が引き締まる。

両者は互いに、信頼する獲物を構えた。打って変わった緊張状態。

シグナムはただフェイトを睨み付けていた……何時でも動けるように……

……ディオが立っていた。

「なにッ！」

「えッ！」

その声は両者の者。

二人は互いを指の動き一つも見過ごさない気持ちで睨んでいたのだ。なのに何故！如何してフェイトとシグナムの間に、突如としてデイトがいる！？

（シグナム！どうしたの！？慌ててるようだけど！）

（シャルカッ！

…あ…ありのまま今起こった事を話すぞ！

『私ははテストロッサを睨んでいたら、何時の間にかデイトが立っていた！』。

な…何を言っているのかわからないと思うが、私も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか転移魔法だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてない。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぞ…（

（！）

シャルは思わず黙る。

この世界から遠く離れた場所にいるシャルだが、普段は冷静なシグナムが、これ程までに取り乱すなど普通なら有り得ない事だ。

「フェイト、お前は下がっている。

あいつは私が相手する」

「でも……」

「もう一度言う。

このデイトは”下がれ”と言ったのだ」

「…………ッ！」

逆らえない。

フェイトにはディオの命令に抗うだけの精神力はなかった。
大人しく後方へ下がる。

「烈火の将……………シグナムと言ったかな？」

フフフ、君に一つチャンスをやろう。私に泥をつけた者に此処まで
言うのは初めてだぞ。フフフ」

「…チャンス…だと？」

「そうだ。その私に向けている剣を下げる。そうすれば、このディオ
才に対する非礼を許し、私の仲間にしてやろう。

逆に死にたければ……………天に向かって剣を掲げる、勇者のようにな……」

「…愚問だな。…私の剣は命と共に、今生の主ただ一人に捧げられたもの。

そして我が剣を捧げる相手は、断じて貴様ではないぞッ！ディオ！」

「…そうかな？…本当にそうかな？」

ならば……………剣を掲げるがいい……」

シグナムは何の躊躇いもなく、剣を天に向けた。

「そうか、そうか、シグナム。フフフ

”剣を下げたな”このディオの仲間になりたいという訳だな」

「！」

気がつけば剣を下に下げている。

思い直してもう一度、剣を天に向けた。

「……………！？」

剣は下を向いていた。

「な、なんだ……………！？」

私は確かに剣を…下げた！確かに！」

「どうした？動揺しているぞ、シグナム。

『動揺する』それは『恐怖』しているという事ではないのかね。

それとも『登らなくてはならない』と心では思っているが、あまりに恐ろしいので無意識のうちに、逆に身体は降りていたといったところかな……………」

汗が溢れる。

シグナムには、何が起こっているのか、一ミクロンも理解出来ない。

「馬鹿なツ！私は確かに剣を上げた！」

もう一度……………もう一度剣を上げる。

「！？」

剣は下がっていた。

（な…なにをしたんだ！？『レアスキル』！？

イングランドの山中で戦った奴と同じような能力！？

い…いたいこれはッ!?)

「シグナム。」

人間は何のために生きるのか考えたことがあるかね？

「人間は誰でも不安や恐怖を克服して安心を得るために生きる」

名声を手に入れたり 人を支配したり

金もつけをするのも安心するためだ

結婚したり 友人をつくったりするのも安心するためだ

人のために役立つだとか 愛と平和のためにだとか

すべて自分を安心させるためだ

安心を求める事こそ人間の目的だ

そこでだ……

私に仕えることに何の不安感があるのだ？

私に仕えるだけで他のすべての安心が簡単に手に入るぞ」

発せない。シグナムは何も喋れない。

「今のお前のように、死を覚悟してまで私に挑戦する事のほうが不安ではないかね？

お前は優れた騎士…

殺すのは惜しい。守護騎士など辞めて私に永遠に仕えないか？

永遠の安心感を与えてやるっ」

（馬鹿な……本能的に拒否しているのかッ！ディオと戦う事を！

駄目だ、私は屈する訳にはいかない。一対一においてベルカの騎士に敗北はないッ！）

「く…くどいぞディオ！

私は主に忠誠を誓った身！

何が何でも屈服する訳にはいかんッ！」

シグナムが剣を構えて突っ込む！デリオへ！

そう負けられない。己は烈火の将、つまりは守護騎士を束ねる立場にある。

自分が負ければ他の皆の士気は下がってしまう。故に将に敗北は許されないのだッ！

「フン！ならばしょうがない……

死ぬしかないな、シグナムッ！」

「また、その守護獣のような能力か…

だが負けんッ！」

「無駄、無駄、無駄、無駄、無駄」

速いッ！そうシグナムは思った。

しかし実際の所はスタンド自体のパワーは、強くなっていない。

ギアナ高地での修行は無駄ではない。掴んだのはスタンドと自分が

融合していく一体感。

ザ・ワールド
今の世界は踊りながらテストの問題でも解ける！

「紫電一閃！」

炎を纏いし剣がデリオへと迫った。

その威力は、なのはの攻撃を、受けても破損はしても破壊はされなかった、バルディッシュを両断する程のパワーである。なのはのバリアでも防げるか怪しいだろう。

「貧弱、貧弱ウ！」

人間ですら無いプログラム風情が、俺に勝てるものかッ！
お前にある未来は絶望なんだよーッ！」

「又アッ！」

真剣白羽取り！世界^{ザ・ワールド}が剣を止めた。

しかし剣は燃えている。スタンドが傷つけば本体も同じ部位が傷つく。

ディオの手は焼けていった。しかしそれを上回るスピードで回復するのだッ！

「クッ！一旦退かなければッ！」

騎士というだけあってベルカ式魔法は対人、つまり接近戦が得意だ。そのシグナムに悪寒が走る。接近すれば負ける！それは確かな直感だった。

長引いても不味い。シグナムは一撃でディオを倒すべく、切り札を使う事にした。

ニタァー

悪鬼が笑ったような気がした。

瞬間 シグナムは見た。自分の周囲に展開されている血の刃を。

「はアッ！」

理解は出来ない。
だが長い戦いの経験が、思考よりも脅威を払う事を選んだ。

しかし数が多すぎる。血の刃は全方位に展開されているのだ。全てを叩き落すことは……出来ない。

「う…………グッ…」

ただの人間ならば致命傷だった。

しかし彼女は人間の姿をしているが人間ではない。

闇の書の守護騎士プログラム。当然ながら人間よりも丈夫だし、管理者権限を使えば再生も可能だ。

それに幸いにして急所だけは、避けられた為、まだ戦闘には支障がなかった。

「何処を見ている？私は此方だぞ、シグナム。それとも私が恐ろしくて後ろを向いたのか？」

「なッ！きさ…………動かないッ！体が動かない！これは…………凍っているだとオ！」

「脆弱者がッ！もしや、ちよいとでも私に、勝てると思っただのか…………！」

貴様は犬死する為に、私に挑んだのだ。よって最も残酷な死を贈ろう！」

動かない。魔法で氷を溶かすが…………こつも全身が凍らせられていれば、魔力を込めるのにも時間が必要だ。約二秒！それだけの時間が必要だ。

「シグナム……………」

叫び！無心の叫び！

ヴィータだった！恐らくシグナムの危機を察知して、急いで駆けつけたのだろう。

[W R Y Y Y Y Y Y Y Y Y ! ! ! !]

「うわあああああああ——ッ!」

バラバラバラバラ

崩れていく体、落ちていく氷はまるで絵画のページのように華麗だ。

そう……その正体^が人でなければ……

守護騎士プログラムであるシグナムの体は、段々と薄れていくとまるで夢幻の如く消えていった。

第18話

〓 〓 悲劇 〓 〓

「嘘だろ、おいッ！…………返事をしろよッ！

如何して何も言わねえんだよッ！ほらなんとか言えよッ！」

ヴィータの声が、冬の世界に空しく響く。

だが、それに答える騎士

シグナムはいない。

何故なら彼女は……………

「テメエ！よくもシグナムをオーーーーーッ！」

ディオに殺されたのだから。

ヴィータはシグナムを殺した相手へと自身の獲物であるグラーフア
イゼンを振りかぶる。

（アタシが…もっと早くかけつけていれば……………）

過ぎ去った時間にIFはない。

だがヴィータは考えざるを得ない。

もしも自分がもっと早く救援に来ていればシグナムは死ななかった
のではないか？

勿論、ヴィータは何時の戦闘でも全力を尽くしている。だがもしも

…………

そう考えてしまうのは、仕方ない事だろう。

「ほう…仲間が殺されて逆上した…か。

いいだろう。お前が二人目だッ！」

ディオは余裕。

復讐に燃える獅子は恐ろしい。

だが、ディオの世界は^{ザ・ワールド}その復讐すらも停止させてしまう。彼の前では如何なる達人であろうと人形と同義。

「ッ！ これはバインドッ!？」

ヴィータの体を青いバインドが縛った。

この魔力光は……………この場にいる誰の物でもない。ならば第三者という事になる。

ディオとヴィータが同時に辺りを見渡すと、見た事のない仮面の男がいた。

「デメエ！」

一体何者だッ！こいつ等の仲間かッ!？」

「……………転移……………」

短く一言。

それだけの詠唱。ザ・ワールドを使うまもなく二人の姿は消えていった。

「デメエ……………何者だ……………」

極寒の世界から遠く離れた砂漠の世界。

そこにヴィータと仮面の男が、向かい合っていた。

「私の正体など如何でもいい。

それよりも……貴様の仲間を蘇らせたくはないか？」

「なっ！…なにを言ってやがる！」

「闇の書の管理者権限。

書を完成させ、主がそれを使えば、守護騎士プログラムの再生などは容易の筈だ」

「！」

言われてから気付く。

自分達は人間ではない、プログラムだ。

闇の書を完成させて、はやてが管理者権限を使えばシグナムは復活出来る。

「……アタシにそんな事教えて、テメエに何の得があるんだよ……」

「言っただろう。知る必要のない事だ…と。

それでは、ここで失礼する。私も暇ではない」

「あっ！待ちやがれッ！」

ヴィータの言葉を見殺して、仮面の男は消えていった。
後にはヴィータと闇の書だけが残された。

「罪と罰」

アースラのブリッジは静まり返っていた。

理由は一つ。今回の戦闘である。

ディオは守護騎士の一人を氷付けにして……殺した。

謎の電波妨害によりアースラは一時的に、全ての映像がダウンしていたので、記録には残っていないが、フェイトとディオ自身の証言で、今回ディオが殺しを行った事が発覚した。

「もつと穩便に……拘束する事は出来なかったのか？」

クロノが少し棘のある口調で言う。

「勿論だ、クロノ執務官。

私は、確かに一度だけ守護騎士を拘束したッ！……だがそれは一時的なもの。

歴戦の兵ならば、あのような拘束、大した力も使わずに破壊出来ただろう。そう精々二秒ほどだった、拘束してられる時間は…。

だからだッ！万全を期す為に、氣絶させるつもりで殴ったのだが…

……少し威力が強すぎたらしい。

そこは、このディオのミスだ……素直に謝罪しようじゃあないか」

「……そうか、分かった。

それで守護騎士は他に、何かヒントになるような事を言っていないかったか？」

「いや……特にないな」

淡々と受け答えを続けるクロノとディオ。

苦々しい思い……初めての感覚をクロノは味わっていた。

時空管理局の魔導師には、基本的に非殺傷設定での魔法行使をする為、原則として人を殺すことはない。

これは、時空管理局という組織自体が軍隊というより警察寄りの組織だからでもあるが、生かして捕らえた方が、情報や何やらを引き出せるから……というのも理由の一つではある。

しかし管理局員もやむを得ず殺傷設定の魔法を使う事もあるのだ。実際、クロノの父であるクライドは、闇の書の暴走を止める為に、味方の艦のアルカンシエルにより次元の海の藻屑となった。

その点から言ってクロノに、ディオを否定する事は出来ない。

前後の供述からして、仕方なかったとも取れるし、第一彼は局員ではなく民間協力者だ。

流石に自分の命より、犯人の身柄拘束を優先しろとは言えない。

「報告は分かった……僕と艦長はこれから話し合う事がある。ディオさんはフェイトと一緒に、休んでくれ」

「…では、お言葉に甘えさせて貰おう」

「次元世界」

黙って退室するディオとフェイト。

その後姿を見てリンディは思う。

（はあ。ままならないわね……）

今回の件……なのはには言っていない。

人の生死は9才の少女には過ぎた話だし、個人的な情がそれを阻む。

本音を言えばなのはだけじゃない。フェイトやユーノ……クロノさえも事件に関わらせたくない。

しかし現実是非常だ。守護騎士はどれも最低でもAAAランクはある猛者ばかり。クロノ、なのは、フェイトを欠かしたアースラでは返り討ちがオチだ。

自分なら太刀打ち出来るかもしれないが、艦の責任者が前線に立つ訳にもいかない。

（だけど………不謹慎かもしれないけど………チャンスね……）

ディオがシグナムを殺したッ！

つまり守護騎士達は、今後よりハードになる。元々四人で行っていた蒐集を、三人で行う事になるのだ。

上手くいけば戦力不足を感じた主が、自ら出てくるかもしれないし、疲弊した騎士を捕まえるのも容易いだろう。

（アースラの戦力を考えれば………上手くいけば次にでも捕らえられるッ！）

守護騎士の数は四人！

これは過去の記録からも間違いない事だ。

現在の守護騎士は一人欠けて三人………その内の一人はサポート要因、戦闘力は低い。

戦術としては、フェイト、なのは、アルフが二人の騎士を抑えて、残った補助要因の騎士を、クロノが叩く！これがベストだろう。

しかし正体不明の仮面の男の存在があるッ！

騎士の反応からして、主ではなさそうだが、依然として目的は不明。だから万が一の為に、ディオを待機させておく。

守護騎士の一人を、負傷らしい負傷もせずに殺したディオならば、仮面の男を抑える事は、十分に可能だろう。

(……でも……やっぱり人材不足ね……)

今回は偶然が重なったに過ぎない。

現在アースラの戦力は潤沢と言っているが、なのはとディオはあくまでも民間協力者。

そして、その二人がいなければアースラは苦戦を余儀なくされただろう。

リンディも理解はしている。

管理局は万年人手不足だ。……その背景には質量兵器（魔法を使わない兵器）を全面的に禁止している事が大きく原因しているのだが、別にリンディはそれを否定したりはしない。

次元世界の歴史を紐解くと分かるが、管理局発足前の次元世界……

……特に戦乱の世は、酷いものだった。

最悪の時は一日に一個の世界が滅んだというのだから洒落にならない。

「このまま、事態が好転すれば良いのだけど……」

しかし、リンディの願いも空しく事態は好転どころか悪化してしまう。

守護騎士発見の報を受けたアースラは、なのはとフェイト、アルフを派遣。一時は追い詰めるのだが、予想を上回る能力を見せた仮面の男の前に、フェイトのリンカーコアが奪われてしまう。

ディオが現場に到着するまでの………実に数分の出来事だった。

だが、クロノ・ハラオウンは気づいてしまう。

仮面の男の正体に！………感情は否定しながらも、自分は管理局員。クロノには、この事を無視することは出来なかった。

事態は次第に、終焉へと進んでいく。

ⅡⅡ 闇の覚醒ⅡⅡ

八神はやては暇だった。

思えば、こうも一人でいるのは久しぶりかもしれない。

9才の誕生日からは、家族が出来たから…

怒ると怖いけど、実は優しいシグナム

ドジだけど、しっかり者のシャマル

妹みたいで可愛いヴィータ

愛犬ザフィーラ

この四人が家族となつてから、八神家に退屈の二文字はなくなった。

それは夢見ていた生活。

体が不自由で学校にも行けず、たった一人で暮らしていた頃では、考えられないほど輝いた日常。

「…皆どこ行ってしまったんやろな…」

シグナムが、ギアナ高地に修行に行つたと聞かされて三日。

今まで以上の頻度で、一人でいる時間が増えた。

「贅沢な悩み……だとは思っ……でも…

やっぱあかなあ。…一回”家族”を知ってしまった分、一人でいるのが余計辛いわぁ…」

そんな時だった。

「……ようや……く……意識が……表層に……出せた……か……」

「だ、誰やッ！」

聞き覚えのない声！

誰だッ！と辺りを見渡すが、誰もいない……しかし幻聴だとは思えない。

「だ、誰かおるんかッ！……ご……強盗なら相手になるで！」

自分を強気にさせる為に、わざとデカイ事を言って鼓舞する。

別に本当に強盗を相手に出来るとは思っていない。しかしやる気は出る。

「……もしかして……君が……闇の書……の主かな？」

「へ？……もしかして闇の書が喋ってるん？」

「……ご名答だよ……君は……フム。八神はやて……だったかね？」

「やっぱ闇の書や！」

……うん、そうやで。うちが八神はやて。闇の書の主や」

「そう……か。……はやて……だったね。」

少し……訊ねたい……ことがあるのだが……いいかね」

「な………なんや？」

彼の聞いた事は三つ。

？ジョースター家の有無

？ジョセフ・ジョースターの存在
？空条承太郎の存在

それに対しての、はやての答えは。

・ジョースター家はジョージ・ジョースター二世が戦死した事で消滅。イギリスに廃墟が残るのみである

・エリザベス・ジョースターが身ごもる前に、ジョージ二世が死亡した為、ジョセフは生まれていない

・必然的に空条承太郎も存在しない

「そう……か。……礼を言うよ……はやて……お陰で色々なことが……分かった……」

「それにしても何で突然喋れるようになったんや？」

「それは……闇の書が起動してから……漸く安定期になって……ね。……お陰で……意識……を……表層に出せるように……なったのだよ……」

「そうなんかぁ……それじゃ皆が帰ったら、急いで報告せなあかな」

「それ……なんだが……暫く……待ってくれないか……」

「なんでや？」

「フッフ……私は覚醒……して日が浅い……まだ上手く話せない上に……私自身もまだ不安定だ……守護騎士達……に知らせるのは……私が”安定”するまで……待ってくれないか……」

「そついう事なら、仕方ないなあ。

でも…条件と言っちゃ何だけど、少し話し相手になってくれへんか？」

「話し相手？………かまわ…ない。………私も…人と会話す…るのは………久しぶりだか…らね」

闇の書は答えた。

はやてはこの時はまだ知らなかった。

この男が闇の書の意識ではなく………もつと別の………もつと深い闇の帝王だという事を。

今日この時、
は静かに…覚醒したッ！

第18話（後書き）

そんな訳で、作者なりの管理局に対しての独自設定を盛り込んだ、今回の話どうだったでしょうか？

万年人手不足の管理局…なのに誰でも使えるお手軽な兵力である『質量兵器』を積極的に禁止にするという事は、色々と深い事情があったのでは？と勝手に予測した上での解釈です。

そして遂に覚醒した ！

展開が早くてすみません……

そして嬉しいお知らせが一つ…

漸くstsをどんなストーリーにするか決まりましたッ！

A・s編までは、ある程度は原作準拠でいきましたけどstsでは、多くのオリキャラを登場させる必要上、原作準拠という訳にもいかないのです、少し手間取りました。

ある程度まで進んだら予告編をupするかもしれません。

ではまた次回に……

第19話

「仮面の正体、そして闇の暴走」

病院の屋上には、罰の悪い表情をした、なのはとフェイト、そしてヴィータとシャマル：ザフィーラがいた。

そう、今日は戦闘など起きる筈がない日だったのだ……今日はクリスマス。戦闘が起きてはいけない日。

しかし、実際には、そんな事情などお構いなしに事件は突発的に、起きてしまう。

「ちっ！…最後の最後になってまで邪魔しやがってッ！」

ヴィータは苛立つ。

後少し……後もう少しだったのだ！闇の書が完成するまで！

闇の書が完成すれば、はやても元気になる。シグナムも戻ってくる！

闇の書が完成した後は、シャマルの魔法で魔力を隠蔽して、またあの時の日常が戻ってくる筈だった。

大人しく潜んでいれば、何時かは管理局も、今代の主は闇の書の暴走で、人知れず死んだと思う筈だし、記憶が正しければ、管理局は人手不足……何時までも闇の書一つに戦力は割けない。

なのに、物事は……土壇場において、こうも容易く引っくり返る。

「……気合が入っている所に悪いが………終わりだ」

「なっ！……バインド!?」

バインドがヴィータ、シヤマル、ザフィーラを縛る。

空間が歪み姿を現す仮面の男。

手には何処からか取り出した闇の書。

「前はやられたけど……………今度はッ！」

フェイトが飛ぶ。

事情は未だに掴めないが、このまま座して待つわけのも行かない。しかしフェイトは、突然現れたもう一人の仮面の男に蹴り飛ばされた。

「二人……………そうかつ！貴方達は二人で一人を演じていたんですね！」

頭の中でパズルがカチツとはまったような感覚。

謎が解けた！……………異常なほど短時間での次元跳躍。そしてムラのある動き！

つまり彼等は変身魔法を使って、二人を一人だと偽装していたのだッ！

「今更気付いても遅い。

既に事は済んで……………んっ？」

闇の書の様子が変だ。

何かが中で蠢くような……………そんな、嫌な感触。

仮面の男は、少し書の様子を見ようとして

いきなり出てきた触手に絡まれた。

「ヴウグウ、こっこれはッ！そんなッ！闇の書が血を吸う！？そんな例は今まで……………」

「クッ！こんなものッ！」

絡まれている仮面の男が、触手を切断する。
しかし闇の書の暴走は止まらない。
触手は三人の守護騎士達に絡まる。

「なっ！どうして闇の書がアタシ達を！」

「ヴィータちゃん！……駄目！制御を受け付けないッ！」

「うおおおお！ここで……こんな所で倒れる訳にはッ！」

地面に紫色の魔方陣が現れた。

強烈な光が周辺を覆い……やがて光が止むと。

「はっ！はやてちゃん！……如何して！」

絶叫するシャル。しかし闇の書は微塵の容赦もなく、守護騎士達から魔力を吸収。

そして、ゆっくりと服だけを残して消えていった。

「シャル！ヴィータ！ザフィーラ！」

何が……何が如何なってるん！？」

「フッフ……私が説明……してあげるよ……」

「なっ！闇の書ッ！これは闇の書がやったんかッ！？」

「答えはNOだ。はやて……」

私は何の手出しもしていない………守護騎士達はね、君を救う為に、君に禁止された蒐集を行つていのだよ。……君の病は決して治らない不治の病………長くはないッ！その原因が闇の書が未完成のままだという事が、原因だと悟つた守護騎士は”君の命を守る”ために自らの命を差し出したのだよ。

そう、全ては君の為だ！

君の為に騎士共は、戦い……そして死んだのだよ。……素晴らしい忠誠心じゃあないか」

（ワタシノセイ？……私が……皆を……コロシタ？……）

「ウアアアアアアアアアアツアアアアアアツアツ」

響く！はやての絶叫がッ！

闇の書に吸収されていく、はやてッ！
もはや主を守る守護騎士はいない。……少女は一人、書の中に取り込まれていった。

次に姿を現したのは、はやてとは似ても似つかない銀髪の女性。目元に涙を溜めて……呟く。

「また……全てが終わってしまった。
いや……今回は文字通り全てが……か」

膨大な魔力が彼女の両腕に集まる。

集められた魔力は、やがて巨大な球体となっていく。

「我は闇の書、我が力は……」

膨大なエネルギー！色は邪悪なる黒！

黒い球体は、さながら全てを飲み込むブラックホールのように広が

っていく。

「主の願いの……その為に！」

彼女の瞳から、一筋の涙が……
零れ落ちた。

「プレッシャー」

「な……なんだ、これはッ!？」

ディオは感じた!プレッシャーを!

尻の穴にツララどころじゃあない。尻の穴にダイナマイトを突っ込まれたような気分!

汗が止まらない。

気付けば手まで震えていた。

「どうしたというのだ……私がッ!
らしくないぞ……」

今更、己がどんなものに恐怖する必要があるッ!
なのに何だ!この圧倒的なプレッシャーはッ!

「ディオさんッ!大変ですッ!」

空間から突然ディスプレイが映し出される。

画面の中で喋るエイミィは、かなり焦っている様子。

十中八九、緊急事態だろう。

「冷静になれ……何がどうしたというのだね？
そう焦っていても、伝わらないよ」

こういう時は自分まで焦っては、余計に相手を混乱させる。
じつくりと……諭すように、話を聞く。

「……………つまり闇の書が完成して、なのは達が戦闘中。
私にも救援に向かって欲しい。……という事でいいのかな？」

「はいッ！お願いします。」

二人も頑張ってるけど、少し押され気味なんですッ！

「いいだろうッ！直ぐに現場に向かうッ！
場所は何処だ」

デイオは準備を済ませると、なのは達のいる場所へと向かった。
心の中に一抹の不安を抱えたままで……

「祝福の風と災厄の風」

「はやてちゃん！」

「はやて！」

銀髪の女性……………はやてだった筈の女性に、なのはとフェイトは言う。

はやての名前を！

「闇に……染まれ」

「広域空間攻撃！」

「ディアボリック・エミッション」

巨大な魔力の塊が二人を襲う。

この威力ではフェイトのバリアでは防げないかもしれない。
なのはは直感的にそう判断して、フェイトの前でバリアを展開した。

「くうっ!!」

だがしかし、流石のなのはもロストログア闇の書が内包する魔力には及ばない。

次第になのはのBJにも傷がつき始めた。

急いで二人は、この場所から退避するとビルに隠れる。

「隠れたか」

そう言って少女は片手で涙を拭い

闇の書とフェイト&なのはが戦っている頃…

近くのビルの屋上では、二人の仮面の男が会話していた。

「急ぐぞ、余り時間もない」

「そうだな。アレを封印するのは迅速でなければならない…」

「デュランダルは準備は……」

「出来ている」

仮面の男の一人が、手から一枚のカードを取り出した。
その口振りからすると、それがデュランダルなのだろう。

「よし、なら………うぐッ!? これはバインド！
いや………ただのバインドじゃないッ！」

二人の仮面の男は、先程の守護騎士達のように拘束された。

「ストラグル・バインド、術者を捕らえ相手の魔力強化を失わせる
魔法」

二人の背後には、デバイスを構えたクロノ。
彼は淡々と言う。

「本来ならあまり使いどころのないが………こういう場面では、役
に立つ」

なおも静かにクロノは言う。

まるで哀しい者を見るかのように…

「ぐ、あうっ！」

「があああー！」

バインドの効果が現れる。
徐々に変化していく体。

「相手の変身魔法も、強制解除させるからね」

仮面が外れた。

「クロノ、お前っ！」

「こんな魔法、教えてなかったのに！」

「一人でも、精進を怠るなと教えたのは……君達だろ」
……アリア、ロツテ」

自分の師匠の名を、どこか寂しげに呟いた。

「ここは……何処や？」

静かな……そして孤独な世界。

永久の闇に覆われた世界に、はやてと……もう一人、銀髪の女性がいた。

「主。ここにはもう悲しい事は、ありません。
どうか、ゆつくりお休み下さい……」

「うん……」

「眠ってください。」

そうすれば、守護騎士達との平穏な暮らし……夢の世界で貴女は幸福に生きられます……」

私の限界ですが……せめて貴女の安らぐ場所だけは、お守りします」

「なあ……シグナムや…皆は…私のせいで死んでしまったん？」

「違います……騎士達は死んでなんていません。今も闇の書の中で生きています。」

ですから、愛しい騎士達と、幸せな日常を送って下さい……」

「せやけど……それは夢やッ！」

「はい、夢です。」

しかし私にも如何する事も出来ません。

奴は貪欲に私の中を吸収していきます……この吸収に抗う術は私にはありません」

「奴ってなんや!？」

闇の書の中になんかおるんか？」

「貴女は会話した事がある筈です。」

守護騎士全員が出払っている時に、話し掛けられたでしょう」

そういえば、そんな事があった。

あの時は闇の書自身が話しかけているのだと思っていたが、彼女の話では違うようだ。

「それって、一体全体どんな奴なんや！」

吸収って如何いうことなん!？」

「どの様な存在かという疑問には答えられません。
長い時を旅してきた私も、初めて知った生命体なのです。

……ですがご安心を主。私とて騎士。主の夢だけは守ります……」

「……正直に言うことや。

私には何を言われているのかmパーセントも分からへん。

だけど、これだけは言える！……今のマスターはこの私や！マスターの言う事は守らなあかん！

なんとなくやけど、分かる。外ではなのはちゃんやフェイトちゃん
が必死に戦ってる！私だけが夢見てる訳にはあかんッ！

名前をあげる。

もう闇の書どか、呪いの魔導書なんて言わせへん！この八神はやて
が言わせないッ！

私は管理者や。私が開放する。

夜天の主の名において、汝に新たな名前を贈る。強く支える者、
幸運の追い風、祝福のエール。リインフォース」

闇の書……いやリインフォースは涙する。

それは喜び。そう、消え行く運命の中で、最期に得られた救いだか
らこそ泣く。

「ありがとうございます……！。これは……主！今直ぐに守護
騎士プログラムの再生を！」

「ど、どうしたんや！？」

「話している暇はありませんッ！急いで下さい」

切羽詰った声に、はやては大人しく守護騎士プログラムの再生作業を行った。

恐らく既に、現実の世界では守護騎士達が復活しているだろう。

「これが……私の最期の仕事です……」

「な、何を言うとするん？リインフォースも一緒に……」

行こう。

そう言う事は出来なかった。

リインフォースが、はやてを押したのだ。

「もう……私に思い残す事はありません……」

「どうしてや！リインフォース！」

「主はやて。貴女の気持ちは嬉しい。

ですが、私にはこれが精一杯。何とか貴女と守護騎士プログラムを本体から切り離しました。

現実に戻ったなら直ぐに逃げて下さい！私も抑えてみますが、どれ程もつか……」

「リインフォースウウウウウウウウ！……」

はやてが、その世界で最後に見たもの。

それは微笑むリインフォースの姿だった。

「はやてちゃん！」

「主はやてッ！」

なのはとシグナムが同時に叫ぶ。

シグナムがはやてを受け止めると、気を失ったはやてがいた。どうやら闇の書とのリンクを切り離れたようだ。

「どうなっている！？……闇の書はッ……」

そこに嘗ての闇の書の面影はなかった。

例えるならば心臓……人間よりも遥かに巨大なサイズの心臓が、脈打っている。

「なんなの……これ……」

余りにグロテスクな光景に、なのはは少しだけ後ずさる。

「違うッ！これは心臓じゃない！闇の書に蓄えられたエネルギー！その中から必要な分だけを吸収しているッ！な、中に何がいるんだッ！」

異様な光景に絶句して、直ぐには行動に移せない。

そんな時、なのは達の良く知る人物が来た。

「ディオさんッ！」

「すまない遅れた。

しかしどんな状況だ……烈火の将が復活していて……あれは心臓？……いやそれにしても何だというのだ。この胸騒ぎはッ！これから発しているのか！？」

こんな気味の悪い物は、消してしまおう。
ディオが心臓を破壊しようとした時だった……
ブシューー、という音と共に飛び散る肉片。
中からは何かの……影。

「フフフフ、アハハハハハハハハハッ！ん〜んっ。やはり我が
肉体を持つて大気を感じるのは素晴らしいイ〜。……クツクツク、
これが生きる実感ッ！
クハハハハッハッハハ！……俺は……俺は地獄から……蘇ったぞオ
……ジヨジヨオオオオオオオオ！！！」

「ありえない……」

そう、これは本来あつてはならないこと。
黄金の輝きを放つ金髪。深紅よりも深い紅い目。
鋼のような肉体、そして帝王の威風。
D I Oは復活したッ！

第19話（後書き）

今回は何時にもまして展開が早いです……

という訳でお待ちかねのDIO復活です。

正に悪の大御所！ある意味では、ジョジョシリーズで最も作品に影響を与えたキャラクター！しかし、やっぱりラスボスは時間を操らないと駄目ですね……

第20話

「D I O」

「フム！……セツトアップだったか？」

D I Oがそう呟くと、ディオの着る物と同一のB Jが展開された。久しぶりの現世、肌から伝わる感触を、先ずは楽しむ。

そんな時、無粋にも横槍が入った。

自分のスタンドと全く同一のスタンド。世界がD I Oに突きを放っていた。ザ・ワールド

「どうした無粋じゃあないか。

何をそんなに怯えているんだ？…私と君は似たもの同士だろう？」

「黙れッ！……何故だッ！何故お前がいるッ！この世界にッ！」

「蘇ったのだよ。馬鹿な騎士共がお前のリンカーコアを奪ってくれたお陰でな。

最初は徐々に精神を破壊していくつもりだったが……正直驚いたぞ。まさか、このD I Oに抗うほどの精神力を持っているとは……

…だからこそ内側から奪うのは諦め、リンカーコアと一緒に貴様の肉体より抜けたのだが……クツクツクツ、結果は見ての通りだ。

不老不死！スタンドパワー！そして新たな力、魔法！フフ、このD I Oは既に、他のあらゆる生命体をぶつちぎりで超越したのだッ！………と言いたい所なのだが、若干の懸念事項がある」

D I Oの側に世界が現れる。ザ・ワールド

それだけじゃない。D I Oの体から溢れる魔力！闇の書のエネルギーを吸収したのだろっ。オーバーSは間違いなくある魔力！

「デイトさんッ！どういう事なんですか！あの人はいっ「黙れッ！」ッ！」

なのはは驚く。

怒鳴られた事にじゃない。

普段は冷静沈着で、どんな事が起きても動じなかったデイトが焦っている！その事が事態がトンでもない方向に進んでいるのだと実感させた。

「それでいい。

フフフ、世界に支配者は二人も要らないだろう。

本来ならばお前のような、精神力と情熱に溢れたスタンド使いを殺すのは惜しいのだが、クツクツクツ、貴様に対してはこれっぽっちも”惜しい”という感情はないッ！

あるのは、一つだけ………純粹なる殺意、それだけよ。

よく今日という日を刻んでおくといい………この年のクリスマス、それは貴様にとって特別な日になるッ！そう………命日という記念日になるッ！」

「それはこっちのセリフだ。D I O！

お前の葬儀には太陽を供えてやるッ！」

「「ザ・ワールド！」」

二人以外の全てが停止する。

二人の同一存在は同時に跳躍した。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄」

ディオの動きが止まるッ！

「クツクツクツ、五秒経過だ！」

そうか貴様の止められる時間は五秒か……

大したものじゃあないか。承太郎と同じ……パワーも精密性も悪くはないッ！

このDIOを除けば、間違いなく貴様は最強のスタンド使いだろう。しかし今回は相手が悪かった………下水道の鼠が腹を空かせたチータに遭遇するのと同じ程の相手の悪さだ。………如何なるスタンドといえど我が力の前では餓鬼同然よ………」

ディオは動きたい。

目の前の男に、頭が吹っ飛ぶ一撃を喰らわせたい。

しかし……

「動けまい。が……見えているだろう。」

これから貴様の頭を捻り潰すのに一秒も掛からん。だが、私にも恩を感じるといふ感情は少しはあるッ！」

ザ・ワールドがデイオの腹を貫いた。
そのままゆっくりと指を折る。

「このDIOが停止してられる時間の限界に挑戦という事だ。
フッフ、現在の時間は10秒……さて11秒経過だ………12
秒経過……」

時は動き出す。

空中で停止していたディオが、吹っ飛ばされた。

「な、何が起きたッ！………気付いてたら吹っ飛ばされていた？……
……そんな馬鹿なッ！」

ザフィーラは思わず口に出して叫ぶ。

しかしザフィーラだけじゃない。誰もが今起きた不可解な現象に恐怖している！

「ほう、お前達はあいつの仲間か？
面白い、その白い服と黒い服………私にも分かるッ！素晴らしい
生命エネルギーだ」

なのはとフェイトは、咄嗟にデバイスを構える。
だが駄目だ………どうしても逃げ出したいという感情に支配されて
しまう。

人間だけではない、他の生物にも自分を喰らう天敵に対して恐怖する。

理屈じゃない。本能が逃げると叫んでいた！

「それと………騎士ども。
今の私は実に機嫌が良い。……初めて女を抱いた時以上に機嫌が良い。
もしもお前達が尻尾振って逃げ出すというならば見逃してやるう。
どうした？……私がこんな好条件を出すなど珍しいぞ？………踊って喜
んだらどうだ？」

「ウルセエ！…アタシ等はな、はやてとリンクしてるから分かるんだよッ！」

「テメエの存在だけは許しちゃ駄目だッ！…そこで中にいるリインフォースを返して貰うからなッ！」

「ヴィータと同じだッ！」

「シャル！主を安全な場所へ…」

「分かったわ」

シャルが気絶しているはやてを、何処かへ飛ばす。
途中でリンディ艦長から念話があったので、アースラに送られたのだろう。

今まで黙っていたフェイトがシャルに話しかけた。

「その……シャルさん。」

「ディオさんの治療をお願いします」

「へっ？あの人の…ですか？」

今度はなのが言う。

「はい。私もフェイトちゃんも治癒魔法は苦手なんです。
それに……あの人の相手もしなくちゃだし…」

キツとDIOを睨む。

知らず知らずの内に、レイジングハートを強く握り締めた。

「……………分かったわ。シグナム。後は……………」

「ああ奴の相手は、我等に任せろ。
お前は後方支援を頼む」

「おい。何やら相談している所に悪いが……………上を見てみる」

思わずDIOの指差した方向に首を向けてしまう。
そこに居たのは…

「ディオさんッ！……………大丈夫なんですか！？」

「この程度では俺は死なない。
それともう一度だけ言ってやる……………邪魔だッ！」

ディオの世界がDIOに襲い掛かった。
DIOもスタンドを出して応戦、再び打ち合いが始まった。

「ぐうッ……………」

ディオの腕から血が出る。

DIOのザ・ワールドのパワーに負けているのだ。
だがこの場にいるのは二人だけじゃない。

「なにッ！」

DIOが気付いた時には、既に包囲網は完成していた。
左にはシグナム。
前にはフェイト。

上にはヴィータとなのは。

「スターライト・ブレイカー
極星光破壊！」

「プラズマザンバー・ブレイカー
絶死電豪刃」

「飛竜一閃！」

「ギガントシュラク
巨殺破天槌！」

四方向から、ほぼ同時に繰り出される一撃。

どれもがまともに喰らえば、一撃でノックダウンするようなパワー。
しかし届かない……………

「ザ・ワールド！……………時は止まった。

しかし素晴らしい戦闘センス！……………ほんのちょっとだけ肝を冷やしたぞ。

だが、これで邪魔者はいないッ……………んっ？」

ディオはDIOが時間を止めた瞬間、
逃げ出していた。

（不味い……………このままでは勝てないッ！一度策を練らなければ…
…接近すれば負けるッ）

それは確信だった！

スタンド能力は勿論、魔法でさえも闇の書のエネルギーを吸収した
DIOには及ばない。

誰よりもDIOの強さを知る彼は悟ってしまった。
自分とDIOが戦った場合、その勝率は……………

『0』！絶望的なまでに皆無！

可能性の無い賭けに出るほど、彼は馬鹿じゃない。
ここは恥を忍んで逃げるべき時だった！

だがDIOは既に、その行動を予想していた。

ディオの前に降り立ったDIO！

^{ザ・ワールド}世界がディオを突くッ！

防ぐのもまた世界！^{ザ・ワールド}腕をクロスさせて突きを防いだ。

「なああニイイイ！！」

両腕が割れていくッ！

崩壊は留まる事を知らないッ！

そのままディオの両腕は吹っ飛んだ。

それだけじゃない。

同時にディオの時間も停止した。

「フフッ！動けまい。

どうだ？見えている分余計に恐ろしいだろう。

このDIOですら自分の体を動かせないというのは、恐怖を感じた
からなア！

ところで……………今貴様の仲間は何をやっていると思っかね？」

「！」

「クツクツクツ、悟ったな！

自分がこれからどんな目に合うのかをッ！」

DIOはディオの頭を掴む。

そして投げたツ！四人の包囲網……その中心へと。

「……12秒経過……そして時は動き出す……」

避けられない。

ディオはそのまま四人の最大魔法をモロに喰らい、地面へと墜ちていった。

「や……やった！」

「間違いなく直撃した……あの男もただでは済まないだろう」

そう言い合う四人。

だが次の瞬間には、バインドで縛られていた。

「なっ！これは！？……バインドに拘束されているのに、私は何も気付かなかった！」

「協力感謝するよ、諸君！
お陰で手間が省けた」

「そんな……ディオさんじゃないッ！
ならさつき攻撃したのはッ！」

なのはは最悪の想像をしてしまう。
今の攻撃は間違いなく直撃。しかし攻撃を当てたDIOは此処にいる。

ならば攻撃を喰らったのは……
煙が晴れると、倒れている人影を目視出来た。

「「ディオさんッ！」」

なのはとフェイトが同時に叫んだ。
再び光景が変わる。ディオの前に立つDIO！
血塗れのディオの頭を掴むと、持ち上げた。

「……………殺して……………や……………る……………」

「ほう、まだ意識があるのか。

だが所詮はこのDIOの贗作！偽者は本物には勝てないのだ。
フェイク

…正直に言つとだッ！別に私は君を恨んではない。

このDIOと同じ姿形をしているのは、不愉快ではあるが、このDIOを蘇らせたのもお前な訳だ。

情けをかけてやろう。苦痛は与えん。それが礼儀というものだ」

DIOが頭を掴む手を強くする。

すると何ということだろうか。

ディオの体が薄れていく……………消滅ではない。

二つに分かれた肉体が再び一つになろうとしているのだ。

だがそれは融合を意味しない！言うなれば吸収！

勝者が敗者に行う一方的な略奪！

（駄目だ……………意識が……………こんな場所で……………こんな所で死ぬのか！俺はッ！……………嫌だ。俺はこんな場所で……………こんな所で死ぬのは御免だ……………なら……………せめて……………）

「DIOのスタンド能力は時間停止だ……………停止時間は12秒……………」

最期に念話でメッセージを送ると
ディオの体は消え去った。

第20話（後書き）

次回は闇の書の夢世界。

今まで全くの不明だったディオの憑依者がリインフォースと出会う！

第21話

「 夢想世界 」

「 はっ ! 」

目を開くと、大学のベンチに座っていた。

妙だ……俺はこんな所にいたはずじゃ……

そうだ！バイトはっ！

時間を見るともう五時。

間に合わないかもしれない。…全くバイトがある日に、ベンチで転寝するなんて、俺は一体何をしているんだッ！

バイト先に電話を掛ける。

今日は遅れると伝える為だ…しかし……

「何を言っているんだい、本庄君。

今日は休みだつて言っただじゃないか」

店長はそう答えた。

そう言われてみれば、そうだったような気がする……

「あ、はい。申し訳ありません。

少し寝惚けていたようです」

こちらを気遣ってくれる店長に、大丈夫だと言うと、電話を切った。

……だけど本当に如何してしまったのだろうか。

これじゃあ認知症の婆みたいだ。

俺はまだ二十歳なのに……

「仕方ない。…帰るか……」

今日は他に用も無い。
帰るとしよう……

「お帰りなさい、譲一くん。
早いわね。バイトはどうしたの？」

「ええ、僕が少し勘違いしていて……バイトは休みだったみたい
です。
叔母さんこそ、如何してこんな時間に？……今日から温泉旅行じゃ
なかったんですか？」

「あははははは。それが私の勘違いだったみたいで。温泉は明日
からだつてさ。
譲一くんと同じね」

適当に受け答えを済ませると、自分に与えられた部屋に戻る。
…何時まで経っても慣れない感覚。両親が死んで四年。
そろそろ慣れなければならぬのだが、一向に馴染む事は無い。

………暇だ。

暇過ぎる。…何か大事なことを忘れている………そんな気がする。
まるで奥歯に苦虫が詰まったような気分。
タイム。イズ・マネー、時は金なり。

そんな言葉が頭に浮かぶが、特に何かしたいとは思わなかった。

「………偶にはいいか……」

結局はその答えに行き着く。

普段は忙しいんだ。偶には何もせずボーっとするのも悪く無い。

そつだ！……最近部屋の片付けもしていないし、この機会に部屋の整理でもするか。

思い立ったが吉日。早速本棚を片付ける。

本棚に並ぶのは、文庫本、参考書、ジャンプ、と様々だ。

やはり滅茶苦茶に並んでいる……ハリー　ッターの隣に如何して辞書がある！

そんな本棚を見ていて、これからは定期的に整理しようと決意していると、本の隙間から一枚の写真が落ちた。

「これは……懐かしいな。

小学生の頃の写真だ」

写真には満面の笑みでピースサインをしている少年。

確かこれは運動会で一等をとった時の奴だ。

……自然に頬が緩む。

思えば小学生の低学年の時までだった、あそこまで純粋だったのはこの頃は両親も健在で、普通の……いや、少しだけ貧乏な家庭だった。

父と母は小さな喫茶店を経営していたが、景気は芳しくなかった。

それでも誕生日やクリスマスには、手作りのケーキと暖かい食事があったし、休日には父と一緒にキャッチボールもした。……やり始めた当初は、ノーコンで近所のおっさんの頭にストライクした事もあったっけな。

そつだ、一回だけイギリス旅行に行った事があった。……あれはそつだ…俺が高校に入った時だ。

両親は、俺が小学生の頃、いつかイギリスに旅行したい、そう言ったのを覚えていて、高校の入学祝いに俺を連れて行ってくれた。…

…始めて行く海外に、柄にもなく興奮したのを覚えている。

懐かしい……本当に今日は如何したんだろうか？

普段ならこれほどセンチメンタルな人間ではない筈なのに……今日はどうも調子が可笑しい。

「そつえば、墓参り……行っていなかったな……」

前に墓参りに行ってから、もう七ヶ月も経っている。

明日は予定もないし、久し振りに墓参りに行くのもいいだろう。

……そんな事を考えていたら既に夕食の時間になっていたようだ。
俺は急いで階段を下りていった。

翌日。俺は支度をして家を出た。

天気は晴れ。絶好の墓参り日和……というには少し暑すぎるが、まあいいだろう。

電車を乗り継いで三十分、少し長い坂を上がると霊園が見えた。

途中にあった酒屋でワインを買って霊園に入る。

お盆でも何でもないのに人は少ない……霊園で花を買って向かう、
両親の眠る場所へと。

両親の墓の前で、一つため息をつく。

「……………いるんだろ。…出て来い……」

「気付いていたのか……」

虚空から現れたのは銀髪の女性。

DIOではない……これが闇の書の官制人格とやらだろう。

「何時から気付いてたんだ。
ここが夢の世界だと……」

「最初は気付かなかった。

上手い具合に前後の記憶も曖昧だったし、現実だと感じられるリアリティーもあった。

切欠は……写真だよ。

それで昔を色々と思い出して……朝起きたら気付いてた」

「そうか……主といいお前といい、どうしても簡単に、夢だと気付いてしまうのだろうか。

…普通の人間なら夢だと知りつつも、都合の良い世界に夢だと気付く事を否定してしまうというのに」

「普通じゃあないからな。

それより如何して俺にこんな夢を見せた？

こんな事をしてお前にどんなメリットがある」

「メリットなぞない。ただDIOに取り込まれてしまった者に、せめて幸福な夢の中で眠って貰おうと思ったただけだ」

「それは妙だな……お前は闇の書の官制人格だ。

ならば闇の書の一部である守護騎士の一人を、ぶち殺した俺を憎むと思うのだが……

それとも守護騎士なぞ、単なる道具としてしか見ていないのか？」

「いや、私にも騎士達を愛おしく思う気持ちはある。だから烈火の将を殺したお前に対して、何も思う事がない訳でもない。……だが私達にそんな事を思う権利なんてない……私も騎士達も…大勢の人を不幸にして来たからな……」

悲しそうに闇の書の官制人格は呟く。
嘘は言っていないようだ。

「それで闇の書「リインフォースだ」…なに？
闇の書じゃなかったのか？」

「ああ、最後の最後で主が私の名前を付けてくれたのだ。
大事な主から賜った名前……無碍にする事など出来ない」

「そうか…ならリインフォース。
単刀直入に言おう、脱出方法は？」

「ない。…残念だが仕方の無い。
これが本来の闇の書なら強力な魔法でも使えば脱出できるが、ここ
は書の中ではなく、もっと正確に言うならばDIOの体内。
私もお前もこうしているが、見えていないだけで見えないナニカに
縛られている。……今でこそこうして会話も出来るが、やがて完
全にDIOの一部になるだろう。そう一週間もすれば完璧に！」

「役に立たない女だ。
他に方法は……いや、どうせお前は方法なんてないと言うから無
駄か」

此処は夢の世界……リインフォースはそう言った。
ならばザ・ワールドは出せるのか？…いや出すッ！

「出るッ！世界！」
ザ・ワールド

俺の側に、何時もと変わらぬスタンドが出現した。

……それと同時に今まで見えなかった物が視えてくる。

それは触手！それが俺とリインフォースに何本も絡み付いているッ！

「この触手が邪魔なのか……………やれッ！」

ザ・ワールド
世界が触手を引っ張る。

しかし触手はビクともしない……………

「おいリインフォース。暇そうにしているなら手伝え」

「無茶を言うな…私とて縛られているんだ。

自分に絡みつく触手を何とかしないで、他人の触手を如何にかする事は出来ない」

役立たずがッ！

だがこの程度で諦めはしないッ！

一度やっても駄目ならば何度だってやるまでだ。

三回

四回

五回

六回

七回

八回

九回

十回

・

・

・

・

百回

・ ・ ・ ・ ・
千回

触手はビクともしない。……流石に疲れた。
此処までやつても効果無しでは、他の方法を考えた方が得策だ。
何か手はないだろうか？

「如何して無意味な事をする？

此処から出られないのは理解出来ただろう。
もう疲れた筈だ……大人しく休むといい。ここはお前にとって当
たり前だった世界。

理不尽な事故により異世界へと送られたりはしない……そう、普通
の世界だ。

なのに何故お前は、そんな事をするんだ……この世界ならば未来
永劫苦しむ事もない。お前が望むなら両親も戻ってくる。
なのに何故だ？何故お前は苦しい選択を選ぶんだ！？」

リインフォースが譲一に問いかけた。

それは疑問！無理なのだ、この世界から脱出するのは。
なのに、如何してこの男は諦めないのだろうか？

「……仕方ない。休憩がてら、ちよいとだけ俺の事を話してやる。
俺は昔から一番が好きだった。運動会でも勉強でも自分が一番じゃ
なければ気が済まなかった！

だから日本の頂点である総理大臣に憧れたし、実際に人生の夢にもなったッ！

それが変わったのは中三の頃……海外旅行でイギリスに行った時だ。

初めて行く海外で、柄にもなくはしゃいでいた俺は、旅行最終日にある者を見つけた。

今となつちや記憶も曖昧だが、その少女は大体俺と同じ年程で靴屋の前で靴磨きをしていた。

興味を持った俺は、聞いてみた。何故そんな仕事をしているんだ。とね」

「……………」

「聞く所によると、その少女は一人の独裁者に支配される国の生まれだそうで、父は教師だったらしい。

しかしだ。その国の独裁者は、民草が知恵を付けて自分に反逆する事を恐れて、民衆に勉強をさせないようにした………だけど、それに反抗して教師を続ける人間も多く、少女の父もその一人だったらしい。

………それである日、軍人が少女の家にやって来て、両親と兄を撃ち殺して、唯一母親の機転で生き残った少女は、僅かな伝手でイギリスに来て、今では靴磨き………そんな感じの話だった」

「……………そうか、……いつの時代もそういう悲劇は変わらんのだな………」

リインフォースが経験してきた時代。

戦乱の時代には、よくあった事だ………孤児の数は八百屋の野菜並みに居たし、餓死者も多かった。

「まあ、そんな訳で少女の話は終わったんだが、それには続きがある…」

一般的な人間は、そんな話を聞くと、可哀想だと思うらしいが、俺はそんな心境には至らなかった。

寧ろ驚愕だ！……その時ほど自分が矮小な存在に思えた事はないッ！

…俺は日本という小さな視野に囚われて、全体を見ていなかった…やはり日本一ビッケな男じゃなく世界一の男に成らねばな…」

「はア？」

予想外の言葉にリインフォースは、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「何を呆けている？」

日本という国だけに居たせいなのか、俺は世界的な視野を全く持っていないかった！

先ずは総理大臣！そして日本を世界一ビッケな国にするッ！

そしてその後は世界制覇だッ！」

「そんな無茶苦茶な……」

まるで子供の絵空事。

しかし目の前の男は、それを平然と言つてのける。

微塵も恥じた様子もなく、堂々と……

「そつだ荒唐無稽かつ無茶苦茶な話だ。

誰が聞いても笑うか馬鹿にするだろう。

だが俺は本気だッ！……流石に学生的身では、世界一は遠くて形さえも見えない。

しかし野望の第一歩！政治家になるというのは、そう遠い未来ではないッ！

なんなら、クーデターを起こしても良い訳だ。

政治家になれば総理大臣への道も見えてくるだろう……そして総理大臣になれば世界制覇への道も見えてくる」

「…………それは…凄いが…………幾らなんでも……………」

「無理…か。

ま、そうだろうな。世界はそう簡単に出来ていない。

現実的な視野で考えるなら、精々が総理大臣が関の山だろう。

だが可能性は0じゃあない。いや、もしかしたら0なのかもしれないが、今は0かどうか分からない。

諦めれば可能性は0だが、諦めなければ刹那の可能性は残るッ！

そして…だ。この世界では世界制覇どころか日本一にすらなれない

…………これは不味い。

ついでに言えばDIO！

俺は借りは良いものも悪いものもキッチリ返す主義だ。

このまま泣き寝入りは出来ない」

彼はそのままリインフォースの腕を引っ張る。

「それに…だ。話している間に名案が思いついたぞ」

「め、名案？…………何だそれは？」

「お前は融合型デバイスとかだったな……………」

「そ、そうだが…………まさかッ！」

「そのまさかだ。

手っ取り早く強くなるには、昔からアイテムに頼るしかないからな」

「いや…しかしだな…」

確かに無理ではない。

今のリインフォースはDIOの一部。ならば目の前の男となら……
ユニゾンする事は可能だろう。

最も確率の話であって、実際にユニゾンするとなると別問題なのだが…

「はつきり言つてやる。

俺には今お前が必要だ。よって貴様は今からこの俺の物となる。

反論は受け付けんッ！これは強制だ」

変わる！

黒髪黒目の日本人だった彼が、変わっていく。

そう、金髪で赤目の男へと……

「それに…だ。

どんな不満がある？俺は本物すらも超越し、この世界を統べる帝王となる男。

お前は俺の配下一号だッ！」

胸の鼓動が早くなるのをリインフォースは感じた！

暴論である筈のそれが、何故か心地良い。

リインフォースは気付いてはいないが、彼女の女としての感情は、この男の圧倒的な存在感に、心奪われていた。

「さて答えを聞こうか？」

答え？…そんなもの分かりきっている！

「いいだろう。私はお前の物になる。

だが、一つだけ約束してくれ……………主はやては不幸にしないと……………」

「クツクツクツ、あの騎士共といいお前といい、大した忠誠心だ。

泣けるじゃあないか、OK！……………私はその主とやらを、手に掛けないし、出来る限り不幸にはしない。

このディオ、誓おうではないか！」

「そうか……………なら……………」

他に言うことは無い。

主には申し訳ないと思うが、もはやこの溢れる感情を止める事は出来ない。

『魔力順応率正常』

『肉体融合適正100%』

『ユニゾン対象ディオの精神をリインフォースとリンク』

『システムオールクリア』

「「ユニゾン・イン！！」」

二人の声が重なる。

瞬間 眩い光！

「クツクツクツ……………この体内より溢れる力！馴染む！馴染むぞオ！」

巨大な閃光！

それはこの夢想世界に巨大な穴を開けた。

もはや彼を遮る物は存在しないッ！

一つの肉体に二つの意思を宿した男は、そのまま穴に飛び込んだ！

〓 〓 絶望の宴 〓 〓

ディオが取り込まれた！

この事実、場にいる全ての人間を硬直させた。

「クツクツクツ、我が障害が居なくなった所で……………フム！ここで新たな力を試してみようか！」

DIOはゆつくりと五人を見る。

なのはとフェイトは混乱気味、守護騎士の三人は、親の敵を見るような目で睨み付けていた。

「……………では使ってみよう……………フムフム……………」

咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫け！閃光！スターライト・ブレイカー！」

五人は一斉に散った。

高密度の砲撃……………まともに喰らえばノックダウンは間違いない。

「良い動きだ。

だがそのような動きなど無駄！このDIOは一瞬にして、この世全

ての存在を超越したのだッ！」

余裕！DIOは依然として余裕！
それもそうだろう。

DIOにとって、この戦いは、魔法の練習に過ぎない。
ただ倒すだけならば時を止めれば五秒で終わる。だがそれでは面白くない。

折角、自分にとっての天敵と成り得る者を殺したのだ。魔法という力を存分に堪能しなければ勿体無い。

「どうした？逃げていてばかりでは、このDIOは倒せんぞ。
最も！貴様等がどう足掻こうと意味は無いがッ！」

DIOが手を向けて、砲撃を放つ準備をする。

その時、前後同時にフェイトとシグナムが現れた！

二人が転移魔法を使った様子はなかった。

「…ほう、一人忘れていたなッ！
守護騎士は”四人”だったなッ！」

そう、転移魔法を使ったのはシャマル。

他人を、それも離れた位置にいる者を転移させるのは、かなりの高難度だが、それを可能にしてこそヴォルケンリッターが一人！

「愚か者がッ！その程度の動き！我が世界^{ザ・ワールド}の能力を使うまでもないッ！

止まって見えるぞッ！」

二人に蹴りを入れて吹っ飛ばす。

蹴られた二人は、まるで猫に見付かった鼠のように、一目散に逃走

した。

恐らくはD I Oの時間停止を警戒したのだろう。

そろそろ巨大なものを撃とう。

そう思った時だった……

「悠久なる凍土　凍てつく棺のうちにて　永遠の眠りを与えよ　凍てつけ！

エターナル・コフィン
永久氷葬送！」

「なにイイイイイイ！！」

そう全ては、この時までの布石！

実の所、クロノはD I Oが取り込まれた数瞬後には現場に到着していた。

今まで姿を現さなかったのは、D I Oに居ない筈の人物からの奇襲を喰らわせるため！

ディオの最後の念話でD I Oが時間停止能力を持っているのは分かった。

まともに戦えば勝てる筈の無い存在……それがD I Oだった。

なら勝つには、一瞬の隙を突いて、避けられない一撃必殺の攻撃を喰らわせるしかないッ！

シヤマルに転移を指示したのもフェイトとシグナムに囿役を任せたのもクロノ！

そうD I Oは完全にチェックメイトに嵌っていたッ！

「や…やったか？」

「いや、やっていないよ」

「！」

後ろを振り向く。

そこには無傷のDIO！

「馬鹿な！あの一瞬で時を止めたのか！？」

「フッフッフ、惜しかったなあ、クロノ・ハラウン。

そろそろお前が、奇襲を仕掛ける頃だと思っていたぞ。

ご褒美に種明かしをしてやろう！……私はお前が攻撃する前に時を止めていたのだ！

後は単純！このDIOの幻影を設置する、それだけよ。

正直に言うとな^{フェイク}贋作の記憶がなかったなら危なかったぞ。

ジョースター程ではないが、お前は生きているには危険な存在のようだ……

お前は手加減せずに殺すでしょう」

終わった！

この距離では逃げる事は出来ない。時を止められたならば、どんな達人でも動くことは出来ない。

助けも…無駄だ……。

その時

DIOの中から

何かが

飛び出した

「URYYYYYYYYY！！！！！！」

雄叫び！それは雄叫び！

それと同時に産声でもあるッ！

「馬鹿な……貴様は確かに取り込んだはず……
何故生きている、偽者^{フェイク}！」

「……………違う……」

「なに？」

男はゆっくりと顔を上げる。

そこには威風堂々とした帝王の威厳が備わっていた。

「俺が……俺が新たなる……DIOだッ！」

第21話（後書き）

とうとう明らかになりました主人公！

主人公の名前が適當過ぎたような気もしますが…まあこの話一回だけで終わる名前なので、気にしないで下さい。最初は　　でいいやと思っていたんですが、それじゃあどこの夢小説だ！という事で、適當に名づけてみました。

A・S編の残り一話。

最終決戦とエピソードを残るのみとなりました。

なので恒例？のsts編予告です。

ネタバレが嫌いな方は見ないで下さい。

新暦0073

S級次元犯罪者ジェイル・スカリエッティを指導者として九つの管理世界が離反。

反管理局連合アープ『Anti Administrative Bureau Union』を名乗り

時空管理局に対して宣戦布告した。

次元世界の誰もが、圧倒的な魔導師保有量を誇る管理局の勝利を疑わなかったが、アープ軍は、近年発見されるようになった、謎の多いレアスキル能力者、通称スタンド使い、そして人型機械兵器ヒュ

ーマンガジェット（通称ヒュート）を实践投入
ヒュートの物量、そしてスタンド使いのトリッキーな戦術に、戦局
は大方の予想を外れ長期化の流れを見せていた。

そして時代は新暦0075

膠着した戦局を打破する為に、一つの特殊部隊が新設される。
『ヘルシング』それが新部隊の名称だった。

ヴァンパイア・オブ・リリカル
（戦争潮流）

次元世界に堕ちた二人の吸血鬼

因縁に決着をつける時が来たッ！

第22話

二人の囚人が鉄格子の窓から外を眺めたとき。

一人は泥を見た。もう一人も泥を見た。

一人は泥の中に石を見つけた。

一人は泥の中に花を見つけた。

「悪鬼の最期」

「新たな… D I O ! だと……」

「フン！ 自惚れたな偽者^{フェイク}！ …」

認めよう。お前の頭部を破壊せずに取り込んだのは、間違いだった。この D I O 認めようじゃあないか。

よって！ 貴様は脳組織を破壊して殺すと予告しよう！ 」

D I O は油断を認めた。

言葉通り今度は、完全に破壊するつもりで襲い掛かるだろう。

（どうする？ … 取り合えず出て来たが、依然として俺が D I O に勝てる確率は低いッ！

魔法の面では互角になったが……それだけだ……。正攻法では勝てんッ！ …

奇策に頼るしかなさそうだ……しかしだ！ 並大抵の奇策じゃ D I O

には通用しない！

なにか……………そうこれは命懸けの奇策だッ！…失敗すれば…………アウ
ト…………）

ディオは無意識の内に悟ってしまった。

この勝負は……………長引くことは無い。

DIOは遊び心を全て捨てて、最初から自分を抹殺する気で来るだろう。

つまりDIOはほぼ確実に、時を止めてくる。

12秒の時を静止する事は、ディオには不可能だ！

停止された時間の中では、フルに動けるのはDIO！五秒だけ動けるのはディオ！

他のクロノ達は静止時間では、そこいらの石ころと変わらない、無力な存在と化す。

スペックではDIOが上！…………

古来より、戦力的には下の軍勢が、格上の相手を打ち破る例は多い。
中国では赤壁の戦い

日本では桶狭間の合戦の例が分かり易いだろうか。

どちらも十倍近い兵力を誇る相手を、策を用いて打ち破っている。

だが、奇策が成功するには、必ず理由があるッ！

赤壁の戦いにおいては、北方出身の兵が多かった曹操軍は、水上船が不得手であり、また司令官である周瑜が、水軍を操らせては並ぶ者なしの英傑だったからでもある。

だが二人は違う！

ディオの頭脳はDIOとそう変わらない……………つまりディオが考え付く事はDIOも考え付くのであり、その逆もまた然りだ。……………生半可な奇策ではDIOには通用しない。

もっとクレイジーな、馬鹿みたいな奇策が必要なのだッ！

（大丈夫か……………凄い汗だぞ……………）

ユニゾンしているリインフォースがディオに語りかけた。
感覚や思考を共有している二人は、当然ながらディオがこれから行う策の内容も知っている。

それが、どれだけ危険に満ちた物なのかも……

（…………正直に言うのだ。…………この土壇場において、このディオは『死ぬ覚悟』をしていないッ！
『死を覚悟』するとは、逆に言えば『死ぬ可能性』を認めるという事だ！

そんな負け犬の糞に匹敵する思考など…………勝利者たらしとするディオにとつては不要よ！

…………あらゆる手段を使っても勝つ！……………そうだ…このディオは『生きる』事しか考えていないッ！
クックククッ……………俺は生きるぞ！リインフォース！）

（その意気だ。

なんとたつてお前は、次元世界の支配者になる男なのだろう？」

（…当然だッ！……………勝つのは俺だッ！）

ゆつくりと……………ゆつくりと構える。

勝負は一度！……………これを喰らわせなければ勝機はないッ！

例えディオの記憶を手に入れたDIOだとしても、あれだけは予測不能な筈だ。

何故ならば理屈も何も無い発想なのだから……………

DIOが構える。

そこに油断慢心は一切無い！

（何故だ！……………何故こうも奴に忌々しさと同時に、懐かしさを感じるッ！）

最初は自分と全く同じ顔に見えた男が、今では全くの別人に見える。ぶれる……………自分と同じ顔をしている筈の男の姿が……………何故！ジョナサン・ジョースターと被るのだ！

そこまで考えた所で……………DIOは余計な思考を止めた。
今日この場で偽者を殺す！……………
これがDIO自身が真の支配者となる為には、避けて通れない道だ。
必ず殺さなければならない。

「……………」

「……………」

互いに無言。

いや、二人だけじゃない。

この場を見守る誰もが、言葉を発する事が出来ない。
まるで、二人の周囲にだけ音という概念が消え去ったように静かだ。
その時だ。恐らくは救援に駆けつけたであろうアースラの武装隊の面々、そしてユーノとアルフが転移して来た。……………同時にそれが合図となったのだろう。相対するガンマンの間に、一枚のコインが落ちるのと同じ効果を発揮した！

「「正真正銘、最後の数十秒だ、お前は殺す！」「」

「「世界！時よ止まれッ！
ザ・ワールド

W R Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y

ッ！」「」

D I Oとディオの距離は離れている。

つまり移動時間だけで一秒は消費出来ると言う事だ。

D I Oがディオの前に迫る。

（１秒経過）

D I Oの^{ザ・ワールド}世界の拳が迫る。

受けるしかない、このまま動かなければ頭に砲弾並みの一撃が直撃するッ！

そうなればD E A D or D E A Dだ。

（ギアナ高地を思い出せ……

スタンドと己を重ね合わせる………信じる！

そうだ、このディオはスタンドになった！

感じる！これぞ一体感同感！）

あれほど速く感じたD I Oの拳がスローで見える。

吸血鬼は肉体を自由に操る。

ディオは、意識的に体内や脳でアドレナリンやらなんやらが大量分泌させる事で

一瞬を何秒にも何十秒にも感じさせていた………

「無駄ア ツ！」

拳が迫るが焦る必要はない。

冷静に物事を見つめれば、今まで見えなかった物が視えて来る。

まだだ………時間は一瞬たりとも無駄には出来ない。

もっとギリギリまで停止していなければならぬ………

まだだ………チャンスはいま！

体を独楽のように回転。

狙うは一つッ！DIOの頭部！

「回転肘打ち
ソーク・クラブ！」

渾身の肘打ち！

しかし恐るべきはDIO！

一瞬の内に空いた左手で頭を庇い致命傷を避けた！

ダメージを与えてたが頭部の破壊にまでは至らないッ！

「ほう~~~~~」

それがムエタイとかいうやつか。

中々良い威力だ。少し痺れたぞ。

所見故に先手を許したが……………もはや通用せんわ！」

ディオにとっての一秒

DIOにとっての二秒が経過した。

ディオの周囲全体に血の刃が出現した。

刃は全てディオの頭部をロックオンしている……

動かざるを得ない。

（慎重だッ！DIO！

こうやって少しずつ、確実に俺の時間を減らしていく気だ！

最後に動けなくなった俺の頭を…プチッと潰して終わりって所か…）

ディオの世界が血の刃を全て叩き落す。

これでディオにとっての三秒が経過してしまう。

しかしDIOにはまだ七秒の余裕がある。

ディオに許された時間は残り二秒！

「もう後が無いなア〜！」

間髪入れずにチエックメイトにまで追い込んでやるッ！

デス・ガラミティ・ヘル・ブレイカー
魔地殺絶砲！」

収束型の砲撃！

殺傷設定で放たれたスターライトブレイカーをも上回る砲撃は、デ
イオを殺すにはお釣がくる威力！
これを防ぐには同威力の魔法によつての相殺しかないッ！

デス・ガラミティ・ヘブン・ブレイカー
「チイイ！……魔天殺絶砲！！！」

拮抗する砲撃と砲撃。

周囲にまで衝撃を飛ばす……

ビリビリビリビリ

余りにも凄い……衝撃が走り……雲散したッ！

「う……………」

そして五秒経過。

デイオの静止時間は終了したッ！

逆にDIOにはまだあるッ！六秒の時間がッ！

「クッククッククツ、終わりだな。

もはやお前には、このDIOがお前に下す処刑を見るしかないッ！
養豚場の豚のように、食われる自分の運命サダメに震える事すら出来ない！

我が運命に現れた最後の天敵よ。さらばだ！」

（今だッ！）

……流石だ、D I O！

馬鹿は何度も同じ過ちを繰り返す……その点から言えばD I O！あいつは馬鹿じゃあない。

例えば敗北したとしても、そこから物事を吸収している。

最後の二秒以外は、保険の為に一秒づつ0・1秒ケチっていたから、俺にはまだ0・5秒動くことが出来る。

これが本当の本当に、最後の時間！

そうだ、D I Oの懸念は正しい。念には念を入れて俺から離れたのも正解だ。

あの距離からの砲撃を防ぎつつお前に攻撃を喰らわせる手段は、俺にはない。いや……あの砲撃を防ぐ手段すらないッ！……………これは負けたな……………）

「なにイイイイイツッ！！」

D I Oの体をバインドが縛る。

それも一つじゃあない。

二つ、三つ、四つ、五つ、六つ……………数え切れない程のバインドがD I Oを拘束したッ！

（……………お前がだ…D I O！）

く回想く

（ディオ！如何して出て来れたんだとか、言いたい事は多々あるッ！だがあの男は何なんだ？……君と丸つきり同一じゃないか！それに時間を止めるだって！？）

念話でクロノがディオに言った。
こんな話をしている場合じゃない事は、頭では理解していたが、そろそろ我慢の限界だった。

（あの男は私の……分身みたいなものだ。本来なら出てくる筈の無いだが、闇の書の影響で肉体を持ったらしい……いや、そんな話をしている場合じゃあない。単刀直入に言おう！
クロノだけじゃない。なのはにフェイト、それに守護騎士……全員の力を借りたいッ！）

（なに！？……われ等の力もか！）

シグナムが言う。

だがディオは何でもないように続けた。

（そうだ。恐らく次にDIOが時間を止めた時、全ての決着が着くだろう。

静止時間で動けるのは、同じように時を止める能力を持つ私だけだ）

（分かりました！それで作戦は？）

（ちょっと、なのは。一応みんなの意見も聞かないと……

私も賛成です……）

（…………それは信用出来るのか？……
君は僕達に自分の能力を隠していた…………それは僕等を信用せず騙していた、という事じゃないか？
そんな君が、本当の事を言う保障があるのか？）

（そんなクロノ君！）

（アタシも反対だ！……こいつは信用出来ない……）

（ヴィータちゃんも！）

なのはは憤慨するが仕方ない事だ。

クロノにしてみればディオはずっと自分達を騙っていた訳であり、ヴィータにしたら大事な仲間を笑いながら砕いた相手……信用しろというのが無理だ。

（鉄槌の騎士……私からも頼む。
ディオの事を信じてくれないか？）

（なっ！……リインフォース！まさかこいつとユニゾンしてるのか！
？）

（そうだ……今私はディオとユニゾンしている。
そして主を救うためにもディオに協力してくれ！）

（だけどな……）

ヴィータはディオを見た。

やはり何処か信用出来ない。

（……君達の言う事は理解出来る。

私の事が信じられないのも当然だろう……。

だが私には皆の協力が必要だッ！

信用を得るのは難しい事も理解している……だから今だけで良い。
私は君達を信じる！……だから君達も私を信じてくれないか？）

(！)

ディオは間違いなくそう言った。
信用するとは命を預けるということ！ディオは自ら命を全員に預けたのだッ！

(分かったよ……そこまで言われちゃアタシだって騎士だ。
お前の事を信用してやるよ……)

(クロノ君……)

おずおずと、なのはがクロノの表情を伺う。

(……勘違いしてるみたいだが、別に僕は反対とは言っていない。
ディオが今まで嘘を付いていたのが腹立たしかったただけ……)

(ありがとう！クロノ君って優しいんだね！)

(な、何を言ってるんだ、なのは！)

(……君達の協力感謝する……
それとクロノ。そろそろ私の策を言ってもいいかね？)

(あ、はい……)

ディオの考えた作戦、それは単純だった。
DIOは世界を使うと周囲の警戒が疎かになる。
それは当然の事だ。何故なら静止時間にはディオを除いて、誰も動くことが出来ないのだから。

しかし、ディオに対しては、その分異常なほど警戒している。
一度、空条承太郎に負けた事は無関係じゃないだろう。

逆に言えばだ……ディオを除いた者からの攻撃は、異様なほど無警戒だという事だ。

（そこで……だ。

君達はバインドを出す寸前で止めていて欲しい。

後は私が、君達のデバイスにハーミット・パープル隠者の紫で干渉して発動させる）

（そういう事なら私からも提案があります！）

（か、艦長！？）

突然のリンディの通信に、クロノが素っ頓狂な声をあげた。

（あの人を抑えるのに、多くて困るという事はないでしょう。

直ぐに武装隊全員を転移させます。それとそこにユーノさんとアルフさんも向かいます）

（…僕だってバインドには自信があるんです！任せてくださいッ！）

（あのチンチクリンに家のフェイトをやらせる訳にはいかないからねえ！）

全員に同じ事をするという一体感が芽生える。

そつ、相手はたった一人……それに比べてこちらには多くの仲間がいるッ！

負ける筈が無い！

（どっちにしるだ。

この作戦のキーが全てディオさんが握っている！
頼みましたよ！

（フフフフフ、任せてくれクロノ君。
華々しい勝利を魅せてあげよう
以上！交信終了！）

「どうだDIO！
お前の頭なら理解出来るだろう？
この俺が、どんな策を使ったかが……」

言われずとも理解していた。
だが、理解していても動けない。
一つや二つなら楽勝で破壊出来た。
しかし自分を縛るバインドの数は一つや二つではない。
流石に破壊するにしても、結構な時間が掛かる。

「ハア……ハアハア……」
「……………」

ディオとDIOが互いを睨む。
既に時は動き出しているのに、そうでない錯覚すら抱く。

「時よ止まれ！ザ・ワ「無駄ア！」…ブクア……」

時を止めようとしたDIOの顔面に思いっきりパンチをくれてやる。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つまりはTHE ENDだ！」

「GUHAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

物理法則に従いDIOの体は真っ直ぐに、鏡の中に吸い込まれていく。

辿り着いた場所はディオの言った通りハワイ！

「そ…そんな馬鹿な！

おお…おっ！

俺の体がッ！俺の体が消えていくウ！

WOOOOOOOORRRRRREEYYYYYYYY
YY！

何世紀も未来へ！永久へ！…生きる筈のこのDIOが！

このDIOがアアアアアアアアアア~~~~~ッ！」

DIOの体が消滅していく。

太陽の光で！

「…………こちらエイミィ！…………完全消滅！…………生体反応ありません！

……という訳で……戦闘終了しました！……お疲れ様、現場のみんな！」

「そうか…………」

「これで…………」

「ああ、全て終わった」

「エピソード」

「もう行っちゃうんですか？」

「ああ……月村家には色々世話になったが……今日でお別れだ」
「すずかはディオの見送りに着ていた。」

色々騒がしかったクリスマスから既に三ヶ月。
ディオはクロノの伝手でミッドに行くことになった。

……だがそれは、すずかにとって悲しい別れを告げる事でもあった。

「また会えますか……？」

「おいおい、確かに私はミッドに行くが、別に帰ってこない訳じゃあない。」

翠屋のシュークリームは好物だからね」

その言葉は嘘じゃない。

確かにミッドに行けば忙しくなるだろうが、一年に何日かぐらいは帰ってくる余裕がある筈だ。

「その……最後に一つ良いですか？」

「なんだね？君にも色々世話になったからね。
私に出来ることなら協力するが……」

すずかは黙ってしまふ。

心臓の鼓動は嘗てないほど高鳴っていた。

ここでも言わなければ絶対に後悔するッ！
だから言った。

「私は……貴方の事が好きですッ！」

「なに？」

意外といえば意外な言葉に、ディオは少しだけ反応した。
そして微笑みを浮かべた。

「フッフ、気持ちは嬉しいが、私は君を恋の対象としては見ていない。

これでも女性の好みには普通のつもりでね……」

「それは…知っています。

私も今の私でディオさんを振り向かせられるとは思っていません！
だから……私が大人になったら会いに行きますッ！」

月村すずか一世一代の告白！

別にディオに誘拐犯から助けられたから好きになったんじゃない。
他に特別な事があつたんじゃない。

ただ、気付いたら好きになっていたのだ。

「そうか……では期待して待つているとしよう。
では今度こそサヨナラだ」

そのままディオは屋敷を出て行く。
すずかは、ディオの姿が見えなくなるまで屋敷の前で立ち続けた。

ディオが歩いていくと、一人の女性が待っていた。
銀髪赤目といったら、ディオの記憶で該当する人物は一人。

「リインフォースか……行くぞ」

「ああ」

軽いやり取りを済ませると海鳴臨海公園に向かう。
クロノによると、そこに迎えが来るそうだ。

「ディオ。これからどうするんだ？」

「クツクツクツ、先ずは管理局で地位を得る！
その後はまだ分からんツ！まだ管理局がどの様なものなのかも理解
出来てはいないからな」

「そうか、それで最終目標は？」

「決まっている！世界征服だツ！」

上空には禍々しい光を放つ満月が
爛々と光っていた。

ヴァンパイア・オブ・リリカル
過去からの遺産

第2部完！

第22話（後書き）

第二部完結！

どうだったでしょうか？

もしも少しでも楽しめて頂けたなら幸いです。

実を言うとディオvsDIOの第二ラウンドは所要時間僅か一分以下という、本作最短の勝負でした（笑）

ですが今思い起こせばディオの戦績は（雑魚を除く）

プレシア 勝利

シグナム 敗北

シグナム 勝利

DIO 敗北

となる訳です。

最後の第二ラウンドは一对一では間違いなく負けていたのでカウントしないとする………なんと勝利と敗北の数が同じという事に！？

時間があるので少し第三部のネタバレをすると……

ぶっちゃけ第三部は戦争の話です。

正直原作の影も形もありません………

原作準拠だと多くのスタンド使いを登場させられないというのも一つの理由なのですが、本当の理由はただ作者が原作準拠のストーリーを書いてても面白くないからです。いや、わざわざアニメを見直してセリフを描くのが面倒で……それに書く速度も遅くなるんですよね。

最後に冒頭の詩！

分からない人は、ジョジョ好きならいいと思いますが、ジョジョ本編の冒頭に出てきた詩のパクリです……

その解釈について語りはしません。読者様のご自由に解釈して下さい。

では次回に会いましょう！

To Be Continued
／ \
<

D I Oの物語？（前書き）

第三部スタート！……………前の【番外部】

この番外部ではD I O本人が主人公となります。

DIOの物語？

「最後に善意で教えておくと、あの鏡は南国の楽園ハワイに通じている」

「は、ハワイだと!？」

「現在の日本時間は午前0時ジャスト！ハワイと日本の時差は約19時間！

つまりはTHE ENDだ！」

「GUHAAAAA!!!」

DIOの体が吹っ飛ばされる。

しかしDIOは諦めない……何か逃れる手段は無いかと探す！
そこで問題だ。このボロボロの体でどうやって逃れるか？

三択、一つだけ選びなさい

最強のDIOは突如退却のアイディアが浮かぶ？

仲間が来て助けてくれる

？無駄だ。現実是非常である

（このDIOが選びたいのは？だが、私には仲間などいない。やはり答えは？しかないようだ……）

そうになると、どうやって逃れるかが問題になる。

この傷では時を止めた所で”デイト”にやられるのがオチだろう。
 なら他の方法……例えば魔法を使えばいいのではないか？

（魔法！……だが如何する。この速度、この運動エネルギー！
このDIOがああ鏡に飲み込まれるッ！忌々しいがこれは確定され
た運命だ……
そして鏡の先に待っているのは太陽！……魔法で太陽を無力化す
る事は出来るだろうか…）

魔法で太陽を無効化できるか否か…答えは否だ。
少しでも術式を組む時間があれば分らないが、DIOが鏡に取り
込まれるまでに掛かる時間は五秒……こんな時間ではカップラーメ
ンすら作れない。

（……不味い……意識がッ！……この……まま……こ
の……DIO……が……死ぬ……のか……
嫌……だ……俺……は……ま……だ………）

そして……

DIOは意識を手放した。

〓 帝王と少女 〓

（ここは……何処だ？……俺は生きているのか…）

どうやら夜のような……

辺りは暗い……この暑さは12月の日本では有り得ない。
植物も日本には無い物が多々ある……

（此処は……ハワイなのか……なら如何して生きている？
まさか太陽の光が当たらない場所に転移したのか？……それは無いッ！
そんな初歩的なミスを犯す筈が無いッ！……なら何故俺は生きている……）

理解出来ない。

仮に転移場所を、あの女が間違えたとしても管理局の連中は、絶対にDIOが消滅したかを確認する筈だし、もし失敗だと気付けば直ぐに搜索を開始するだろう。

既に夜！搜索する時間は十分にあった。……この世界の警察なら兎も角として、魔法技術を持つ管理局が夜になるまで自分を発見できないとは、考えづらい。

「う……ぐッ！……動かん……このDIOが身動きがとれない……だと……」

理由は分からない。

しかしDIOに分かっている事が一つあるッ！
それは自分が生きていること！

「だが……何時までも此処にいる訳にはいかない……早々にこの場から逃れなければ……」

又ウウ！……傷が深すぎるッ！……もつと血を……血が足りんッ！」

だが近くには誰もいない。

どうやら結構深い森のようで人気はなさそうだ……。

……ガサ……

「誰だ！そこに居るのはッ！」

物音！吸血鬼であるDIOが聞き逃す筈が無い。
間違いなく誰かいる…。

「……子供…だと？」

現れたのは少女だった。

金色の髪に青い目……西洋人だ。

年は十二歳頃だろうか……

「あの……これを…」

少女はDIOに籠を差し出した。

籠の中には、パイナップルとリングゴ…それにスイカもある。

「私に……かね？」

DIOの脳裏に三つの選択肢が浮かぶ。

？血を奪う

？^{ゾンビ}屍生人にする

？一時保留……

（仮にこいつから血を奪ったとして……所詮は餓鬼！大して足しにもならないだろう。）

それにこんな餓鬼を^{ゾンビ}屍生人にしても自意識を保てるかどうかは怪しい。それに今の俺に、他人を^{ゾンビ}屍生人にする余裕はないッ！…今は一時保留にしておくべきか……）

「では……頂いっ……」

一つとって食べる。

新鮮な甘味が口全体に広がった。
考えてみれば、これはDIOがこの世界で復活してから始めての食事。

「フム………美味だ………」

そしてもう一つの果物を取る……
それが食べ終わると、更にもう一つ……
やがて籠に入っていた果物は全てなくなっていた。

「無限の欲望の誘い」

ミッドにある何処にでもあるような公園。
そこにあるベンチで一人の青年が本を読んでいた。
タイトルは『シャーロックホームズの思い出』
偉大なる小説家、アーサー・コナン・ドイルの著作した本だ。
その青年は推理小説のマニアであり、この本は彼がわざわざ地球から取り寄せたものだ。

「隣いいかね」

「誰ですか、ベンチなら他にあるでしょう？」

怪しい男……それが青年にとって、その男に第一印象だった。
金色の目と爬虫類のような顔。まるで映画に出てくるマッドサイエントティストみたいだ。

「君は面白い能力を持っているそうだね………」

「何の事ですか？」

青年は焦っていた。

まだ自分は何の能力の一旦すら出していない。

なのにこの男は、自分の秘密を知っているのか！？

「フッフ、隠さなくていい。

私は君のような能力者を探していたのだから」

「探していた？……能力者を？」

「そうだよ。………まだ上の方は認知していないが、ミッドを中心とした世界で、妙なレアスキル能力者が多く出現していてね………そう君と同じ能力。通称はスタンド使い」

「スタンド使い……ですって……」

「そうだ。………実は最近まで第九十二管理外世界地球に行っていたんだ。

スタンド使いは地球で多く発現する者が多いと私は睨んでいたからね。

結果は大成功！……多くのスタンド使いを、私の側に引き入れる事が出来たよ」

「……………」

「そこで事は相談なのだが……君も私の所へ来ないかい。
君は選ばれた者だ……私の元で世界を変革したくはないかい？」

「世界を変革？」

「まあね。最初はそれほど大きな祭りにする気はなかったんだけど……面白い人を見つけてね。どうせなら盛大な祭りにしたくなっただよ……」

「面白い人？」

「この写真の男だよ」

その写真の男はボロボロだった。
意識はないようで目は閉じられている……
しかし……

「さて返答は？」

私の所に来るかい、それとも……」

それは意味の無い質問だった。

何故なら彼が、その写真の男を見た瞬間に答えは確定していたのだから……

この日、無限の欲望の元に、また一人スタンド使いが加わった。

D I Oの物語？（後書き）

この話を読んだ方には、多くの疑問があると思います。

例えば何故D I Oが生きているのか？

それに関しては多大なネタバレに抵触するので答える事は出来ません。

あらかじめご了承ください。

D I Oの物語？

〓 〓 敗因 〓 〓

D I Oは森の中で考える。

ジョナサンの時も承太郎の時も……そしてあの男の時も、スペックでは圧倒的に上回っていた。……ジョナサンの時は自らの油断、そして彼自身を侮ったことにより敗北した。

承太郎の時は、僅かな油断を突かれて敗北した……
だがディオの時はどうだろうか？

（このD I Oは一切の油断をしていなかった……なのに何故このD I Oは敗れたのだ……）

そこに答えがある筈だ。

ジョースターの血族とは違い、彼は自分ディオに近い存在だ。

何故なら彼の心は、ジョースター達の正義と対極の悪……それも生まれつき悪を行うのに良心という歯止めが無い悪のエリート！
なのに何故だ！……それだけが分からない……

「どう……したんですか？

悩んでいるみたいですけど……」

「お前か……」

あれから毎日欠かさずに果物を持ってくる少女。
名前はエリスというらしい。

（別にこの小娘に話すことでもない、が………まあ気まぐれには

丁度いいだろう)

「私は今まで三人の男に負けた……………そして三人とも能力的には私に劣る者達ばかりだった……………戦い始めた当初は、常にこのDIOは相手を圧倒していたのだ……………が、何故か最後に負けているのは、どうしてかこのDIOなのだ……………私にはそれが理解出来ない……………特に最後に戦った相手には、油断も隙もない…全力全開で挑んで……………これだ。このザマでは再び、世界を支配しようとした所で……………また…いや次は死ぬだろう、間違いない！」

DIOは今まで四度助かった。

一度目はジョナサンの波紋疾走を喰らった時。

あの時は、ギリギリの所で自らの首を切断する事で、一命を取り留めた。

二度目はジョナサンと共に船の爆発に巻き込まれた時

その時は予備のシエルターに逃れる事で助かった。

三度目は空条承太郎に敗れた時

考えてみれば、これほど驚くべき事は無い。

神という存在がいて、その存在が間接的にしろ自らを蘇らせるとは……………

四度目……………

考えれば今が一番不可解だ。これという理由もなく、何故か自分は生きている。

自分でも何故生きているのか分からないのだ……………

それでもこんな偶然は、五回も続かない。

次に敗れる時……………それはDIOの終焉を意味する事だというのは……………

…間違いないだろう。

「あの……ごめんなさい……
私には分らないです……」

「そうか……」

別に期待はしていなかった。

自分の事ながら呆れる……もしかしたら少し弱気になっていたのか
もしれない。

「でも一つだけいいですか？」

「なんだね」

「その三人の人達に……どうやって負けたんですか？」

「なに？」

「そ、その！……深い意味はないんです。
だけど、もしかしたら全部に共通点があるのかもしれないと思って
……」

「ほう……それは興味深い考えだ……」

それは面白い考え方だ。

確かに、三人にどうやって負けたかの共通点を見つければ、自分の
本当の敗因が分かるかもしれない。

だが三人にどんな共通点があるというのだ。

性格も年齢も勝ち方も……全て違うというのに……

ジョナサンには波紋法で……

承太郎にはスタンドで……

ディオにはバインドによる奇襲で……

それぞれ全く別の方法で勝っている……全く別の方法で……

（いや……そんな事ではないッ！……もっと本質的な意味で共通点があるのではないかッ！）

そうだ！思い出す！

ジョナサンの波紋法……それは彼が一人で身につけたものではない。ツェペリという男に学び、そしてスピードワゴンどかい男の協力もあつた！

仮定の話だが……ジョナサンが一人で自分に挑んでいたら、はたして勝っただろうか……

勝てないだろう。勝つのはDIOだ。

空条承太郎……承太郎が静止時間で動けるようになったのは花京院がDIOのスタンドの秘密を暴き、それを祖父のジョセフが伝えたからだ……そして承太郎の奇襲が成功したのはポルナレフのお陰でもある。

仮に承太郎とDIOが本当に一対一で戦っていれば、どうだっただろうか……

簡単だ。承太郎はスタープラチナの能力を覚醒させる事なく殺されただろう。

そしてディオ……この男の例が一番分かり易い。

もしも彼が一人で戦っていたならば、確実にDIOの前に敗れていただろう。

（仲間の有無？……いや違う。仲間ならこのDIOには多くの仲間がいた。

だとしたら……真の敗因は……）

気付く！それは二文字の言葉。

誰でも知っているような……簡単な二文字。

「……信頼か……このDIOに無かった者は……」

「そう信頼！口に出すのは簡単だ。

『俺はこいつを信頼しているぜ！』……そう言うだけでいい。

だが実行した場合……これほど難しい事はないッ！……

信頼とは即ち命を他者に預けるということ！

どこそのアニメや小説には

『みんなの事を信頼している』……そう簡単に呟く馬鹿がいるが……

信頼したが最後……もはやその相手に疑いを抱いてはいけない。疑っ

ては信頼じゃあないからだ。

つまり、その相手にはどんな無防備な状態を見せてもノープロブレ

ム！

そう言えなければならぬ……」

それは難しすぎる事だ。

確かにプッチとは親友になった。ヴァニラ・アイスを初めとした多くの配下を従えた。

しかし、彼等を信じていたかと訊ねられれば否と答えるしかない。

DIOは自らの命を自分にしか預けたことがないッ！

無論、DIO自身が他者を圧倒する程に優秀なものもあるが、それ以上に自分の命運を、自分以外の誰かに託すなど……正直に言えば、実に恐ろしい……それは恐怖だ！

だが仮に……

もし自分に”信頼”できる者が現れた時……

その時こそ自分が本当の意味で”最強”となる瞬間かもしれない。

D I Oはそう思った。

”旅立ち”

「……あの小娘………来ないな………」

最初に妙な小娘が、果物を持ってきてから一週間。

少女は毎日欠かさずにD I Oの元に果物を持ってきていた。

「まあいい………このD I Oの体も大分回復した………戦闘は無理だが、動くことに、もはや支障はないだろう」

吸血鬼としての回復力に加えて魔法による治癒もあるのだ………吸血行為をしていないにも関わらず、凄まじいスピードで回復する事が出来た。……

「戦闘は無理だが………そこいらの人間を殺すのには問題ない。さて………この森ともおさらばか………」

思えば一週間もこの森で倒れていたのだ……

そう考えると、少しだけ感慨深くもある。

D I Oは一回だけ、今まで倒れていた場所を一瞥すると、森から出

て行つた。

出てみると、以外にも人里は近く、数十分ほど歩くと街に出た。
やはり”ディオ”の言つた通り、此処はハワイで間違いないようだ。
多くのアロハシャツを着た日本人観光客がいる。

一応服を再構成する……魔法とはこういう所も便利だ。

（フン！……忌々しいが、今の私では管理局に見付かれば不味い。
余り目立つ事はできんな……）

別に街一つ吹っ飛ばした所でなんとも思わないが、現在の通信技術
は、自分の生きた19世紀と比べ遥かに発展している。…もし騒
ぎを大きくすれば、日本にいる、あの男ディオが感づくかもしれない

「……んっ？……あの小娘……あれは…父親か？」

いつも自分に果物を届けていた少女が、白人の父親らしき男に腕を
引っ張られている。

少女は一見すると無表情だが、一週間よく会話したDIOには嫌が
っているようにも思えた。

「まあいい……先ずはあの男を、我が血とするか…」

そう呟くと、DIOの姿は蜃気楼のように消え去った。

「デメエ！家の果物を勝手に！この化け物がッ！」

「きゃっ！……」

エリスの父親は、娘を思いつき蹴り飛ばす。
羽のように軽い体は、容易く吹っ飛び、壁に激突した。

「糞がッ！今日はとことんツキがねえ！

ギャンブルは大失敗！飲みに行きたくてもダチ公は女とファックしてやがるッ！

それもこれも、テメエの責任だッ！化け物がッ！」

殴る！徹底的に！

そうだ、この餓鬼が悪いッ！全部こいつの責任だッ！

「……………おい」

「あん？」

男が聞き覚えの無い声に、玄関を見ると、知らない人間が立っていた。

年は分らない……………しかし大体二十代ぐらいだろう。

「ああ……………確かエリス、だったか。

此処はお前の家か？」

「え……………おいッ！テメエ、人の家に勝手に上がりこんでんじゃね
「お前には聞いてない」……………ぶどッ」

男が吹っ飛ばされる。

DIOに小突かれたのだ……………指で……………

「もう一度聞く。

此処はお前の家か」

「あ、はい……私の家です」

「そうか、それでそこに転がっている物はお前の父親か」

「……はい」

「そう「バンッ！」……んん？」

エリスがまるで糸の切れた人形のように倒れる。

いや人形のようにではない。胸が貫かれていた……
夥しい量の出血……助からないだろう。

「てててててーッッ！ テメエも死にやがれッ！」

男が銃を乱射する。

男がこのように常軌を逸した行動に出たのには理由がある。

勿論、彼自身が短絡的で愚かな男だというのも一つの理由だ。

だが何よりも、突如として現れた男の異常性を本能として悟ってしまったのだ。

DIOに向かって銃を乱射する。

だが銃弾がDIOに届くことは無い。全て目に見えない何か銃弾を摘んで、地面に落としてしまうのだ。

「は、如何して？ 如何して死なないの？

銃だよ、銃弾だよ、至近距離だよ、三メートルぐらいだよ？

やややややーッッッ！ やっぱりこの化け物のなん仲間ーッッ！？」

「化け物？」

「この小娘の事か？」

「そそそそそ、そうだよ！」

そいつアな！本当の所は今年で二十歳なんだよオ！なのに年だつて変わらねえし、おまけに殴つても蹴つても縛つても刺しても、直ぐに元通りになんだよう！そんなのばばばば！化け物以外他ならないっしょオオオ！」

「そうか……分かった」

無音で男の首を掴み……血を奪う。

今までを越えるスピードで傷が癒えていく感触。

やはり吸血は段違いだ。

「後は……そうだな。

燃やしておくか」

証拠を細かく隠滅するのは面倒くさい。

なので家ごと燃やすことにした。

「……………ん……………」

振り向くと驚いた。

エリスの体は治っていた……傷は完全に塞がれている。

「やはりスタンドか……………まさか飛ばされて早々に出会ったのがスタンド使いとは……………」

奇妙な運命を感じるぞ……………」

「……う、私はまた……え！」

驚く！刺されたり殴られたりして気絶するのは毎日の事だ。だが、どんな時も家が燃えるなんて事態はなかった！

「おい、お前の父親は殺した」

炎の中心に一つの影が立っていた。

彼の周りには、炎が避けるように寄り付かない。

「私と来るか」

少女は自然に悪魔の手をとった。

D I Oの物語？（後書き）

スタンドリストに色々追加したのでご覧になって下さい。

D I Oの物語？

「悪の帝王と無限の欲望」

D I Oとエリスが共に旅立ってから、既に半年の月日が経過していた。

その間に、エリスのスタンド能力の把握、及び特訓。そして適当な人間から血を奪うことで、D I Oの体も完全に癒えていた。

「しかし……此処がミッドか……
凄い物だな……正に魔法だ……」

ミッドの街に並ぶ、高層ビル群や車、それにヘリなどを見て、D I Oはそう呟いた。

D I Oは、闇の書から得た知識を使い、第一世界ミッドに降り立っていた。

それには、世界を支配する為に立ち上がった時に、最大の敵となるであろう組織を見ておく為でもあったが、次元世界一の都市を見たかったからでもあった。

「でも……車やヘリコプターなんかは地球でも見かけますよ……」

「それはエリス。君が今の地球出身だからだよ……」

このD I Oが生きた時代は違うッ！私の時代には乗り物といったら馬車ぐらいだった。

そんな私から見れば、ヘリや車など魔法以外の何物でもない」

「そういうものですか……」

「そついうものだ」

暫く二人で街を散策する。

店頭に並べられている物は、どれもDIOの好奇心を刺激する物ばかりだ。

配下の一人であつたダービー弟が、よくゲームをやっていたので、少したけプレイした事があるが、このミッドに並ぶTVゲームは、前にDIOがプレイした野球ゲームとは、段違いのリアリティーがあつた。

「もし、その人……」

「私の事が……」

DIOが振り返ると、スーツを着た男がいた。年は三十ほどだろうか……ごく一般的なサラリーマンといった容貌だ。

「そつです、貴方の事ですよDIO様」

「！……このDIOの名を知っている……
お前は何物だ」

「私の名はマックス・ヴェーバー。
しがないスタンド使いです……」

「ほほう。興味深いな。
スタンド使いがこのDIOに何の用だ？」

「いえ、ただ一つギャンブルを如何かと思ひまして……
どうです？ 私と一つ賭けをしませんか」

ギャンブル……そう切り出してくるという事は、ダービー兄弟と
同じような勝負型のスタンド使い。

ならば賭けるチップは、魂か…それとも命か……

「このDIOと知っていながら挑む……面白い。
受けて立とうじゃあないか。それで何の勝負だ？」

「私から言い出したのです。
貴方が決めて頂いて結構！」

「大した自信だ。
そうだな……ではUNOはどうだ？」

「UNO……いいでしょう。
それは私の大好物の一つですッ！ 必ずや貴方に敗北の味をプレゼン
トしましょう！」

「御託はいい
さつさときれ」

「ふふ……せつかちなお方だ」

ここでUNOのルールを知らない人に説明しておこう！
UNOのルールは実に単純。

山札からお互いに七枚のカードを引いて先にカードを0にした方が
勝ちだ！

だが地方によってローカルルールが幾つもあるので、本作では

・ 数字やアルファベットが同一なら、同時に出す事が可能
・ ドローフォーは場札と同じ色または同じ数字がない場合にしか出せない

・ ドローフォーを出したプレイヤーの次の手番の者は、ドローフォーカードを出した者が本当に場と同じ色または同じ数字のカードがないか「チャレンジ」と宣言してチェックすることができる
・ チャレンジが成功した場合、ドローフォーを出したプレイヤーは八枚のカードを引く

・ 失敗した場合、ドローフォー＆チャレンジ失敗分で八枚引く
・ 手札が残り1枚になるときは「Uno」と宣言する。宣言を忘れた者は、ペナルティとして山札から2枚取らなければいけない
・ ドローツリーはドローフォーで流すことが可能
・ 相手がドローフォーで選択した色が、自分の持つドローツリーと同じ色ならば、受け流すことが可能

という設定で行います。

なので、このルールは違うツリーという指摘はしないで下さい。

「D I O様……大丈夫ですか…?」

エリスが心配そうに聞いた。

「フン！このD I Oが負けるなど有り得ないことだ。
それより何を賭ける?」

「フフフ、では私が勝った場合、貴方の魂を頂く!」

「そうか。いいだろう。」

このD I Oの魂……賭けようじゃあないか。

それでお前は何を賭ける？お前の魂か？」

「ご謙遜を。」

賭け事とはお互いに賭ける物が同価値でなければ成立しないッ！

私一人の魂が、あなたの魂と同価値であるなどと、私は自惚れてはいませんよ……

そうですねア……世界など如何です？」

「世界だと……」

その通り

「Exactly！……聞く所によると、貴方は全次元世界の支配を望んでいられるとか……」

しかし幾らなんでも、一人では世界を征服するなど夢のまた夢……

拠点や多くの部下！世界を支配するなら必要なのは山ほどあるッ！

私に勝ったならば、それを提供しましょう」

「面白い。いいだろう。」

その条件を受ける！」

マックスとDIO！

二人に七枚のカードが配られた。

DIOの手札

黄色

R 2

4 2

赤

無し

緑

9	1	青	9	1
			黒	9
				1
D	4			
	1			

（悪くない手札だ……ドローフォーもあるッ！）

一番上のカードは黄色の1

幸いにしてDIOの手札に黄色は多かった。

「先行はどちらだ？」

「フッフ、貴方からでいいですよ」

余裕綽々といった様子でマックスは、先行を差し出した。

一方のDIOは……彼も余裕だった。

こういうゲームにおいて、ザ・ワールドは反則級的能力を持っている。

先ず手始めに、相手の札を……

「先に言っておきますが、時を止めるのは反則です」

「……なに!?」

「私のスタンド……プライベート・アイズの効果です。

私が予め宣言した事を、プレイヤーが行った場合、その時点で敗北となります……」

「なにイ！」

そう、それはつまり

D I O のザ・ワールドは……能力を封じられたという事で……

「ビビッたッ！ビビりましたねッ！

どうですかァ。自分の能力が使えなくなった気分はァ！

これでご自慢のザ・ワールドは既に木偶の坊と化した訳ですよ！」

エリスは震えていた。

自分の主の強さは知っている……だがそれでも、最大の武器であるザ・ワールドが使えなくなったッ！

それが、どれだけ危険なのは、よく理解出来ていた。

「おいおい、エリス。

怯えているのか。……良く見ておくがいい。

このD I O にとってスタンドパワーですら能力の一端に過ぎない事を……」

「！」

「……威勢のいいお方だ。

ではゲームを始めましょうか？

どうぞ貴方のターンですよ」

手札を見る。

二人だけの勝負においてリバーは邪魔以外の何物でも無い。

D I O は先ずリバーは二枚を出した。

「ほっ二枚同時……なら私は三枚でいきましょう」

黄色、赤、青の順に8を三枚出す。

（これは……勝ったな……）

D I Oの手札には9が二枚

そして黄色の4が二枚にドローフォーが一枚。

「では私はもう一度、二枚出すとしよう」

青、緑の順で9の二枚。

これでD I Oの残り手札はドローフォー一枚と4が一枚。
勝利は目前だ。

「では私は……このカードを」

マックスが出したのはWildのカード。

ドローフォーと違い、相手にカードを引かせる事は出来ないが、ノ
ーリスクで色を変える事が出来るカード。

「そうですね……私の選ぶ色は……フッフ『黄色』です！」

（不味いッ！）

内心で焦る。

D I Oの残り手札は二枚。

だがドローフォーで上げればルール違反、二枚引かなければ成らない。

必然的にD I Oはドローフォーを出してから上がらなければなら
ないのだが、マックスの選択した色は黄色。もしもドローフォーを出
せば、D I Oは他の色を選択しなければならない。もし間違えて黄

色を選択した場合には、確実にマックスは『チャレンジ』してくるだろう…

「どうしました？

貴方の番ですよ……」

「そうだな……では私は…これだ…」

DIOの出したカードは………ドローフォー！

「ほう…ドローフォーですか…」

（妙だな。今回は一枚ドローしておいて、ドローフォーを温存してくると踏んでいたが……

こいつ馬鹿なのか…？）

「それで色は何にするんですか？」

「黄色だ」

「！」

「どうした？そんなに焦って…

怯えているのか、マックス？」

「正気か！？今の色は黄色！そしてお前の変えた色も黄色！
それでは私に『チャレンジ』しろと言っているようなものじゃあないかッ！」

「そうだな…

ではチャレンジするといひ……」

「……………」

（又フフフ……ハツタリで誤魔化す算段か…

だがこのマックスには無意味！我がスタンド『プライベート・アイズ』の効果は、ルール違反を設定するなどというものではないッ！あれは単なるハツタリ……お前は既に我が術中に嵌っているッ！プライベート・アイズの真の能力……それは透視能力！流石に内臓までは見る事は出来ないが、紙一二枚程度の厚さなら楽勝よゝ！）

DIOのカードが黄色の4二枚だというのは分かっている。

つまりは単なるハツタリ。そしてこの能力の前に、ハツタリは通用しないッ！

「チャレンジだ……」

マックスがチャレンジと言うと、あっさりと手札を見せた。
4が二枚……アウトだ。

「さて…八枚引いてもらおうか。
フフフ、残念でしたねゝ。もし私がチャレンジしていたかったら
勝っていたのに……」

「私はカードを引いた。
早くゲームを進めろ」

「……………その減らず口が何時まで続くかな……」

（さてと……私の手札は残り三枚。

奴の手札は十枚！……このままでも十分有利だが……終わらしてやる。私の手札には黄色のD2が一枚と赤のD2が一枚、そして赤の7が一枚。

そしてお前の手札には、青のD2が一枚ある！

私が黄色のD2を出せば、お前は青のD2を出すしかないッ！そうすれば私が赤のD2を出して、私の勝利が確定するッ！

「八枚も引いた所だが悪いね……ドローツーだ」

（勝った！）

「……………そうか。」

では二枚引くでしょう」

（なにッ！）

不味いと……………マックスは思った。

ここでDIOがドローツーを出さない場合、次の自分の晩でD2を出せば、逆に被害に合うのは自分だ。

（しかも……奴が次に引くカード！あれは……………）

透視能力を持つマックスには、一番上から三番目までのカードが分かる。

そして一番上のカードは……………ドローフォーだったッ！

「さあ、どうした？

お前のターンだ」

「……………フン！」

マックスは山札から一枚ドロ―。

黄色のスキップ。もう一度彼の番になった。

そして再びドロ―。

彼が引いたのは………ドロ―フォー！。

（これで互いにドロ―フォーとドロ―ツ―が一枚つつ揃った。
ここからが本番だツ！）

D I Oは4を二枚出す。

（先に仕掛けた方が負けるツ！
時期を待つんだ…山札にドロ―フォーが来る瞬間をツ！）

D I Oが黄色、赤の順に9を出す。

（来たツ！次のカードは緑のドロ―ツ―！

奴の手札は

青

5 二枚

D 2 一枚

緑

5 二枚

赤

5 二枚

黄色

無し

黒

D 4 一枚

つまり私がドロ―フォーを出して黄色を選択すれば、お前にはドロ

「赤のドローツーと赤の7がある…
残念だが八枚引いてもらっぞ」

「うつ…うつしょん…」

「覚えておくといい。」

ゲームをする時は、一つの事に集中し過ぎない事だ」

そのままDIOはゲームを進める。

「私はカードをドロ…」

これは素晴らしい偶然だ。私の引いたカードは黄色のドローツー。
私は黄色と青のドローツーを出す」

「え、えええええ…」

既にマックスは思考が停止していた。

情性的に手札にある赤のドローツーを出す。

「お前の出したドローツーに対して、私はドローフォーを出す。
選択する色は緑」

流せない…

マックスは出せない…

そしてカードを十枚ドロートした。

「最後に私のターン。

5を六枚…同時に出す。

これで私の手札は0枚、お前は21枚。

THE ENDだ！」

「フン！このDIOに挑むならば、せめてダービー兄弟程度の腕前でなければな……」

パチパチパチパチ

何者かが拍手している。

音の主を探すと……いたッ！

路地裏から白衣を着た男が歩いてくる……

「やあ、こんばんわ。

DIO君……私の名はジェイル・スカリエッティ。

失礼だけど、君の戦いを見物させて貰っていたよ」

「お前がこれの飼い主か？」

「そうだよ。

そしてマックスを倒した君には、しっかりと約束の品を渡さなければならぬからね」

黙ってスカリエッティは書類の束を渡した。

DIOは黙って読み進める……だが読み進めるにつれて、段々と顔に笑みが浮かんできた。

「この計画……普通なら実行するのに15年は掛かるのだけど君は何年で実行出来るかな？」

「五年だな……五年もあればこの程度は十分だ」

「三分の一とは大きく出たね……」

「当然だ。……それよりお前は何故、このDIOに手を貸す。

それにこの準備……まるで私の為に準備したようか感じたが……」

「フフフフフフ。」

私には夢があるッ！

生命操作技術の完成……地上にいる何物よりも強いッ！最強の生命体を生み出すことッ！

だが君を見た瞬間……私は絶望と歓喜を同時に覚えた……

私には君を超える生命体を作る事は出来ないッ！

しかしだよ……君という存在を最強にすることで、私の望みは叶う！そう確信した……そして君ともう一人が、本当の意味で互角に戦える場所……

それを造るのが私の仕事であり、死闘の果てに大地に立つ者……その存在こそ、私の理想とする最強の生命体に他ならないッ！」

「……そうか。

クックククツ、いいだろう。喜べジェイル。

お前の望みは叶う！このDIOの下に付くのだッ！叶えられぬ願いなどないッ！」

スカリエッティは黙って跪く。

最高評議会にすら従わなかった男が、跪いた！

それはDIOに対する歪なる忠誠！

同時に余りにも純粋な忠誠！

「このジェイル・スカリエッティを配下にお加え下さい。

我が帝王よ！」

「認める！励めよジェイル」

今ここに

世界一危険な主従が生まれてしまったッ！

時は新暦0066年、日本ではまだ寒い時期に起きた小さな事件である。

しかし世界の人々は知らない。

この主従が後に、次元世界を二分する大戦を起こす事を……

D I Oの物語? (後書き)

お知らせ……

S T S 編での二人のディオの希望c vが決定しました。

D I O…緑川光さん

ディオ…池田秀一さん

以上です。

もしオリキャラを応募された方でも、このキャラにはこの声優がい
いなどという希望がありましたら、言ってください。

第23話（前書き）

S t S 編スタート！

第23話

闇の帝王と無限の欲望が交わる世界

死せる王は帝王の下に降り、聖地より彼の翼が蘇る

屍達と機械人形そして幽波紋は踊り舞う

闇の帝王に対するは同じく悪の帝王たる存在

同じ性を持ちながら二つに分かれた存在

しかし二人は共に悪

故に世界に救いはない

愚かなる争いが収束する時

世界は変革され、そして世界は終わる

〓 〓 ヘルシング 〓 〓

「ティアナ・ランスター陸曹」

「スバル・ナカジマ陸曹」

「キャロ・ル・ルシエ陸曹」

「エリオ・モンディアル陸曹」

「……ただ今をもって着任しました！」「……」

「はい、私がヘルシング所属次元航空艦ギガンテス艦長の八神はやて二等陸佐です。」

貴方達の奮闘を期待します」

管理局とアーブが公式的に戦争状態に入ってより二年。

戦局は膠着状態であったが、つい最近になってアーブのエージェントが管理世界、管理外世界問わずに散らばったロストログア、レリックを搜索している事を察知。

アーブの首領が天才的な科学者でもあるジェイル・スカリエッティである事を考慮して、アーブ対策委員会の委員長レジアス・ゲイズ中將の主導のもと、最高評議会直属の特別作戦部隊ヘルシングを創設。

そこに配属されるのは、エース・オブ・エース、高町なのは一等空尉を初めとしたエース。

そして……

「着任早々で悪いんやけど、高町一等空尉」

はやての隣に立っていた、なのはが前に出る。

「皆にはこれから訓練を、受けてもらわなくちゃならないの」

「く、訓練……今からですか？」

普段は余り上官には齒向かわないティアナだが、流石に今回は質問した。

四人はまだ着任したばかりで、まだ部隊や艦の事が殆ど理解していない。

普通なら、訓練の前にもう少し説明がある筈なのだ。

「そう今から。」

皆も知っているだろうけど、スバル達が本来あるべき筈の順序を飛び越えて、陸曹になったのは、スタンド能力者の卵だから。

でも皆はまだ、自分のスタンド能力と魔法を組み合わせた戦闘方法を身に着けていない。

今の内にはつきり言うけど、これから私達が戦う相手は、たぶんアーブ軍のスタンド使いが主になってくる。……こんな言い方はしたくはないけど、スタンド能力を、完全に自分の物にしないと、最悪の場合は……………」

沈黙……………。だが四人とも知っていた。

戦争が始まった二年の間で、管理局における『殉職者』の数は激増した。

今では『殉職者』ではなく『戦死者』と呼ばれている程だ……。つまり、なのはは遠まわしにこう言っているのだ。

「スタンドと魔法制御を出来るようになれ。さもなければ死ぬ」

優しい言葉の裏にある、厳しい言葉。

だが四人とも、辞めたいとは言えない。

いや、言わない……………何故なら四人とも自らの意思でここまで来たのだから。

「じゃあ私に着いて来て。
訓練施設に案内するから」

「……はい!」

「スタンド訓練」

なのはは四人の前に立つ。
実戦とも模擬戦とも違う、独特の緊張感が、なのはを含めた四人に走る。

「本来ならスタンドの訓練に関しては、違う人がやる筈なんだけど、今は少し本部の方に用事があって遅れてるから、私がやるね。質問はある?」

「……」

「ないようだから始めるね。」

四人はこれからの任務で一緒に組む事が多くなる。
この中で一番指揮能力が高いのはティアナだから、もし隊長陣と連絡が出来なくなったらティアナの指示に従うこと」

「え、私ですか……」

その、光栄です!」

「任せたよ。スバル達もしっかりティアナの指示に従うこと!」

「『はい！』」

「さてと、スバルは近距離パワー型、ティアナとキャラは融合・憑依型、エリオは独り歩き型。エリオの能力は単純だから一先ず置いておいて、スバルはスタンドと自分自身が前面に出て戦うフロントアタッカー。スピードのあるエリオがガードウイング。スタンド能力と魔法が補助に向いているキャラがフルバック。そして中、遠距離に向いていて指揮能力の高いティアナがセンターガード、これは私と同じポジションだね。……先ずは個々のせ『総員！第一種戦闘配備！』」

「そんなッ！もう……」

『第71管理世界においてレリック反応を確認！』

「アーブ軍所属と思われるスタンド使い、そしてヒュート約200機！レリックのある近隣の村に対して攻撃を仕掛けている模様！

戦闘要員はただちに出击準備を！」

響き渡るオペレーターの声。

それは否応にもなく事態が緊急を告げるものであると悟らせた。

「『初出撃、初戦闘』」

現場に向かう艦の中で、なのはとはやてが言い争う。
二人とも譲らずといった様子だ。

「はやてちゃん！まだ四人は訓練を受けてないんだよ」

「こっちの戦闘要員は新人の四人を除けば、なのはちゃん、シグナ

ム、ヴィータの三人だけ。

今は艦長である私が、持ち場を離れる訳にもいかんし、200機のヒュートを抑えるには、最低でも四人は必要や。三人でも少ないぐらいなのに、一人を敵スタンド使いに向かわせる事は出来へん。

それに敵スタンド使いは、不幸中の幸いにも一人。まだ未熟な四人やけど十分戦える筈や」

「そ、そうだけど……………」

合理的な意見。

確かに四人はまだ未熟だ。

だが彼女達は其々が優れたスタンド能力を持つ者だからこそ、この部隊に配属されたのだ。

ヒュートを隊長陣が抑えれば、スタンド使いは一人。

まだ未熟とはいえ、四対一なら勝機は十分だ。

議論はその後数分続いたが、時間が経てば応援がやって来ると言う言葉に、渋々ながら了承する事になった。

現場に到着すると、先ずは隊長陣が先に出撃する。

先ずは敵スタンド使いへのルートを安全に確保するために敵を掃討する。

「……………なんだかドタバタして自己紹介もしてなかったわね。

私はティアナ・ランスター。そっちは……………」

「スバル・ナカジマ！スバルって呼んでね」

「僕はエリオです。エリオ・モンディアル」

「キャロ・ル・ルシエです。宜しくお願いします」

ティアナは思わず呆れてしまった。
ヘルシング隊へ相棒であったスバルと一緒に着任する事になったのが三日前。

急いで準備して艦に来たのが今日の朝。エリオとキャロに出会ったのは、それから三十分ほど。

そして夜には、既に初実戦だ。

こう考えると、今日ほど密度の濃い日は、初めてだった。

四人の新人が出撃前で緊張している時、ブリッジ要員達も忙しく動き回っていた。

「グリフィスくん、近隣住民の避難はまだ!？」

艦長席に座るはやてが言った。

「はっ！我が隊所属のヒュート及び職員達が急いでいますが、全員の避難完了には、もう暫くの時間が必要です!」

「そうか……リイン！フォワードの四人に繋いで。

そろそろ目標ポイントまでのルートが出来る。

こうなったら何が何でも時間を稼がなあかんからな……」

「はいです!」

やはりアープのヒュートは強い……

数で劣るアープ軍が管理局と互角の戦いをしていられる理由の一つが、この傑作兵器である。

主にインテリジェントデバイスに使われる人工知能を応用して、高

度な判断力を持たせた人型機械兵器。

ヒュートは、AMFを標準装備しており、この兵器を破壊するには最低でもBランク程度の实力が必要となってくる。

勿論、ストライカー級の魔導師ならば敵にはならないが、数の暴力というものは、魔法の世界にも存在する。…戦争初期の頃は、一人のストライカー級魔導師が300機以上のヒュート相手にやられるというパターンが多かった。

現在の管理局ではヒュートの有用性を認め、量産体制に入っているが、やはり性能ではアーブ軍のそれには劣る。…特に現在なのは達が交戦しているのは、アーブ軍の最新鋭機だ。現在の管理局のヒュートでは及ぶ筈が無い。

「デイベイン・バスター！」

桃色の巨大な閃光が走り十五機のヒュートを飲み込んでいった。同時に多方向からのビームの嵐。

「ちッ！邪魔なんだよッ！」

ヴィータがアイゼンを振るう。

再び六機のヒュートを撃破したが……キリがない。

次から次に、まるで制限など無いようにヒュートは溢れ出てくる。

「ヴィータ、それに高町！」

そろそろ新人達が出撃する頃合だ。ルートを作るぞ」

「ああ新人達はしっかりと送り届けねえとな……」

途中で機械野郎共に打ち落とされましたじゃ目も当てられねえ……

…よつと！」

接近戦を挑んできたヒュートの一機を殴り飛ばす。

見ればギガンテスでは既にフォワード四人の発進準備が整っていた。

『なのはちゃん！シグナム、ヴィータ！今から四人が出る！
援護頼んだで』

『了解！』

正直なのははまだ不安だった。
だが自分の信頼する”上官”である人が選んだメンバーだ。
信用しよう……そう思った。

「ティアナ・ランスター。
クロスミラーージュ行きます！」

「スバル・ナカジマ。
マッハキャリバー行きます！」

「エリオ・モンディアル。
ストラーダ行きます！」

「キャロ・ル・ルシエ。
ケリュケイオン行きます！」

飛び立つ四人！
目標地点は敵スタンド使いのいる場所！

「スバル、見えた？」

ティアナがこの中で最も視力のいいスバルに聞いた。

「見えるよ……あそこにある村で、大きい男の人が、暴れている。管理局のヒュートと現時の保安隊の人達が頑張っているけど……」

悔しそうに齒噛みする。

たった一人の男を相手に、ダメージらしい物一つ負わせる事が出来ず、じわじわと下がっていく保安隊。

そして成す術もなく破壊されていくヒュート達。

このまま自分達が現場へ向かわなければ、今度は保安隊の人が危ないかもしれない。

スタンド使いに対抗出来るのは、優れた魔導師かスタンド使いだけ

……

ならば一刻も早く向かわなければ成らない……

そんな義務感が四人の中にある恐怖を、和らげた。

「油断してるわね……」

それにまだこっちに気付いていない……これなら！」

先手必勝！

元よりこちらの目的は敵を捕縛する事ではない。

敵を沈黙させる事だ。

ティアナは黙ってトリガーを引いた。

放たれる魔力の弾丸。

それは真っ直ぐ飛ぶと、大男の胸板を貫いた。

「よしっ！……スバル、それに二人も。」

スタンド使いは倒したけど、まだヒュートは健在。
急いで近隣住民の避難を手伝うわよ！」

「了解！」

「……………だれを倒したってエ
この腰抜けどもがアッあ」

「！」

「嘘っ！完全に致命傷の筈なのにっ！」

ティアナの声も空しく、ゆったりと立ち上がる大男。

間違えなく致命傷！心臓を貫かれている！

なのに男は、まるで大した事が無いとでも言うように立ち上がった。

「バッハハハッハ！OOOHOOORYYYYYYYYYY
Y！！

このチャールズ・アトラスの鋼の筋肉を素通りするとは、そのオ
レンジ頭！

それが貴様のスタンド能力かア！だがこのワシを相手とするには、
まだまだだったようだなア！

チンケな弾丸などもう喰らわんッ！ひとりひとり順番にミンチにし
てくれるわア！」

魔力で強化されたのだろう…

その巨体にあるまじき猛スピードで迫るチャールズ！

「スバル！あんたが最前衛！

エリオはスバルの援護をッ！キャロはバックアップ！」

一瞬の状況判断！

チャールズのパワーと互角にやり合えるのはスバルしかない。
エリオはスピードならあるが、残念ながらパワーはそれ程じゃない。

他の細かい指示を念話でした後、自らも後方へ下がる！

「うおおおおおりゃあああああ！！」

スバルが二人に増える！否、スバルの隣に蒼い影が現れた。

これが彼女のスタンド『リベリアン・ガール』

特に特殊な能力こそ持たないが、純粹なるパワーならば彼のスタープラチナにも匹敵する程の力である。

無防備な胸板にスバルとスタンド、合計四つの拳が叩き込まれた。

「バハハハハッ！なんだその一撃は？

そんなチンカス並みのパンチなど、このワシには通用せんわッ！」

そう言いながらチャールズは、お返しにとばかりに、スバルとスタンドを蹴り払った。

同時にチャールズの後ろに迫る雷。一瞬で雷は人の姿へと変わり、チャールズの脳天を槍で突き刺した。

「そ、そんな！…………効いてない……」

「頭……なら……貫けるとでも思っていたのか……小僧。

このチンケな首をポツキーのようにポキッと押し折ってくれ

ッ！」

咄嗟に首を横にずらす。

危なかった、もし首をずらさなければ、オレンジ色の弾丸に貫かれていただろう。

「ほっほう……この不死身の肉体を持つワシだが、頭を貫かれるとチト危ない。

先ずはオレンジ頭。貴様から血祭りに上げるとするか……」

「……驚いたわ。まさか避けられるなんて……」

悔しそうに齒噛みする。

だが、その表情はどちらかと言うと仕留められなくて悔しいといったもので、絶体絶命のピンチに追い込まれた子羊には見えない。

「仕方ないから、任せたわよキャロ！」

「ぬう！こりゃツ！龍だとツ」

チャールズは一瞬だけ、不覚にもその美しい白龍に見惚れた。しなやかでありながら、力強い肉体！

背に乗るのは少女。龍使いの一族、アルザスの末裔……

「フリード！ブラスト・レイツ！」

口から吐き出される火炎。

超高熱のエネルギーは人を焼き尽くすには十分の火力だ！

「ANGYAAAAAAAAAAAAA！」

「打撃には強いようだけど、炎には弱かったみたいね……」

焼かれる肉体。

人間は通常、皮膚の七割が焼けると死ぬ可能性がグンと上がる。現在進行形で燃やされているなら尚更だ
だがチャールズは、とある男によって注入された、吸血鬼のエキスにより死を免れていた。

「WWRRRRRRYYYYYYYY - - - - -
- - ツ!

小童がア！テメエらも一緒に焼き殺してくれるわア！」

「ま、まだ動く！？」

ティアナの作戦に穴があつたとすれば一つ。

それは屍生人の不死性を知らなかった事だ。

石仮面によつて吸血鬼となつた訳ではないゾンビは、再生能力こそないが、耐久力において人間とは比べ物にならないのだ。

（やられるツ！）

避けられない……

ティアナは死を覚悟した……

だからこそ、この光景が理解出来ない。

如何して先程まで自分に、突っ込んできたチャールズが

気が付いたら吹っ飛ばされていたのだろう。

「やれやれ、随分と遅刻した……」

ティアナだけじゃない。

フォワードメンバー全員に、突然現れた男を知っていた。いや、この男を知らない者など局員には存在しないッ！

「遅いですよ！隊長が一番遅れて如何するんですか！」

「悪いね、なのは君。」

本部でレジアス中将に引き止められてしまっただけ……」

管理局のエース・オブ・エースすら上回るジョーカー。

時空管理局史上最強の魔導師であり最強のスタンド使いと謳われる男。

その男の名は……

「最高評議会直属、特殊作戦部隊ヘルシング部隊長
ディオ・ブランドー一等陸佐だ。これより戦闘に参加する」

管理局の切り札とされる男が、この戦場に舞い降りた。

第23話（後書き）

始めましたsts編。

読者の皆様には言いたい事や聞きたい事が多々あると思います。

此処に至るまでの経緯やなんたらに関しては、話すが続くことに分かっていくと思います。

勿論DIOの物語もまだ終わってません。

話の合間合間に入れていきますよ。

第24話

「史上最強」

「見る、増援だ」

ディオが指差した方向には、七百機近くのヒュート。
お山の大将だったスタンド使いが、やられたんで慌てて来たのかも
しない。

「なのは君、シグナム、ヴィータ。

少し離れていてくれ。ウォーミングアップも兼ねて派手にいく。
新人達四人も下がっていたまえ」

「下がって……幾らなんでも一人じゃ無理です！」

スバルが言った。

間違っていない。敵の数は元からいたのも含めて1000機。
例えSSSランクの魔導師でも勝てない程の戦力だ。

「大丈夫だよ。四人とも下がって」

「でも、なのはさん！」

「大丈夫。見てれば分かるよ……」

どうして、ディオさんが史上最強と謳われるか、その理由がね」

全く心配した様子のない笑みを浮かべた。

四人の若きスタンド使い達は、静かにディオを見る。

威風堂々、その形容するのが正しいだろう。

恐れた様子は無い。寧ろ……………余裕？

「リインフォース。敵の正確な数は？」

「984機。真つ当なデバイスなら即時退却を推奨する所だな」

「ほう、ではお前の意見を聞こうか。ユニゾンデバイスのリインフォース」

「そうだな……………一分で終わらせる、か？」

「惜しいな、三十秒だ！」

ザ・ワールド！

ディオの宣言と共に停止する世界。

停止時間の中で動けるのは、この世で唯一人。

それが機械だろうとスタンド使いだろうも、例外は無いッ！

デス・スブラッシュ・ヘブン・ブレイカー
「魔天殺乱砲！！！」

拡散する魔力波！黄金の魔力は木偶の坊と化したヒュートを次々と撃墜していく。

高機動を誇る新型ヒュート『ベル』

デス・カイザー・ヘブン・プレイカー
魔天殺帝砲！！」

抗う者などいない、いる筈がないッ！

黄金の広域殲滅魔法は文字通り、彼に敵対する存在を、丸ごと飲み込んでいく。

微塵の容赦なく！徹底的に！

「……………いかな、少しやり過ぎた。

地形が少し……………いや結構変わってしまった。

まあ、このディオが気にすることでもないか……………

そして三秒前」

地面に降り立つディオ。

そして時を停止する前に居た場所に立った。

「二秒前」

時が動き出した時。

傍から見れば、一瞬の内にヒュートが全滅しているという奇天烈な光景にしか写らないだろう。

「一秒前」

最後の指が……………折られた。

「ジャスト三十秒。そして時は動き出す」

宣言と共に、再び世界は時間を刻み始めた。

「嘘……………あれだけいたヒュートが……………」

「ぜ、全滅してる……………これが…管理局最強の男の実力？」

新人四人はディオを見る。

変わらない。これだけの偉業を達成したのに何の表情の変化もないッ！

強い…強すぎる。

最初は四人全員が、ディオの活躍に対する報道を、マスコミが誇張したものだと考えていた。

当然だ、ストライカー級でも二千機のヒュートを一人で全滅させるなんて夢のまた夢。

子供が適当に考えた絵空事、そんな風に考えていたのだ。それが完全に裏切られた。

確信する。ディオならば例え万の敵に囲まれたとしても負けないと！

「ANGYAAAAAAAAAAAAAAAAA！！テメエ等！もう逃がさん！このワシが挽肉にしてくれるウウウウウ！」

「な！この筋肉ダルマ、生きて

」

ティアナの次の言葉はなかった。

何故ならば、先程まで怒り狂っていた大男が、一瞬……………いや0秒の間に挽肉にされたのだから。

「どうしてくれる？」

貴様のお陰で三十秒ジャストの筈が余計な時間が掛かった。

尤もこのディオ以外には0秒の出来事だろうがな」

「へ、へへへ……………ほんのジョークですよ。

もう、あんたには逆らわねえ！じゃから命は助けてくれよう！

管理局への奉仕でも何でもしますぜエエエ！お願いしますよオオデ
イオ様アアア！！」

「駄目だ」

「しょ…しょんな〜」

次の瞬間、大男の居た場所の地面だけが、抉れていた。
中心にいた男は、原型も残さず塵となっただろう。

「品のない者に生きる価値などないッ！」

あれほど苦戦した大男を、まるで赤子の手を捻るように倒した。
同じスタンド使いなのに、彼と自分達では大きすぎる差があるッ！
その事を無意識の間に自覚した四人！

彼女達全員はスタンド使いという事で色々と特別扱いを受けてきた。
学費も免除されたし、初っ端から陸曹からスタートした。
周りからチャホヤされ、少し浮かれていた精神が…締まる。

「さて、何時まで呆けているのだね。
帰るぞ、面倒だが部隊長の挨拶をしなければならぬ」

去っていくディオ。

四人の新人達は慌ててディオを追った。

「闇の帝王」

「どうかな、D I O。
彼はどの程度まで時を止めた？」

「フフフ。聞きたいかね、ジェイル？」

「聞かせて欲しいね」

「流石はこのD I Oが認めた好敵手だ。
既にこのD I Oと同じく三十秒の時を止められるようだ。
今私と奴が戦えば勝率は五分五分だろう」

スカリエッティ以外の者達が驚く。

自分達の主がここまで評価するなど初めての事だ。

しかもD I Oの口にしたのは単なる敵ではなく好敵手。
つまり、画面に映る存在を対等の相手として認めた証。

「さて、となるとヘルシング相手に、夜での戦闘は避けるべきだろうな。」

その上でこのD I Oは問う。誰かヘルシングの者達の首を、このD I Oの前に捧げたいという者はいるか？」

暗闇の中から一人の影が前に出る。

全身を黒い甲冑に包んだ影。

男か女かの判別はつかない。そして彼の正体を知るのは三人。
D I Oとスカリエッティ、そして……………

「D I O様、そろそろお休みになられる時間です」

一人の少女がD I Oに言う。
少女の名はエリス。

D I Oの最初期からの配下であり、彼が、最も近くに置く者である。何故ならばD I Oの寝室に許可なく立ち入る事が出来るのは、彼女だけであり、彼の甲冑の中身を知る者の最後の一人でもある。もしやD I Oの愛人ではとの噂もあるが、真偽は定かではない。分かるのは、D I Oが只ならぬ信頼を寄せているという事だけ……。

「そういえば、そんな時間だ……」

それとオルクス。お前の出番は早い。

品の無い男故に捨て駒としたがチャールズは優れたスタンド使いだ。能力的に相性の悪いお前では相手にすらならん。そうだな……
貴様などはどうだ、ナーシス・ピースレス」

全身有名ブランドで着飾り両耳に金のイヤリング、黒の基調に金の刺繍が入る長ズボンにベスト、その上に白い毛皮のジャケット、背には逆十字のマークという奇妙な服装の男が前に出る。

「お任せ下さいD I O様！

この私がヘルシングなどという無粋な輩を塵として見せましょう！」
わたくし

「そうか、期待しているぞ。

念の為護衛としてトーレも付けよう」

そう言い残すとD I Oは去っていった。

後にはナーシス・ピースレスとオルクスだけが残った。

「おい、ナーシス。

一つだけ言っておく事がある」

「なんだい、オルクス。

この私に出来ることならば言ってくれよ」

「この女は私の獲物だ。
生かしておけ」

一枚の写真を渡す。

そこに写るのは一人の女性。

「エース・オブ・エース高町なのは。
ストライカー級魔導師の中でもトップクラスの実力だけど……君が
気にする程じゃあないだろう」

「個人的な事情だ。

この女には仮がある。私の手で返したい」

そこまで言われたならば仕方ない。

何故ならこの騎士はDIOにこそ及ばないものの、アープにおいてもナンバーツーと恐れられる程の実力者なのだ。DIOからの信用も厚い。

「君程の者に、そこまで言われては無視する訳にもいきません。
このナース・ピースレスに全てお任せを！」

（偉そうに……だが何時の日か貴方、そしてDIO様……じゃないくて、DIOですらこの私の前^{わたくし}に跪かせてあげましょう！何故ならばこの私こそ正義なのですから！）

チャールズ・アトラス

スタンド名：ビック・マッスル
死亡、遺体は日の出と共に消滅。

第24話（後書き）

スタンドリスト更新しました。

第25話

「トレーニング」

「ふぁあ……もう朝か」

お父さんとギン姉も頑張ってるかな……

そっだ、ティアを起こさないと……」

二段ベッドから飛び降りて、ぐっすり眠っているティアナをゆする。

「ティア」。起きてよ」

「うう………はっ！今何時！」

「えと、も七時だよ」

「嘘だッ！」

「嘘じゃないよ。ほら」

確かに目覚まし時計は七を示していた。
訓練開始は七時半。

「やばッ。急いで朝食食べないと！」

慌てて飛び起きると、せつせと着替えて食堂へ向かった。
これだけで五分の時間を費やした。
食堂に到着すると、急いでパンを頬張り訓練場へ向かう。

本格的な訓練初日から遅刻なんて目も当てられない。

ティアナとスバルの全力疾走の甲斐あってか、どうにか時間ピッタリに訓練場に到着した。

既にエリオとキャロ……………そしてディオが立っていた。

「あれ、今日はなのはさんは……………」

「今回の訓練は、スタンドの精密操作基礎的な事についてだからね。この部隊のスタンド使いは、私と君達の五人だけだし、私以上にスタンドに詳しい者はいない。

その為の処置だよ。……………部隊の方は、私の副官と八神艦長に任せておいた。

他に質問はあるかい？」

特に質問はなかった。

ディオは最初に、準備運動とランニングをさせると、ディスプレイを操作する。

出現したのは市街地、最先端の魔法技術により生み出された訓練施設である。

「君達にして貰うことは単純だ。スタンドは理論で覚えるものではない。

実際に自分で運用し、体で覚えた方が早く身につく。

そして、それをスムーズに進める為の方法が実戦だ」

ディオの隣に世界が現れた。
ザ・ワールド

「つまりは模擬戦だ。

勝利条件は私に対して……………そうだな、一撃では楽過ぎる、五回だな。

私に五回ダメージを与えた時点で終了だ。
ハンデとして私は、魔法、それにスタンドの真の力は使わない。
質問は？」

エリオが手を上げた。

頷きながらディオがエリオに発言を許す。

「僕達はスタンド能力や魔法……………全て使ってもいいのでしょうか？」

「無論だ。指揮官は今回もティアナにやって貰う。
私を殺すつもりで、遠慮せずに来い」

そう言う Dio の居る場所に魔方阵が現れ消えていく。
どうやら、この場で戦うのではなく、市街地でのゲリラ戦を行うらしい。

「さてと！こんな所でボサッとしても何も始まらないわ。
先ずは作戦だけど……………いい手段がある奴はいる？」

ティアナが三人を見回して言う。
初の実戦をした事で、少し指揮官という立場にも慣れたようだ。

「ええと、隊長は前の時の能力も魔法も使わないって言ってましたし、スバルさんとエリオくんが、前衛でティアナさんが中衛、私とフリードが後衛というのがいいと思います」

キヤロの提案にティアナも頷く。
だが……

「それもいいけど、あれだけ言うって事は隊長には、私達全員と戦って勝ち残る自信があるってことでしょ。そうね……………」
「うういのはどう？」

ティアナは三人だけに聞こえるように、ボソボソという。

「いいね、それ。」

やろっティア！」

「僕もいいと思います」

「私も！」

作戦は決まった。

四人はそれぞれの役目をこなす為の準備を始めた。

その頃、デイオの方は市街地の真ん中で、堂々と立っていた。
正直な本音としては、これほど有利な条件を与えたのだから、五回ぐらい出来なければ困るというものだ。

デイオの世界が^{ザ・ワールド}真の力を使っただけならば、新人四人に勝機は愚か、デイオに触れることさえ出来ずに全滅する。

だが時間停止は使わず、魔法も使わない。

それに一対一なら兎も角として、四対一だ。

ティアナが愚かな指揮官じゃあない限り、達成可能な勝利条件の筈だ。

「さて……………」
近付いてくる人影は…………四人か。少ないな。
それに、一つは空を飛んできている、これはキャロだな。
となると地面を走るのは……………成る程」

感じる、背後のビルに三人隠れている。

魔法を使わずとも、ディオは吸血鬼としての優れた聴覚で、見えな
い敵を察知する事が可能だった。

フォワード四人はそんなこと知る由も無いが、こんな見晴らしのい
い場所に立たれているのだから、奇襲は無駄だろう。背後に回った
のは、念には念を入れたに過ぎない。

「準備はいいわね、

3……………2……………1……………GO！」

ティアナの念話終了と共に、四人は一斉に動き出す。
予定通り、前衛はスバルとエリオだ。

「行け、リベリアン！」

蒼いスタンド。

スバルとスタンドの連携攻撃。

それに対してディオも、ザ・ワールドで対抗する。

パワーはほぼ互角、だが精密動作に関しては、ディオの方が上！

だがディオが相手にしなければならぬのは、スバルだけじゃあな
い。

背後からの悪寒！反射的に足で払う。

エリオだ、槍を構えたエリオが、ディオを狙っていたのだ。

「特別訓練校の教官達はいいい指導をしているッ！

だが……………貧弱貧弱ウ！」

ワールドが二人を同時に蹴り飛ばす。

少しだけ四人を甘く見すぎていた。

ここは一旦距離をとろう。

そうディオが思った時には、遅かった。

フリードの火炎がディオを襲う。

あれだけの高温、BJを纏っている以上は、致命傷には至らないだろうが、結構な痛手を被ることは、正に火を見るより明らかだ。

「クツクツ！やるじゃあないかッ！

だが我がザ・ワールドの力！侮ってもらって困るなあ」

以外！ディオは火を避けると思ったが、とった行動は逆！

逆に火に向かって突っ込んだ！

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アーーーーッ！」

無茶苦茶！ザ・ワールド世界のラッシュによる風圧で、無理矢理火を吹き飛ばして進む！

「認めよう！これで一撃！

そしれキャラ！同時にお前の脱落だッ！」

「それは……………まだ分かりません」

「なにッ！」

驚愕！何故ならキャラの姿をしていた者が、突然ティアナへと変わったのだから。

そう、変身魔法。フリードはキャラの龍という先入観を活かしたトリック。

「クロスファイアシュート！」

オレンジ色の魔力弾。
数にして十七！

それだけじゃない。ティアナの銃口は依然としてディオに向けられたまま。

この距離、この体制………全てを避けきる事は不可能！

「チィー！だが甘いわア！」

止まらない、そのまま前進！

二発ほど掠ったが、勝利条件達成まで残り二撃分残っている。

「うつつうおおおりゃああああー……ッ！」

それを邪魔したのはスバル！

既にティアナの指示で上空に上がってきていたのだ。

「ほう………」

純粋なパワー比べ。

ディオの世界が押されている！
ザ・ワールド

「成る程」。

これがキャロのスタンド『スムーズ・クリミナル』
ちから
他者の能力を底上げする能力という事か。

純粋なる力比べにおいて、このディオのザ・ワールドが押されるとは……」

まともに受けきれないならば、受け流せばいい。

ディオは全く焦らず、スバルのリベリアン・ガールを受け流そうとして……

”二人”のエリオに襲撃された！

「上手い！この状況、それにこの能力は、エリオの『ヒストリー・ゴースト』か！

一人ならまだしも、二人相手を防ぐのは、このディオの力を持ってしてもチト難しい。

そしてエ！」

銃口を向けたままのティアナ。

ディオの腕は二人のエリオを抑えていて使えない。
ザ・ワールドはリベリアンガールを抑えている。

「……………見事だ。

この状況そして状態。私もザ・ワールドの真の能力を使わずに、無傷で脱出する事は不可能だ。

フフフ、私はいい部下を持ったようだ。

これで訓練は終了だよ」

満身創痍。

この短い間に、四人は全員力を出し尽くしたのだ。

「午前はこれで終了だ。

午後からは私ではなく高町一等空尉が担当となる。
それまでよく休め」

最後にそう言うディオは、次の仕事があるので、戻っていく。
訓練場を出ると、なのはが待っていた。

「どうでした、ディオさん。
四人の調子は？」

「スタンド能力も優れている。溢れる若さと情熱、そして精神力に満ちている。

特にティアナ……………彼女は一指揮官で終わる器じゃあない。いずれは部隊を率いる立場になるだろう。

ティアナも含めて、ああいうタイプは叩けた叩くほど伸びるだろうな。

なのは君には、是非とも厳しく指導して欲しい」

「にはは、了解です」

ピタッ！

止まる、ディオが。

そして振り返り言った。

「……………なのは君、君もいい大人なのだから『にはは』は止めた方がいいのじゃあないかい？」

「え、変ですか？」

「変とまでは言わないが、公式の場では止めた方がいい。
勿論強制は出来ないが……………」

「……………はい」

自分の今までの笑い方を否定されて、少しだけ凹んだ、なのはであった。

[illegible]

,

50万PV突破記念！没ネタ六連発！（前書き）

これは、私が小説を書く上でプロット段階でお蔵入りとなった、小説を紹介するコーナーです。もしかしたらヴァンパイア・オブ・リリカルが完結した後の、次回策となるかもしれませんが……。

ちなみに本編とは全く関係ないのであしからず……。

50万PV突破記念！没ネタ六連発！

最初はこれ！

第五次聖杯戦争。

それに参加する魔術師の一人、遠坂凜。

彼女の呼び出したサーヴァント、それは……

「アーチャーのサーヴァント。

ディアボロ。召喚に従い参上したッ！」

マフィアの首領^{ボス}

である帝王だった！

時間を吹き飛ばし、未来を読むキング・クリムゾン！

敵対するサーヴァントを次々と薙ぎ倒し、イレギュラーのサーヴァントである英雄王との対決を迎えた。

「フン！死に恐怖して守護者へと堕ちた雑種風情が帝王だと？
クッハハハハハハ、笑わせるなよ、雑種。

王とは天上天下にこの我唯一人！それ以外は単なる愚昧よッ！」

「流石は英雄王……私は、その圧倒的なまでの精神力に尊敬の念
を持つ！」

よって私も全力でお前を殺そうッ！」

「天地乖離――す開闢の星！」
エヌマ・エリシュ

「キング・クリムゾン！」

瞬間、全ての時間が消し飛んだ。

「読める！未来への動きへの軌跡がッ！

『キング・クリムゾン』の能力の中では、全ての時間は消し飛び点店
そして全ての人間は、この時間の中で動いた足跡を覚えてはいない
ッ！

そう、世界を切った剣ですらも！

私だけが、この動きに対応できる！！

お前が如何動くか全て見える！

これが『キング・クリムゾン』の能力だ！」

通常の時間軸に戻った瞬間

英雄王の頭蓋骨をキング・クリムゾンが握りつぶした。

そして最後の決着！

「貴方に帝王たる資格はないッ！」

「否だ、騎士王！」

帝王はこのディアボロだ！

依然変わりなくッ！」

奇跡の釜たる聖杯を手にするのは
未来を求めるディアボロか…

過去の改竄を願うセイバーか…

答えは……神のみぞ知るッ！

P a s s i o n e / s t a y n i g h t

〈ディアボロの奇妙な聖杯戦争〉

第二弾！

最初が続いて、またまたF a t e ！

空条承太郎はSPW財団からの依頼で、ここ冬木市へと訪れていた。理由は10年前に冬木市で起きた大災害の原因究明、及び原因の排除！

そして夜の街を搜索する承太郎は信じがたいものを見るッ！

夜の街に浮かぶ雪の妖精、そして背後に聳え立つ、現世に蘇った英雄！

承太郎は聖杯戦争の存在を知ったッ！

彼は搜索過程で知り合った遠坂凜の協力で、英霊召喚を行う。だが彼は、まだ聖杯戦争について知識が足らなかった。

通常なら呼び出されるサーヴァントは、召喚に使つ触媒で、ある程

度は特定出来る。

聖剣の鞘、蛇の脱け殻、など数多い。

しかし、もし触媒無しで召喚した場合、召喚者自身が触媒となる。

例えば前回の聖杯戦争では、殺人鬼が呼び出した英霊は、やはり殺人狂だった。

そして空条承太郎……いやジョースター家の末裔にとって、最も縁のある男といえは……

「なっ……馬鹿な……テメエは……」

「クックククッ、どうした承太郎？幽霊でも見たような顔をしているぞ。

アサシンのサーヴァント、召喚に従い参上したッ！

これから宜しく頼むよ、マスター」

そう……承太郎が召喚したサーヴァント。

それはジョースター家にとっての仇敵DIOだったッ！

三回目！

今度はゼロ魔！

アンリエッタは悩んでいた。

退屈な王宮での生活、擦り寄ってくる大臣達……

彼女は友人を求め、そして、ふとした拍子に、自身の幼馴染である

ルイズが、使い魔召喚の儀式を行っている頃だと思うと……………彼女もまた使い魔召喚の為の詠唱を唱え始めた。

「我が名はアンリエッタ・ド・トリステイン。

我に従うべき使い魔よ、私の導きに答えなさい！」

魔法は一発で成功！

空間にゲートが開かれる。

そしてやがて一つの影が現れる…

出てきたのは……………

血塗れの皇帝だった！

これが後の世に、トリステイン王国宰相となる使い魔であり、元の世界では魔王と恐れられた男、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアとアンリエッタとの出会いだった。

四枚目！モンスターカード！

追加没ネタ！

今度はネギま！

URYYYYYYYYYYYYYY！！

学園に呪いによって閉じ込められた真祖の吸血鬼
エヴァンジェリンはある儀式をしていた。

それは古来より伝わる、最高の従者を呼び出すための召喚術。
便利な魔法だが、リスクはあるッ！この儀式によって呼び出される
魔獣はどれも一級品。

つまり呼び出した途端に、殺される確率があるのだ！

だがエヴァンジェリンは止まらない。
そして儀式が終わり……………一人の、

一人の幼稚園児が現れたッ！

「ねえねえ、綺麗なお姉さん。
オラとドライブに行かない」

「出てきて早々に茶々丸を口説くな！」

この物語は真祖の吸血鬼と五歳の幼稚園児が繰り広げる、嵐を呼ぶ
かもしれないような物語である！

五回目はなんと……………

サクラ大戦だッ！

しかもFateとのクロス！

『帝国華撃団・花組。参上!』

しかし彼女達が上野に到着した時に見たもの……
それは猛威を振るう魔ではなかった。

代わりに居たのは一人の男。

魔には、傍から見ても、強力な霊力を感じる剣が突き刺さっている。

余りにも……余りにも現実離れた光景に、花組の乙女達は開いた口が塞がらない。

そして炎の中に悠然と佇む男は、開口一番こう言った。

「その傀儡ども、王の前で頭が高いぞ。

先ずはそのガラクタから降りるが礼であろう!」

目は深紅、髪はインゴットのようなゴールド。

それが最古の英雄王と花組の乙女達の出会いだった……

ラストはジャンプの看板作品、二つのクロス!
当ててみよう!

海軍元帥、仏のセンゴクには悩みがあった。
それは少し前に海軍本部に配属された一人の男。

結果だけを見れば凄まじいの一言だ。

彼が捕まえた海賊の数は、既に海軍でもトップ。
これだけを聞けば、どれだけ素晴らしい戦力が、海軍に入ってくれたのだと喜ぶべきだろう。

そう……これだけなら本当に良かった、
そう思うのだ。

もう一枚の書類を見る。

それにはこう記されていた。

今までに書いた始末書の数『ダントツの一位』

しかも内容が凄い。

賄賂などといった、普通のものから……

果ては海軍支部の爆破、訓練校の破壊、街に火がついた、軍艦を沈めた……etc……

先日には四皇の一人である白ヒゲに喧嘩を売ったというのがある。

「はあ……だが、こいつの場合、クビにしたら海賊になるからな

……
せめて海軍にいただけ幸いと思わねば……」

ちょっと前から飲み始めた胃薬を取る。

その人物の履歴書の名前には、こう記入されていた。

『両津勘吉』

ジャンプにおいて三十年以上の時を戦い続けている猛者の名が、そこには示されていた！

第26話

ⅡⅡ 第12管理世界ⅡⅡ

元航空艦ギガンテスは先日レリック反応を探知した場所、第12管理世界へと向かっていた。
その世界は、文化的、技術的に日本によく似た世界である。

「それで何でしょうか」

スバルとティアナの二人は揃って部隊長室に呼び出されていた。
部隊長室だけあって、部屋は新人四人は勿論、隊長陣の使う物よりも広い。

それに壁には、何所から集めたのか、様々な絵画などがあり、ワインも飾られている。
恐らくは部屋の主であるディオの趣味だろう。

「ああ、楽にしてくれ。」

君達を呼んだのは他でもない。はやて君、頼む」

はやてが前に出る。

「二人には、実は潜入捜査をお願いしたいんよ」

「せ、潜入捜査ですか!？」

スバルが思わず素っ頓狂な声をあげた。

潜入捜査と聞くと、どうしてかスパイなどを思い浮かべてしまう。

少なくとも、新人四人にやらせる仕事ではない。

「そんな深く考えんでええよ。

潜入捜査言うても、実際はレリックがあると思われる街へ行つて、色々を見て回ってくればええから。

ちよつとしたショッピングにでも行くつもりで、やって貰いたいんやけど。

如何しても自分達には向かないって言うんなら、他の隊員に代えるけど……どや？」

要するに、念のため、街に危険がないか探ってくれという事だろう。潜入捜査と聞いた時には、怪しい企業にでも潜入するのかと思つたが、その程度なら問題はない。

「分かりました、やらせて頂きます」

ティアナが言うとおスバルも続く。

二人も最初は簡単な任務になると思つていた……
そう最初は……

「『乙女』」

「ティア、何所にいるの？」

第12管理世界の街に来て、一時間。
スバルは絶賛迷子中だった。

「はあ、あそこでアイスに気をとられたから……」

だが仕方ないじゃないか、とスバルは思う。

新作ラーメンアイスなんて表記を見たら誰だって気を取られるに決まっている。

だが結果としてティアナと逸れ、一人で街を徘徊する羽目になったのだが……

しかも、こんな時に限って携帯を忘れている、念話という手段もあるが、余りに距離が離れていると、それも難しい。もし敵が近くに潜伏していた場合、最悪盗聴される恐れすらある。

「やっぱり、警察に言った方がいいのかなあ……」

だがスバル・ナカジマは考える。

潜入捜査に来ていながら、現地の警察に迷子になりましたと言う、管理局員。

間違いなく、管理局の信用問題になるだろう。

「君どうしたの？」

もしかして迷子ですか？」

「ほえ……」

いきなり話しかけられた事に、驚き振り向く。

そこには一人の……同年代くらいの少年がいた。目は透き通るようなブルー、髪はゴールド。

何故だがスバルは、自分の部隊の隊長であるディオを思い出した。

「いや、だから迷子？」

「あ、はい迷子です！」

慌てて言った為、大声になってしまふ。

「そんなに大声を出さなくてもいいじゃあないか。
どうだい、良かったら僕が案内しようか」

「いいんですか！」

「いや、だからそんなに大声出さなくても……」

こうしてスバルは、この少年と一緒に街を回ることになったのだ。

「ところでさ、ええと……」

「ああ、僕の名前はティノ・ブラン……ブラウンだ。
ところで君は？」

「私はスバル・ナカジマ。
スバルって呼んで。」

それで、ティノはこの街の人なの？」

「違うよ。僕もまあ観光客みたいなものだよ。
この街に来たのも昨日だし」

昨日という言葉に驚く。

それと同時に、ティノの案内に従っても大丈夫なのかという、疑問が浮かんだ。

「心配しなくていいよ。」

昨日だけで、この街の裏路地まで全部覚えたからね」

「昨日だけで！……ティノって頭良いんだ」

「いやいや、こんなの父ほどじゃあないさ」

「ふん、ティノってお父さんの事が好きなんだ」

そう言うとティノは、少しだけ困ったように頭を掻く。

「いや、好きという感情とは違うかな。」

好きというのは、つまり理屈ではなく、その存在に対して好意を持つという事だ。

僕が父に対して抱くのは”尊敬”！

勇気を！彼の魂を！^{パワー}力を尊敬している……」

と言われても、スバルには彼の言う事が、いま一つピンとこない。

「良くわかんないけど、ティノがお父さんが大好きだっていうのは、よく分かったよ！」

「へ？」

「だ・か・ら！そんなにお父さんの事を尊敬してるんなら、大好きなんですよ！お父さんのこと！」

天真爛漫というのは彼女の事を言うのだろう。

全く飾りのない純粋な表情でスバルは言う……

「クツクツクツ……アハハハハハハはハハハハハハハハ！
その発想はなかった、クツクツクツ……」

「そ、そんなに変なと言った、……わたし？」

「いやいやいやいや、何一つ間違ったことは言っていないさ。君のそういう性格………好意を抱くよ」

「っい！……そ、それ如何いうこと！？」

「そのままの意味だよ……」。

おつと君の連れが来たようだ。

それじゃあ馬に蹴られる前に退散するでしょう!」

ティノが指差した方向には、般若のような表情で、こちらへ走ってくるティアナがいた。

「あ、待って！」

だがティノは待たない。

路地裏に入っていくと、やがて姿は見えなくなった。

「どうでした、あのスタンド使いは？」

青いショートヘアの女性がティノと名乗った少年に言った。
少年はまだ笑っている、それほどスバルの言った事がツボに嵌った
のだろうか？

「クツクツクツ……面白かったよ。」

ああいうのはなんだ？……真っ直ぐというのか……いや面白い……それ以外に言葉が浮かばないね」

それだけ言っと、歩き始める。

「戦いを見てはいかないのですか？」

「分かりきった戦いを鑑賞するほど僕は暇じゃあない」

「分かりきった戦い……。」

ではナーシスは敗北すると？」

「そうだ、彼はたぶん細かい作戦など弄さないだろうし、真っ向勝負なら彼女が、ナーシスに負けるとは思えないね」

「ですが、スタンド能力の相性は悪くありません。いえ……相性だけならナーシスが有利の筈ですが？」

「いや……負ける！」

そうでなければ……面白みに欠けるだろう」

最後に意味深な事を言っと、ティノは去っていった。後には、トーレー一人が残された。

その頃、スバルとティアナは……

「馬鹿！何で任務中に迷子になんてなるのよ！」

「だ、だって〜」

必死に言い訳するが、ティアナは愚痴るのを止めない。

実は彼女も、スバルを探して街中を走り回っていたのだ。

だが見つけてみれば、当のスバルは見知らぬ美少年と歩いていた……はつきり言って、文句の二つや三つ出るのは当然だろう。

「大体あんたは、いつもいつ　　ッ！」

「どうしたのティ　　ウッ！」

気付いた時、スバルとティアナ二人の前には一人の男がいた。

全身をブランドの服で統一した、美男子、なのに何故か不快感を抱く。

「始めまして、私の名はナースィス・ピースレス^{わたくし}。

早速で悪いですが………

激しく死んで下さい、頼みますッ！」

ナースィスが腕を振り下ろすと同時に、ギガンテスのレーダーは、大量のヒュートの出現を察知した。

第26話（後書き）

テイノの父親が誰か……
分かりますよね？

第27話

〓〓奇襲鮮烈〓〓

「やられたッ！」

ディオが思わず、壁を殴る。

つい先程レリック反応を察知したヘルシング。

だがモニターに映ったのは、赤く輝くレリックではなく、ブランドの服に身を包んだ男。

同時に大量のヒュートの出現……

「どうやら……まんまと敵の罠に嵌ったようやな……」

艦長席のはやても深刻そうにディスプレイを見つめる。

何故なら、敵スタンド使いの前にいるのは、スバルとティアナの二人……

スタンド能力は多種多様だ。

最悪の場合、次の瞬間には、スバルとティアナが死んでました、テヘ（笑）なんていう事態になりかねない。

「ここで二人を失うわけにはいかん。

高町一等空尉、シグナム二尉、ヴィータ三尉に連絡を！

エリオとキャロも出せ！」

ディオは歯噛みする。

未だ空には燦燦と太陽が光っていた。

つまり……彼は戦闘不能。

「死んで下さい？どこに死ねって言われて死ぬ馬鹿がいるのよ。それより…………貴方…新手のスタンド使いね！？」

「ご名答！そしてサヨナラ！」

容赦がない…………

話していると思ったら突然攻撃してきた。

一応、管理局のスタンド使いと遭遇した場合のマニュアルには、最初に説得&勧誘とある。

それは管理局が優秀なスタンド使いを強く欲しているという意味なのだが…………この相手には話し合いは無用だとティアナは判断した。

「スバル！…………敵のヒュートも出てきたみたいだし、正直言ってなのはさん達の援軍が来るのは、遅くなるわ…………」

「…………それじゃあティアはどうするの？逃げる？」

笑顔、それは相手を完全に信頼した者だけが浮かべられる表情。事実としてスバルには、ティアナが言うであろう言葉が、完璧に予想可能だった。

「逃げる？……………冗談言わないで。

二人であいつをブツ倒すわよ！」

「了解」

一度実戦を経験したお陰だろう。
初陣の時のような緊張感は薄い。

訓練されていた四人でのフォーメーションは二人なので不可能。
必然的に配属前からのフォーメーションで戦うしかない。

「スバル！」

「OK！」

スバルの隣にリベリアン・ガールが現れた。

スタンドと本体との同時攻撃。

これを防げるのは、スタンド使いかエース級の魔導師くらいだ。

そんな猛攻を見てもナーシスの表情は変わらない。

それは余裕！二つの猛攻が自分という”強者”には絶対に触れられないという余裕！

「ビリー・ジーン、出なさい」

出した、スタンドを！

どうやらスバルと同じ人型のスタンドのようだった。

黄金の鎧で覆われた細身の体、そして鎧に描かれた道路標識のマークは、正直に言ってセンスが悪い。

（どうくる……！）

ティアナは敵のスタンドを凝視する。

魔法とスタンド能力、どちらも強力な力だが、大きく違う点がある。
それは応用力。

飛行、攻撃、治癒、防御、結界、検索、調査などなど、魔法はとも汎用性の高い力だ。

だがスタンド能力は違う。

一つ一つのスタンドが別の能力を持っており、余り汎用性が高いとは言えない。

強力な能力もあれば、実に下らない能力もある。

いや、だからこそ戦いにおいてスタンド使いほど恐ろしい存在はいない。

相手が自分と同じ、もしくは自分よりも上の性能の武器を持っているというなら、まだいい。

しかし全くどんな攻撃方法をしてくるか理解出来ない相手ほど、恐ろしい敵はいないのだ。

「おりゃあああああ！」

スバルが迫る！

だが動かない！ナーシスはあの場合から一歩たりとも、デコピンするような小さな動きすらしない！

ただ黙って、余裕の顔でスバルを眺めるのみッ！

やがてスバルがナーシスの正面に到達する。

不可解だが行動を止める理由はない。

スバルは思いっきりナーシスの腹をブン殴った！

「え？」

驚くスバル。

理由は単純、スバルの拳はナーシスの体を通して空を切っていたのだ。

「うつ、もう一回!」

何度も何度もナーシスの体を殴る、蹴る、ひっぱ叩く。
もしやと思いティアナに確認したが、魔法じゃあなかった。
つまりこれは…… ナーシスのスタンド能力だという事だ。

「どうです!

このナーシス・ピースレスのビリー・ジーンは?

貴女が見ているこの私!

それは貴女の狂った感覚が見ている偽りの私なのです!」

「「狂っている!?!」」

「その通り! 貴女達は狂っている!」

狂っているのはお前だ!

そう叫びたいがそんな暇は無い。

「狂っている」のが何かは分らないが、このままでは相手のペースに巻き込まれる。

「忠告しますが、貴女達の抵抗は無意味です。

真の強者の前では、貴女達のような弱者には敗北という運命しかないのですッ!」

「うつさいわね!

アンター一体全体何様のつもり!」

「ナーシス様ですけど、なにか?」

ティアナは判断する、こいつには何を言っても通じないと判断した！
能力はまだ使わない。

自分の能力が使えるのは、一日にたったの六回。
こんな序盤で使うようなものじゃあない。

「クロスファイヤー……………」

教官のなのはから教わった魔法。

この数での同時攻撃。

狙いはナーシスの本体。

「シュート！」

繰り出される十の魔弾。

オレンジ色のソレ等は、ティアナのイメージ通りにナーシスへと…

……向かわなかった。

「嘘ッ！」

思わず叫ぶ。

ティアナの放った魔弾の数々は全くの想定外の方向へと向かい、想定外の距離へと飛び、周りの建物などを破壊していく。

有り得ない、確かに少し方向がずれるのは有り得るが、これ程までに滅茶苦茶な方向へ飛ぶなど有り得ない。

「どういうこと？」

魔力弾が方向も距離も滅茶苦茶な所に

まさかッ！」

「おや、気付いたのですか？」

私のビリー・ジーンの能力に。

どうやら少しは聡明のようです！
尤も、分った所で貴女に勝ち目などないでしょうが…」

ナーシスの反応からすると当たりだろう。
歯噛みする。

まさかこれほど強力な能力だとは…

「スバル、気をつけなさい！こいつの能力は”相手の距離感と方向感覚をずらす”ことよ、恐らく！」

「え？　ずれるとどうなるの？」

「馬鹿スバル！いいこの二つがずれるという事は、攻撃が全くの見当違いの方向へ向かうってことよ！

アンタの攻撃がすり抜けたのもそう！いい！？

アンタが攻撃したナーシスはもっと別の場所、別の距離にいて、ア
ンタは見当違いの場所にいつが居ると錯覚したのよ！」

「っ、つまり？」

「大ピンチって事よ……」

忌々しくティアナはそう呟いた。

〓 〓 戦闘機人 〓 〓

スバルとティアナがナーシスと交戦している間、艦内でも多くの人

間が忙しく動き回っていた。

部隊長であるディオは、さっきからずっとティアナとスバルに通信を試みているのだが、どうにも電波が繋がらない。

これはナーシスの能力で、電波すら方向感覚がずれてしまっている為に、繋がらないのだが、そんなことディオが知る筈も無い。

「部隊長！敵ヒュートの中に生命反応！」

「なに、魔導師か？」

「分かりません…………映像出ます！」

ディスプレイに生命反応の主が映し出された。

女性だ、正確な年齢は分からないが、外見的にはなのは程だろう。青いショートヘアに黄色い目をしている。

「こ、これは…………。」

間違いない、戦闘機人だ！」

「戦闘機人？」

なんなんですか、それは？」

ブリッジ要員の一人が、聞き返した。

他にも不思議そうな顔をしている者が何人か…………。

「…………君はイレクオス戦線を知っているかね？」

「勿論ですよ。管理局とアープが本格的に激突した最初の戦闘にして最大の戦闘ですから」

「そうだ、ちなみにアープ軍がヒュートとスタンド使いを実戦投入したのも、この戦闘が初だ。
だがその戦場でヒュートとスタンド使いのせいで余り目立たなかったが、多大なる戦果をあげたのが戦闘機人だ」

デイオは語る。

戦闘機人とは、文字通り機械と人との融合体。

AMF内においてもISという名の魔法ともスタンド能力とも違う固有技能により戦闘を可能とし、人を超えたパワーを持つ存在。

「あの顔は、管理局のデータファイルで見た事がある。

間違いなくジェイル・スカリエツィの手で造られた戦闘機人だ」

こうなると生半可な事をすれば、迎撃に失敗して艦が沈むなんて事態になり兼ねない。

出来れば隊長クラス一人はスバルとティアナの救援に向かわせたかったが、そうもいかない。

「隊長陣の中で一番接近戦に優れているのは……やはりシグナム二等空尉か。

よし、高町一等空尉及びヴィータ三等空尉はヒュートを！シグナム二等空尉は敵戦闘機人を相手しろ！

新人二人は、スバルとティアナの救援だ、急げッ！」

デイオはもう一度、回線进行操作する。

未だにティアナとスバルには繋がらない。

考えられる可能性は電波妨害か、なんらかの能力か、それとも死んだか…。

（スバルにティアナ、ここで死ねばそれまでの器だったか…。

他にも変えはあるが、私の見る限りでは、あの二人が最もエネルギーに溢れていた。

この苦難、乗り越えるか、それとも沈むか……）

第28話

〓 〓 知略 〓 〓

（どうする！？このままじゃあ勝てないッ！）

ナーシスを睨みながら、ティアナは思考する。

こちらの攻撃は全て見当違いの場所へ飛んでいき、ナーシスに当たる事はない。

それどころか、どこへ飛ぶか分からない攻撃は、相棒であるスバルを攻撃してしまうかもしれないし、その逆もまた然りだ。

「フフフ、どうしましたかアアア！」

そんなところで膝なんかついて死にたいんですかアアアアアア！？」

「スバル、避けて！」

「へっ？」

スバルの後ろにはナーシスのスタンドの姿。

咄嗟にスバルは、リベリアン・ガールで防御する。

だがこれで終わるスバルじゃない。

ナーシスの攻撃を受け止めると、カウンターの一撃を叩き込む。

「チッ！」

慌ててナーシスが後退する。

どうやら、彼のスタンドはパワーはそれ程じゃあないようだ。

「待て！」

「断る！」

ナーシスを追うスバル。

そして追い込むと拳を思いっきり叩き込んだ。

「ガハッ……」

しかしスバルが拳を叩き込んだのはナーシスではない。

ティアナだ。見当違いの場所に放たれた攻撃は、運悪くティアナを攻撃してしまったのだ。

「グウウ……」

「ご、ごめん、ティアナ……」

腹の辺りを押さえて蹲るティアナ。
心成しか息も荒い。

「大丈夫よ、アンタのへなちょこパンチなんて効かないわよ！」

「で、でも……」

「でもない！アンタはあいつの動きに集中してなさいッ！」

「わ、分かった」

（はぁ、勿論へなちょこパンチなんて嘘。間違はなくあばらがやら

れてるわね。

この状態でどうやって、あのウザッたい男を倒せるだろうか？
何が弱点がある筈だ、部隊長の能力だって万能じゃあないんだ！な
にか条件みたいなものは！？）

そんな時だった。

「ティアナさん、スバルさん！
加勢に来ました！」

援軍に来たであろうエリオとキャロ、そしてその龍であるフリード。

「な、あんた達！」

不味い！激しく不味い！

普通なら援軍は喜ばしいのだが、今回はそうじゃあないッ！
ナーシスのスタンドは敵が多ければ多いほど効果を増すスタンド！
何故なら数が多いほど混乱は多くなるし、同士討ちも凄惨となるか
らだッ！

「これは、これは新しいお客さんだ」

「い、何時の間に背後に！？」

既にエリオとキャロの背後には、あの男がいた。

咄嗟にスタンドを出そうとするエリオだが、間に合わない。

ナーシスのスタンドにエリオは、三十メートル程の距離を吹っ飛ば
された。

「フリード！」

フリードの尻尾がナーシスに振る。
正確に振るわれたそれが、ナーシスの頬に僅かな、ほんの僅かな血を付けた。

「この美しい顔に傷を!？」

こ、これは人類の損失!なんてことをオ!

どうやらかなり頭にきたらしいナーシスは、キャロを歪んだ表情で見つめると、その頬を引つ叩いた。

「どうすれば……」

(無敵だ!あいつのスタンド能力!

こちらの攻撃は全て相手には通じない、どうすれば…)

そこでティアナはふと思い出す。

あの時、フリードの振るった尻尾は如何してナーシスを傷つけられたのだろうか?

単なる偶然?ナーシスの油断?

(そうか!あいつのスタンドの弱点、それは能力を使用している間は攻撃には移れない事だ!

だからこそ奴の攻撃をスバルは受け止められた!フリードは奴に傷を付けられた!ならばッ!)

「三人とも、聞きなさい」

「ティア、何かいい作戦を思いついたの?」

「そうよ、今から私が言う事に従って、これは賭け！
だけど勝算があるッ！」

「おや、全く動こうとしませんが、どうやら諦めたようですね」

四人は動かなかった。

スバルは立ったまま、エリオは壁に寄りかかったまま、キャロとフリードは荒い呼吸で、ティアナは地面に膝をつけている。

「フッフ、ヘルシング隊というのも大した事はなかった。

このナーシスの前には管理局のスタンド使いなんてチンカス同然でしたね」

「.....」

挑発しても全く動こうとはしない。

これはナーシスにとって不味い状況だった。

彼のスタンドの特性上、一対一の戦いは苦手だ。

寧ろ敵が多ければ多いほど力を増すと言ってもいい。

何故なら敵が攻撃する度に、それは敵自身を傷つける結果となるからだ。

しかし敵が全く動こうとしなければどうか？

それは無力、余りにも無力。

同士討ちを狙う事に特化したナーシスのスタンド能力は、敵に無視

される事が最も痛手なのだ。

（フン！仕方のない。

まあこんな腑抜けた者達なら能力を一時的に解除して、我がビリー・ジーン的能力で殴ればよい！）

手始めにとスバルに近付く。

魔導師ではないナーシスの攻撃手段はスタンドだけだ。

そしてビリー・ジーンは一般的な近距離パワー型のような力はない。基本スペックで上回るスバルのリベリアン・ガールはちょっとした脅威なのだ。

（ふふふ、良い眺めだ。抵抗出来ない敵を一方的に甚振るといふのは。

さてと……）

「死ねえエエエエツ

！」

「NO！NO！NO！
YOU LOSE！」

「へっ」

ナーシスは動かない体を疑問に思う、
何で如何して自分の体は動かないんだと。

簡単だった。

人は足がなければ歩けない。
そう今のナーシスには足が無かった。

「アンタが最初にスバルを狙うっていうのは読んでいた。
そしてアンタみたいな臆病者は絶対に敵を背後から襲う、全部計画
通りだったわね」

「き、貴様ア ツ！わ、我に！

この我になにをしちよるかアアアアアアア！」

「馬鹿ね、スバルに近付いたアンタの不細工な足を私のリボルバー
で吹っ飛ばしたのよ。

Do you understand?」

「わ、わわわわ！我としたことがあ！！？」

「さあ能力を発動する前に、任せたわよスバル」

ナーススがギギギと首を横に動かすと、そこにはなにやらプツン
しているスバル。

「や、やめる我が悪かった。

やめてくれエエエエエエエエ」

「それは無理だよ」

「た、頼む！助けてくれッ！」

「駄目だよ、貴方の為にならない」

「お願いしますッ！降伏します、ほら！
だから痛い目は勘弁……」

スタンドを消し、手を上げるナースィス。
余りに情けない姿に、スバルも。

「駄目、気が乗らない」

（シヨククッ！あの目は殺^ヤる目だッ！

我を殺ることに躊躇がない”覚悟”を秘めた目だ！

い、命乞いは無駄、わ、我は覚悟を決めたッ！

殺すッ！殺される前に殺される！ま、間違った！ブツ殺す前にブツ殺す！ま、また間違えたアアアアアア！そう、殺される前に殺すッ！なんとしてもッ！）

「我の前に…………… テメエが死ねエ

ッ！」

再び出現するナースィスのスタンド！
だが先程とは違う！

（ナースィスのスタンドが変わったッ！？瞳の色がトマトケチャップ
みたいな赤になっているッ！

いや！長期間蜂蜜漬けた苺のように赤く光ってるッ！）

「死ねエ ヅ！」

「うぐッ！」

ビリー・ジーンのパunchをリベリアン・ガールで受け止める。

所詮は最後の足掻きと思い、スバルは軽い気持ちで、それを防ぐ、
が！

（こ、この威力は！パワーがさっきまでとは全然違うッ！

油断した！スタンド使い相手だと最後まで油断しちゃあ駄目なのに！）

スタンドパワーは精神のパワー！

油断するという事は、精神パワーの弱体！即ち！

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ」

「ッ！」

（とっ、突破される！このままじゃ！）

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。鍊鉄召喚、アルケミチエーン」

響くキヤ口の声！

鎖は、容赦なくビリ・ジーンに纏わり付き動きを封じる！

「雷よ、流れろッ！」

続いてエリオが鎖に電撃を流す！

鎖を伝って電撃は、ビリー・ジーンそして本体であるナーシスを、痺れさせるッ！

「ウツキイイイイイイ！痺れるウウウ！でも意外に気持ちいいイイイイイイかもオオオオオオ！」

「さてと決着ね、任せたわよスバル」

「了解」

ナーシスは痺れながらも、自分に迫った危機を認識した。

必死に助けてくれ、と頼むが、それを叶えてやる義理はない。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
ッ！」

容赦ないラッシュがナーシスに炸裂した。

〃 〃 烈火の將と戦鬪機人 〃 〃

「さて相手して貰おうか、**烈火の将**」

「お前は……」

人間らしからぬ機械のような金色の瞳。

戦闘機人、生まれながらに調整を受け、常人を遥かに超える身体能力とスキルを得たもの。

ジェイル・スカリエツィが開発した存在、それが彼女だ。

「哀れな、主が違えば他の道もあつただらうに」

シグナムは彼女を知らない。

しかし如何しても思ってしまう。

自分がもし今の主である八神はやてではなく、スカリエツティを主としていたならば、自分も彼女と同じような立ち位置にいただろうと。

「だが手加減はせん、討たせて貰うぞ」

「出来るものならな」

そして戦闘が始まった。

「トランプ」

「ティノ様、準備は滞りなく完了しました」

「ふふふ、上出来だウーノ。」

流石はドクターの秘書」

ナーススの戦闘結果を、ティノ・ブラウン、いやティノ・ブランドーは見ていた。

これは予測済みの結果。

だが成果はあった。

ヘルシングの脅威は豊富な隊長陣じゃあない。

寧ろ四人の新人達、彼女達が爆発力を発揮すること、それこそが真の脅威だ。

「既に彼女達の周辺一体には強制転移魔方が発動する準備が完了している。

使い古された手段だけに時代遅れ、その穴を付かせて貰おう」

ただし一つの懸念は転移魔法が不完全だった事だ。

大まかにアープの勢力範囲内と設定されているだけで、正確にどことは決まっていない。

これはナーシスが思いのほか早く敗北した事もあるだろう。

「さてと、彼女達がどうなるか興味深いが、生き残れるかな、はたして」

フォワード陣の中で一際聡いティアナは悟った、魔力の波動を！

「これは……まさか転移魔法陣！？」

それも、こんなに巨大な！

キャロ、転送先は分かる？」

「それが上手く設定されてないようで、分かりません！」

悔しげに歯噛みする。

この中で最も補助系統に才覚のあるキャロが分からないのだ。

恐らく自分がやっても無駄だろう。

（やばい。この場から逃げるにしても時間が、時間がないッ！）

それがティアナの最後の思考だった。

巨大な転移術式はフォワード四人を飲み込み、虚空の彼方へと消え去った。

「ぶ、部隊長！だ、大規模転移術式の存在を確認！」

「なに！何処からだッ！」

ブリッジに響く声。

尋常じゃあない声色が、どれだけ切迫した事態なのか、事情を知らない者にも簡単に理解出来るだろう。

「こ、これは…… C - 6！現在フォワード四人の居る場所ですッ！」

「間違いないのか！？」

「はいッ！」

（やられたッ！最初からこのディオの部隊から新人達を孤立させる事が目的だったのか！

それにしても転移術式の存在にすら気付かないとは。

これも敵スタンド使いの能力なのかッ！）

ディオの予想は正しい。

ナーシスのスタンド能力により、その地点の方向感覚、距離感は滅

茶苦茶になっていた。

そしてディオ達にとつての不幸は、ナーシスのスタンドが生物だけではなく機械にも有効だったという事だ。

「認めなくてはならんな、今回はこの俺の敗北だッ！」

スバル・ナカジマ

消息不明、捜査中。

ティアナ・ランスター

消息不明、捜査中。

キャロ・ル・ルシエ

消息不明、捜査中。

エリオ・モンディアル

消息不明、捜査中。

ナーシス・ピースレス

スタンド名：ビリー・ジーン

全身を殴打され重傷、再起不能。

第28話（後書き）

かなり間が空いてすみません。

今回のオリキャラであるナーシスは昞様から頂きました。
昞様ありがとうございます！

最後にオリキャラを応募してくださった方々に今更ながらのお詫を。
作品の都合上、再現しきれない能力、及び設定などがあります。
その点だけはご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9667/>

ヴァンパイア・オブ・リリカル

2010年10月24日19時27分発行